

# 峰一合遺跡

—縄文前期の集落と下呂石による石器群—

2003. 12

岐阜県益田郡下呂町教育委員会

# 峰一合遺跡

—縄文前期の集落と下呂石による石器群—

2003. 12

岐阜県益田郡下呂町教育委員会

題字・曾我英子（教育委員長）

写真・松波民善（教育委員）

## 序 文

岐阜県のはば中央に位置する下呂町は、豊かな自然に恵まれた風光明媚の地であり、日本三名泉の一つに数えられる下呂温泉の町として、全国にも知られています。また、町のシンボルとも言える湯ヶ峰は、旧石器時代の古くから石器の原料として珍重されてきた下呂石を産出する山であり、町内には、遺跡も多く存在しています。

下呂町森に所在する峰一合遺跡は、益田川を眼下に眺める台地の先端部に位置し、縄文前・中期を中心とした集落跡として、また、全国的にも例の少ないパン状炭化物の出土した遺跡として特に著名です。現在は遺跡も縄文公園として整備され、町内外の皆様の憩いの場となっています。

下呂町では、昭和41年から6次に亘り発掘調査を実施しましたが、諸般の事情により調査報告書の刊行が遅れてしまいました。このたび、関係各位のご尽力により、ようやく報告書を刊行できる運びとなりました。行政の長として、最低限の責務を果たすことができ、肩の荷の下りた思いがいたします。

困難な執筆・編集作業を快くお引き受けいただいた吉田英敏先生をはじめ、出土遺物の整理にご来町いただいた飛騨考古学会の諸先生など、これまでにお世話になった皆様方に、深く感謝の意を表する次第です。

思えば、遺跡に初めて調査の手が入ってから30年以上が経ち、調査を担当された大江先生をはじめ、調査に関わられた方々の中で、鬼籍に入られた方も少なくないと聞き及びます。末文になりましたが、改めて心からご冥福をお祈りするとともに、本報告書が、今後の考古学研究の発展と埋蔵文化財保護思想の普及の一助となることを願ってやみません。

平成15年12月

下呂町長 岡前 基三郎

## 例　　言

1. 本書は、下呂町が実施した峰一合遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和41年から昭和46年の間の、6次にわたって実施された。その後、遺跡公園化され、現在も利用されている。
3. 発掘調査は、日本考古学协会会员の大江弁が担当し、後に記述する調査員が補佐した。
4. 当時の事務等については、主に総務課の川上登が担当した。また、平成15年度の報告書作成に関する事務は、主に教育委員会の渡辺展が当たった。
5. 本書の遺物の実測および執筆・編集は、日本考古学协会会员・吉田英敏が、その補佐を吉田見代子・後藤信幸が行った。尚、土器の実測・拓本の一部は、飛騨下呂(通史・民俗)を転載した。
6. 遺構群および住居址等の図面は、飛騨下呂等を一部修正して記載した。
7. 遺物本体に記入された付合、数字等は、ミが峰一合遺跡、次の数字が調査次を表し、以下の数字は、当時の遺物台帳に関係するものと推察する。例えば、ミー4は、第4次調査の出土遺物という意味である。
8. 本書の出土遺物は、すべて通し番号とした。(一部が重複した例はA・Bで表した)  
遺物本体に記入された番号は、観察表に明記した。
9. 炭化物の分析については(株)パレオ・ラボの東海支店データーである。
10. 本書の執筆に際しては、下記の方々に御助言・御協力を頂いた。記して感謝の意を表する。  
(順位不同・敬称略)  
大江せつ子、大江真人、小池秀雄、高木洋子、山田務、今井伊佐夫、鈴木照義、吉朝則富、太田吉一、マルス写真室、(株)パレオ・ラボ、福田健司、斎藤基生、飛騨考古学会、神村透



# 目 次

本文目次		
序 文		
例 言		
はじめに	1	
第1章 調査の概要	1	
第1節 調査に至る経緯と経過	1	
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	
第2章 遺構と遺物	2	
第1節 遺構	2	
挿図目次		
第1図 周辺の遺跡	4	
第2図 位置図	5	
第3図 住居址実測図	6	
第4図 遺跡の地形と住居址の位置	7	
第5図 遺跡公園整備当時の略図	8	
第6図 土器実測図（1）	16	
第7図 土器実測図（2）	17	
第8図 土器実測図（3）	18	
第9図 土器実測図（4）	19	
第10図 土器実測図（5）	20	
第11図 土器実測図（6）	21	
第12図 土器実測図（7）	22	
第13図 土器実測図（8）	23	
第14図 土器実測図（9）	24	
第15図 土器実測図（10）	25	
第16図 土器実測図（11）	26	
第17図 土器実測図（12）	27	
第18図 土器実測図（13）	28	
第19図 土器実測図（14）	29	
第20図 土器実測図（15）	30	
第21図 土器実測図（16）	31	
第22図 土器実測図（17）	32	
第23図 土器実測図（18）	33	
第24図 土器実測図（19）	34	
第25図 土器実測図（20）	35	
第26図 石器の占有率	36	
第27図 磨石の分類	36	
第28図 石器実測図（1）石鏃	37	
第29図 石器実測図（2）石鏃未成品	38	
第30図 石器実測図（3）石錐・楔形石器	39	
第31図 石器実測図（4）石匙	40	
第2節 遺物	1. 土器	9
	2. 石器	11
	3. 自然遺物	73
第3章 炭化物のC14測定		73
第4章 考察		74
第1節 土器		74
第2節 石器		74
あとがき		75
第32図 石器実測図（5）石匙		41
第33図 石器実測図（6）石匙		42
第34図 石器実測図（7）石匙		43
第35図 石器実測図（8）石匙未成品		44
第36図 石器実測図（9）搔器		45
第37図 石器実測図（10）削器		46
第38図 石器実測図（11）		47
	尖頭器・同未成品・有舌尖頭器・小	
	石刀・分銅形石器・玦状耳飾・勾玉	
第39図 石器実測図（12）礫石錐		48
第40図 石器実測図（13）礫石錐		49
第41図 石器実測図（14）礫石錐・切目石錐		50
第42図 石器実測図（15）叩石		51
第43図 石器実測図（16）叩石・磨製石斧		52
第44図 石器実測図（17）磨製石斧		53
第45図 石器実測図（18）磨製石斧・打製石斧		54
第46図 石器実測図（19）打製石斧		55
第47図 石器実測図（20）磨石		56
第48図 石器実測図（21）磨石		57
第49図 石器実測図（22）磨石		58
第50図 石器実測図（23）磨石		59
第51図 石器実測図（24）磨石		60
第52図 石器実測図（25）磨石		61
第53図 石器実測図（26）磨石・打製石庖丁		62
第54図 石器実測図（27）砥石・石皿		63
第55図 石器実測図（28）石皿		64
第56図 石鏃の測定		65
第57図 石鏃未成品の測定		66
第58図 石錐の測定		67
第59図 楔形石器の測定		67
第60図 扱入搔器・円周削器の測定		67
第61図 搔器・削器の測定		68

第62図	叩石・打製石庖丁の測定	69
第63図	石匙の測定	69
第64図	礫石錐の測定	70
第65図	磨石の測定	71
第66図	打斧・磨斧の測定	72
第67図	参考資料（前期1）	77
第68図	参考資料（前期2）	78
第69図	参考資料（中期1）初頭期	79
第70図	参考資料（中期2）前半期	80
第71図	参考資料（中期3）前半期	81
第72図	参考資料（石匙）	82
第73図	参考資料（打製石斧など）	83
第74図	石匙の使用法試案	84

#### 付表目次

第1表	調査の工程表	1
第2表	縄文土器統計表	14
第3表	石器統計表	15
第4表	編年表	76
第5表	遺物観察表 土器（1）	85
第6表	遺物観察表 土器（2）	86
第7表	遺物観察表 土器（3）	87
第8表	遺物観察表 土器（4）	88
第9表	遺物観察表 土器（5）	89
第10表	遺物観察表 土器（6）	90
第11表	遺物観察表 土器（7）	91
第12表	遺物観察表 土器（8）	92
第13表	遺物観察表 石器（1）	93
第14表	遺物観察表 石器（2）	94
第15表	遺物観察表 石器（3）	95
第16表	遺物観察表 石器（4）	96
第17表	遺物観察表 石器（5）	97
第18表	遺物観察表 石器（6）	98
第19表	遺物観察表 石器（7）	99
第20表	遺物観察表 石器（8）	100

#### 図版目次

図版1	遺跡の遠望	101
図版2	調査の状況	102
図版3	土器（1～4）	103
図版4	土器（5～8）	104
図版5	土器（9～12）	105
図版6	土器（6～17）	106
図版7	土器（13～15・17）	107
図版8	土器（18～20）	108
図版9	石器（1～4・11）	109
図版10	石器（5～8）	110
図版11	石器・パン状炭化物（9～11）	111
図版12	石器（12～16一部）	112
図版13	石器（16～20）	113
図版14	石器（21～25）	114
図版15	石器（26～28）	115

# はじめに

筆者は、平成13年度、夏～秋にかけて実施された大林遺跡の試掘調査を担当した当時より、田口正邦教育長から、本遺跡の発掘調査報告書発刊についての強い要望等をお聞きしていた。本件は長年における諸般の事情もあり、のびのびになってきた訳であったが、今回、その大役が筆者にあたえられた。第4次調査の調査員（当時26才）の一人であったこともあり、また故大江弁氏の教えを受けた者として努力した。しかし、残念ながら長い年月を経ており、発掘当時の正確な記録等はほとんど紛失している。特に遺構の全般的な関係、遺物の出土状態など、不明な点が多い。以上の事情を御理解いただきたいのである。したがって、遺構と一部の遺物についての記述は故大江弁氏の説明文とした。

なお、本遺跡の紹介例は下記の通りである。

1. 飛驒下呂（通史・民俗）、平成2年
2. 考古学ジャーナル27、1968（岐阜県ミネイチゴ遺跡発掘調査略報 大江まさる）
3. 峰一合遺跡発掘調査記録、昭和45年 下呂町教育委員会
4. 第4次発掘調査便り 大江記
5. 考古学ジャーナル79、1973（中部山岳考古館 大江弁）

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯と経過

遺跡は、岐阜県益田郡下呂町森字ミネイチゴに存在する。眼下の益田川ぞいには、天下三名泉のひとつとして知られる「下呂温泉」がのぞまれる。

発掘の動機は、周知の遺跡であった当地が、昭和40年頃から乱掘が目立ち、消滅が必至の状態と思われていた。そこで、町文化財審議会における答申の意見を聞き、発掘調査することとなり、以下の表に示すような発掘調査が実施された。その後、発掘調査による資料を基に「中部山岳考古館」が建設され、遺跡の公園化が実施されていったが、平成7年、その一部が改修され、また展示内容も変更されることとなり、現在に至っている。なお、本報告書に記載された出土遺物は、「中部山岳考古館」改め「下呂町ふるさと歴史記念館」内に展示されている。詳細は、教育委員会に問い合わせて頂きたい。

次	年度	期間	主任調査員	調査員	協力者
1	S41	8月10日～13(4)日	大江 弁	田中欣治、大江 上	松原弘展、下呂中生徒20名
2	S42	8月8日～19(12)日	"	紅村 弘、大江 上	松原弘展、下呂中生徒19名、高校生3名
3	S43	8月3日～14(12)日	"	大江上	松原弘展、野村宗作、下呂中・竹原中生徒38名、高校生2名
4	S44	8月3日～25(23)日	"	大江 上、吉田英敏 岡田威夫、福本美知子	松原弘展、野村宗作、下呂中・竹原中生徒25名
5	S45	2月24～28 (5)日	"		
6	S46	8月3日～26(23)日	"	大江 上、田口昭二、 松田典夫	松原弘展、野村宗作、下呂中・竹原中生徒72名

第1表 調査の工程表

## 第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡は、現在の公園端にある三角点が示すように、標高457.89m（三角点Na104490）付近に存在する。ミネイチゴとの地名は、本来峰一合であったと思われ、これが「湯ヶ峰」への一合目と推測される。ただし、「御岳山」へ登る意味での一合目との意見もある。いずれにしても下から登ってくれば、最初の平坦地である。

位置図（第2図）でみると、東から西へのびた舌状台地の極めて平坦な地形で、市街地からの比高差は、約100m前後である。発掘当時は、戦後の開墾によることと、盗掘で層位的な確認が困難とされている。

次に周辺の遺跡をみると、第1図で示したように、下呂石産出の因となった湯ヶ峰の西麓には、数多くの遺跡が点在する。やや南に位置する初矢遺跡<sup>註1</sup>は、下呂石と関西系旧石器文化の関わりを発表する記念的なものである。

次に大林遺跡は、平成13年度に試掘調査され、縄文草創期の尖頭器製作址と、縦長石刃製作址の内容が明らかにされた。さらに平成12年には、本遺跡の北方に位置する上ヶ平<sup>註4</sup>遺跡では、縄文早期と古代の遺構等が発掘調査され、その報告書が発刊されている。そして乗政地区では、下島遺跡が昭和59年に発掘され、縄文後期～晩期～弥生時代の遺物が多数出土し、報告されている。特にここ<sup>註5</sup>では、縄文晚期の石鎚が驚くべき数を占め、いわゆる石器製作所の様相が明らかとなった。

以上は、報告書として発表された例であるが、他に第1図の3、少ヶ野遺跡<sup>註6</sup>は、縄文中期の出土遺物が著名である。

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

前述したように、遺構についての記録、すなわち、住居址等の分布図は、不明な点がはなはだ多く、故大江命氏の記述による、縄文前期住居址5、弥生後期住居址1、集石遺構2、石組遺構1との情報のみである。このうち、弥生後期の住居址の他は、縄文前期の所産と考えられる。

筆者は、残された書類を分析した結果、第4図と、第5図に注目した。これらは、昭和45年～同46年頃のものと推察され、第4図の西側トレンチ群は、博物館建築における事前トレンチと理解され、第5図は、その後の公園化した図面と考えた訳である。しかし、いずれにしても、34年もの長い年月であるから正確なところは分からぬ。

前記の2図面での住居址番号は、現在ガラス張りで見学されている第3号住居址が確実である。ただ、筆者の所見では、第4図の住居址番号は諸々の点から、ほぼ可能性がつよいと思っている。次に住居址について記述したい。

**1号住居址** この住居址は、第一次調査によって確認されたものである。住居址の一部は既に掘り乱されていた。住居の基盤は、黄褐色の粘土質層を掘り込んだ竪穴住居址である。プランは長軸を東南～西北方向に持ち、約5.30メートルである。短軸は北東～南西方向で、約4メートルと推定される。不定形の楕円状をなすものである。竪穴の掘り込み部の壁面は約13センチ前後であり、保存状態はあまり良好でなく、南西部の一部はなだらかに掘り込まれ、僅かにその痕跡を残すのみであった。

床面は中央部に向かってやや凹む状態であり、そのほぼ中央部の位置に円形状に地焼炉の痕跡と推定される焼土面が確認されたのである。竪穴内の床面上の柱穴と推定される7本の穴が検出されている。また、南部の隅に当たる部分に82～45センチ、深さ23センチほどのピットが、それに並んで検出された。後者は柱穴と複合したものと考えられる。また、住居址の掘り込みの外にピットの深さ7～15センチ前後のピッ

トの列が知られた。出土遺物は前述したようにこの部分が掘り乱されているのでその状態は明瞭ではないが、床面近くで縄文前期の小破片の遺物が検出されたのである。

**2号住居址** 第2次調査地点において知られた。プランは明瞭に検出することは出来なかった。中央の部分にわずかに凹が見られ、発掘時の所見では、竪穴の壁部に当たるものと推定される。柱穴、ピットのほかに床面中央部東よりに地焼戸の焼土が見られる。また、この住居の北部に、大きなピット状の掘り込みが見られた。この掘り込みは、その後の調査によって5号住居址であることが明確にされた。また、西北部に石組構造が住居内に検出されたが、この遺構は、縄文前期のこの住居に伴うものとは考えられない。この住居址の時期を推定する資料としては、諸磯C式土器に比定される土器一個体分が床面に検出された。埋カメが出土している。

**3号住居址** この住居址は、第3次調査時に検出された。当遺跡で発掘された遺構の中でも最も保存状態が良好なものである。遺構は、黄褐色粘土質土層を掘り込んでおり、長軸は南北方向に約5.40メートル、短軸は東西方向に約5.30メートルで、ほぼ円形をなす竪穴住居址である。この住居址の床面中央部に石が置かれ、その部分に焼土が見られている。これらの石が石窯戸のように埋められたものでない点からして地焼戸と推定される。壁面は基盤を北面では30センチ前後、南面では10センチほどの浅い立ち上がりを示している。床面は平坦で僅かに南東に傾斜している。

出土遺物は、覆土中は大部分が前期の土器である。一部分に勝坂期の土器が混在していた。時期については上限を前期とすることが可能である。中期の土器は覆土への混入と考えられる。

**4号住居址** この住居址は、基盤を掘り込んでいるが、明瞭なプランを検出することはできなかった。しかし、掘込部の状態とその周辺に見られた、間隔を置いたピット列などからしてプランが不定形な楕円状をなすものと推定される。柱穴も床面近くより挿図21の241の土器が出土している。

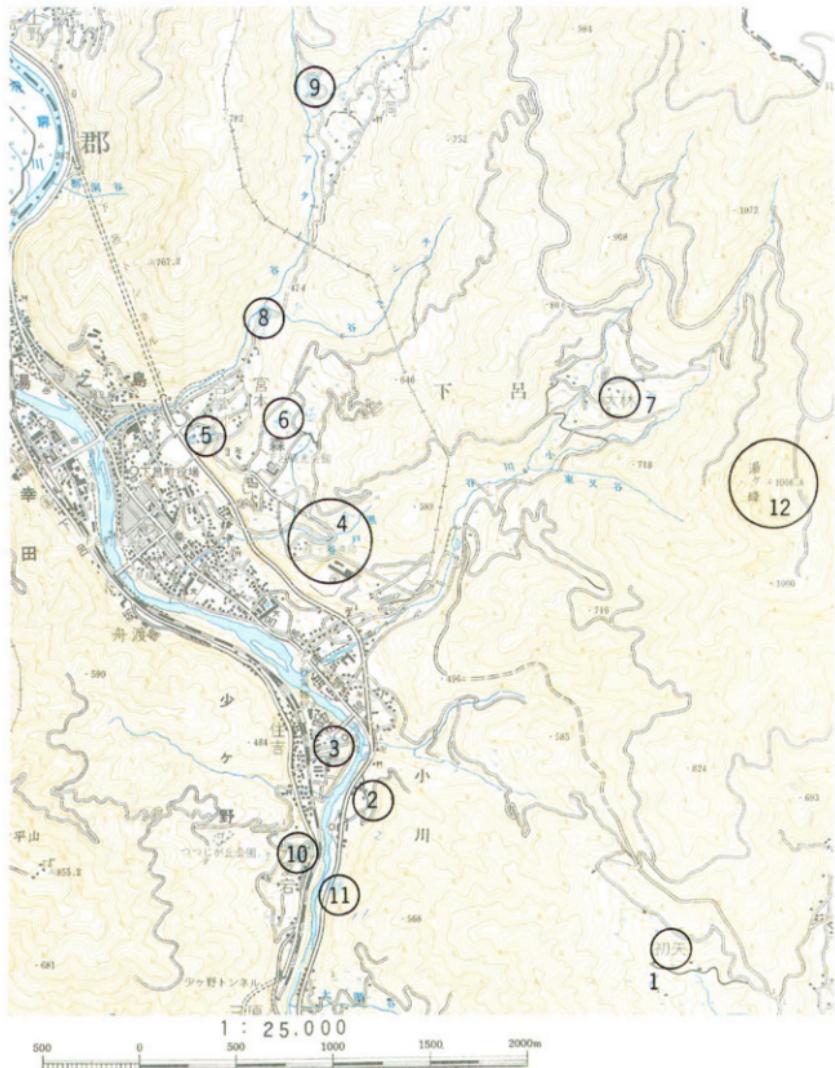
**5号住居址** この遺構は、2号住居址の西北部に検出されたもので、第3次調査時には大ピットか、住居址か不明であった。この住居址の一部は大正時代に下位の水田造成の時に削られて残存していない。2号住居址と切り合っている。

**6号住居址** この住居址は、遺構の基盤となる黄褐色土層を僅かに掘り込んだ竪穴住居址である。プランは長軸が東西に約5.25メートル、短軸が南北に約4.05メートルの隅円長方形をなし、床面の中央部よりやや東部よりに地焼戸が認められた。伴出土器は、埴形土器、器台、甕などが伴出している（弥生時代末）。

**石組遺構** 2号住居址内的一部分に構築されている。同住居址の床面を掘り込んで石組がなされているが、発掘時の所見によると、住居が破棄されて後に石組がなされたものと推定される。

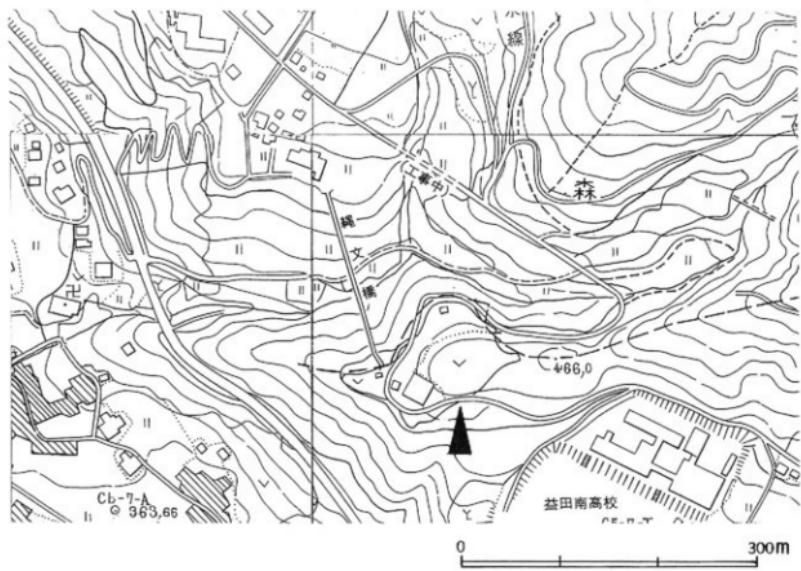
遺構は、中央部に楕円状の川原石が置かれ、その周囲および下部に、山石、川石、石皿の破片などを利用してあまり規則性はないが組まれている。径は約1メートルである。

以上、飛騨下呂（通史・民俗）8頁～10頁と36頁～37頁より転載

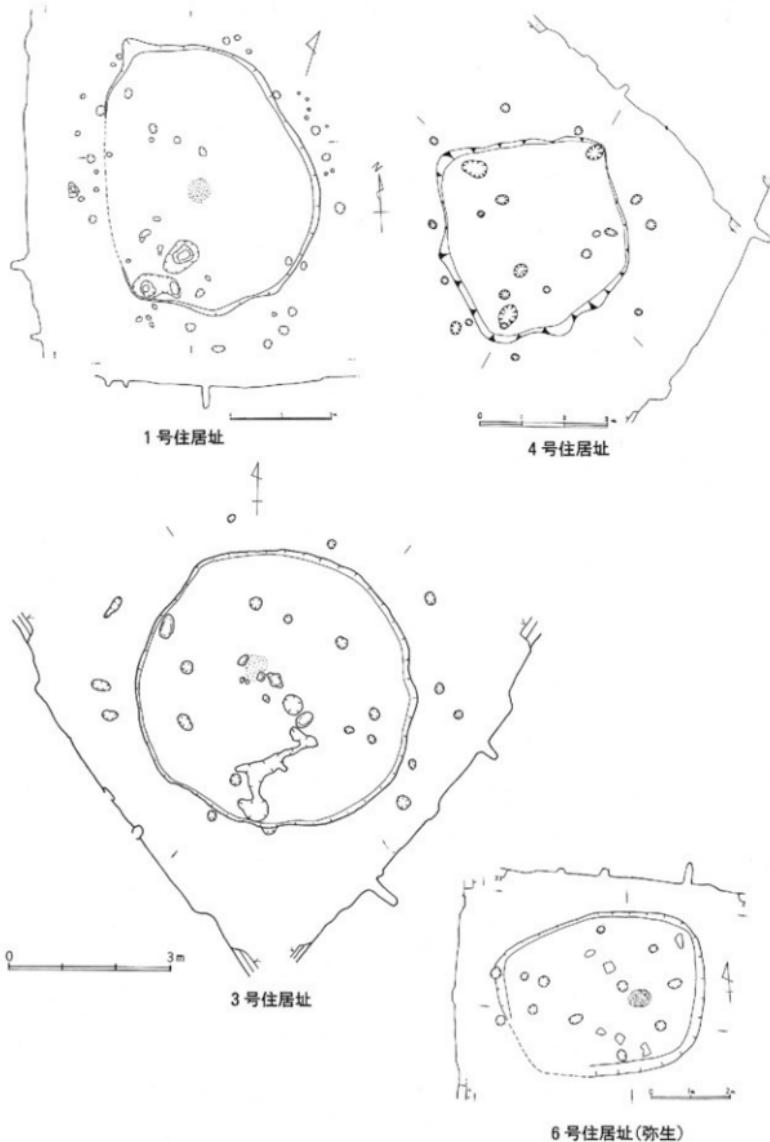


1. 初矢遺跡（旧石器）	2. 山本遺跡（縄文）	3. 少ヶ野遺跡（縄文）	4. 峰一合遺跡（縄文・弥生）
5. 宮本遺跡（縄文）	6. 上ヶ平遺跡（縄・古）	7. 大林遺跡（旧・縄）	8. 篠林遺跡（縄文）
9. 丸野遺跡（縄文）	10. 念仏岩遺跡（縄文）	11. 大野遺跡（縄文）	12. 湯ヶ峰（火山）

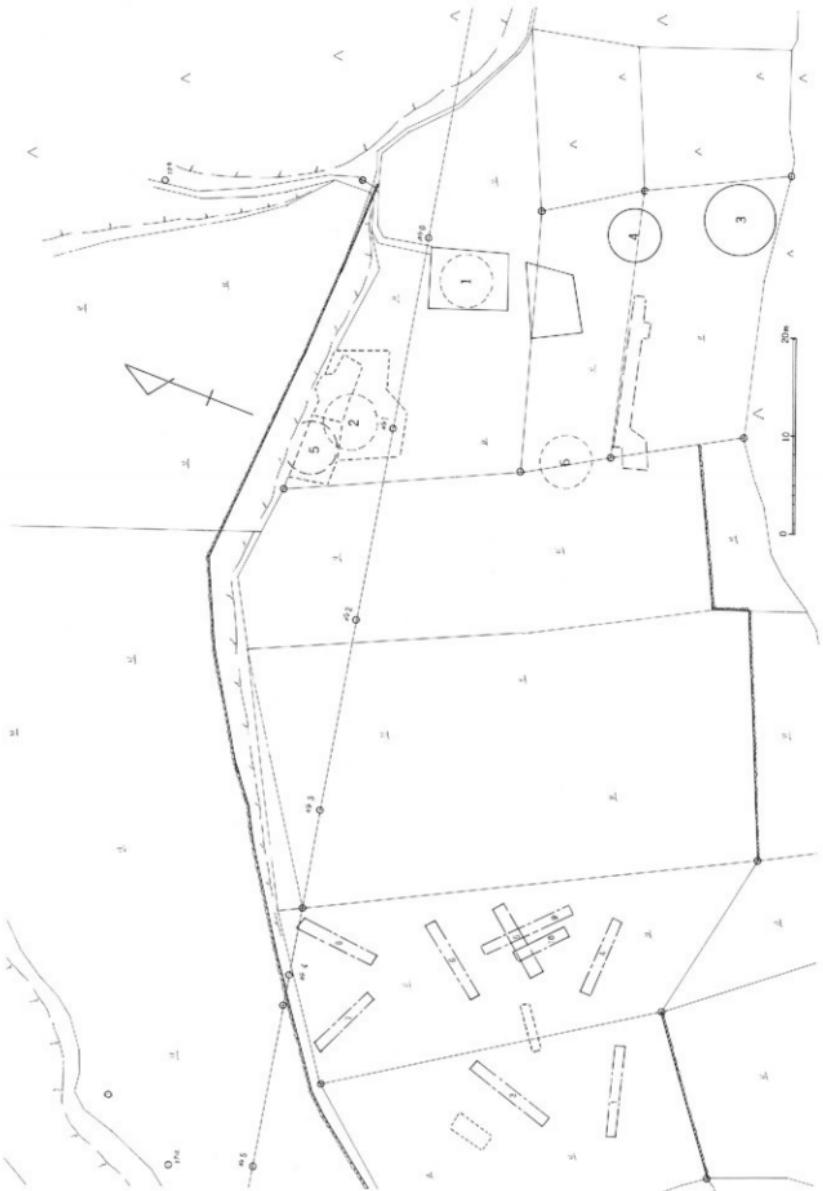
第1図 周辺の遺跡



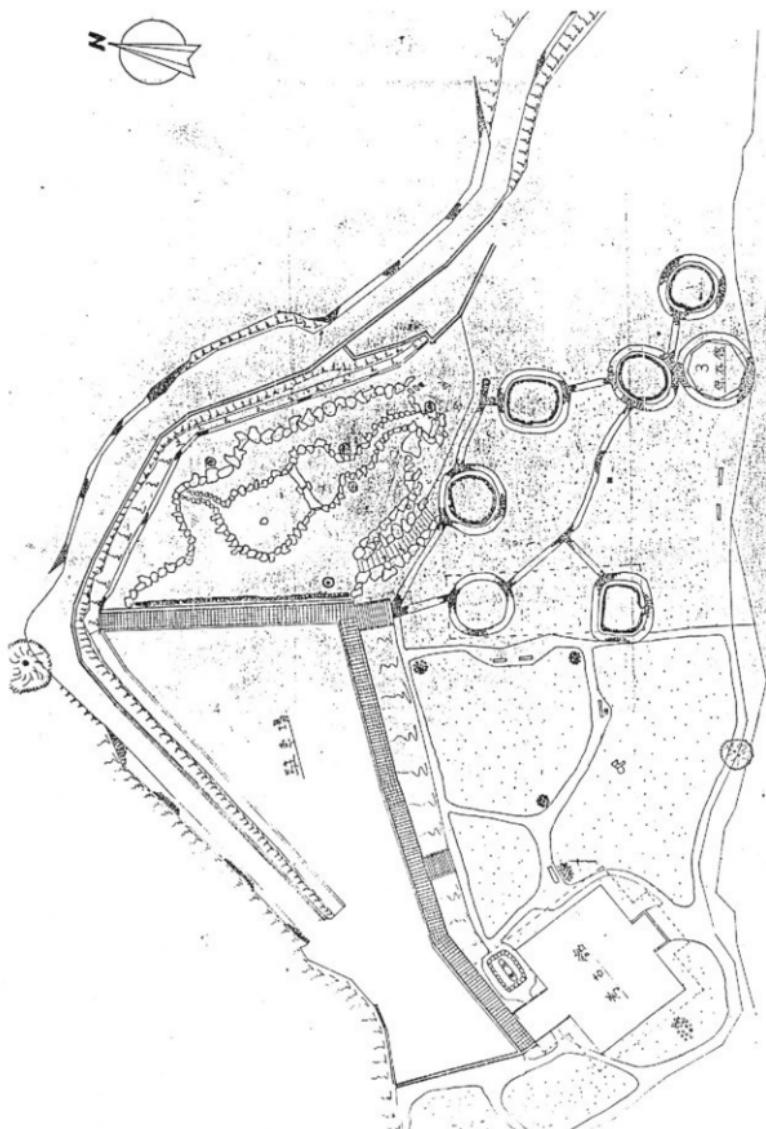
第2図 位置図



第3図 住居址実測図



第4図 遺跡の地形と住居址の位置



第5図 遺跡公園整備当時の略図

## 第2節 遺物

前述のように昭和41年から同46年にかけての6年間にわたり、発掘調査が実施されたのであるが、実質的には延日数ではわずか79日間に過ぎない。約3ヶ月間である。この間の出土遺物としては異常に多い量が認められている。すなわち、第2、3表に示すように縄文土器片9,526点、石器10,445点、計19,971点、約2万点である。この他に若干の弥生土器片、須恵器片がみられる。

各遺物の出土状況については例言に述べた事情である。さて、遺物量の多さについては、本遺跡が縄文前期後半～中期初頭にあたること、さらに湯ヶ峰を原産地とする下呂石の産出地であり、当時の石器製作の拠点として見ることによって理解できよう。なお第2図に示す縄文橋を渡った対岸側でも、今なお多くの遺物が採集され、付近を含めた大遺跡と推測される。

以下に土器、石器の順に記述する。なお、土器型式での表現については、故大江令氏の文章を重視した。

### 1、土器（第6～25図）

**縄文早期（1～11）** 1～3はいずれも胴部の細片であるが、ネガティブな押型文である。胎土中に極小な白っぽい長石粒が観察され、いわゆる逆階円文、すなわち大鼻式の系統内に属する一群と推測されよう。

4、5は、大型の山形押型文で、4は縦位に、5は上部に並列状の施文がなされている。これらは古いタイプで樅沢式に比定される。6は、粒形と呼ばれるもので、7～10は格子目押型文である。これらは、押型文系統では後出的な細久保式と推定する。なお11は、器厚で繊維を多く含む粗雑な胎土である。沈線によって菱形文を表現しているが、いわゆる高山寺式最終の姿と推定する。

**縄文前期（12～246）** 12は、指圧痕の多い薄手を呈し、木島式と推定する。13～16、19～21は表裏面に目殻条痕文が多くみられ、さらに表面には目殻による刺突を施したグループで、関西では羽島下層II式に類似し、東海での石塚下層式と推測される。

次に、器面表裏を浅い目殻条痕で整形したのち、長めの爪形文を連続して施した17、18がある。これは、北白川下層I式に比定されよう。

いわゆる半截竹管による爪形文が主体となるグループが数多く見られる（22～50）。それらは平行沈線文を伴わない22～29と、平行沈線文内に刺突する2種があり、後者において丹彩の例が多く認められている。次に、細い平行沈線文による“うずまき”状の文様を施した例が数多く（51～82、87）、さらに斜状の文様表現も多用されている。そして83～85のように、細隆線上にへうによるきざみを、『ハ』状に施した例などがみられる。以上はおまかに、北白川下層II式の範疇としてとらえておきたい。またこれらには、表面での丹彩が多くみられる点が注目されよう。出土遺物の多くが、器表面に細隆線を貼りつけたグループが主体をなしている（86～117）。これらは基本的に斜位縄文を地文とし、口縁部での並列、渦巻、三角などのモチーフを主に表現している。なお細隆線上には、回転縄文を主体とし、細かな刻みの例もみられる。

さらに119～131のような羽状縄文、斜縄文を地文とし、ほぼバケツ状を呈する一群が大量に存在する。これらは口唇端に、指圧、刺突などを施した例が多い。以上は極めて在地性の強いものである。基本的に北白川下層III式の範疇として理解しておきたい。

次に132～141などは、極めて薄手で、焼きしまりの良い一群である。口縁部は大きく波状を示し、キャラリバー形を呈すると思われる。細い隆線上には、連続した押引刺突文が施された独特な文様で構成され、口縁部の裏面にも入念に施されている。これらは、前期末の大歳山式と考えられる。

第15図は、底部のみを図示したものであるが、142～155までは、その胎土などから推測して、北白川下層II～III式の系統と考えられる。157～158は、諸磯b式系統であろうが、156については胎上、焼きしま

りなどから前者の可能性が強い。

胎土に細砂と雲母を多量に含み、暗褐色～茶褐色を呈するグループ。それは、160～174で示すように浅鉢形を呈する器形で、口縁部に多孔帯をみる。表面では太い平行沈線文内の刻みがみられ、幾可学的な文様構成が主流をなす。いわゆる諸磯b式の典型的な資料である。

同様の胎土を示すものでは、175～199のようなキャリバー形の一部分と推定されるものもみられるが、194のようにわずかながら織維が観察されることから、黒浜式の可能性が推測される。第21図の243が完形状態であろう。

200～219の多くは、多重細線によって文様構成されたグループである。202は、故大江弁氏によつて「ナメクジ状」と呼ばれた縦位の貼付文と、小円状貼付文が印象的である。そして206、207のように押圧的なものもある。204は、大きな波状をみせるものの、240と同様の形状であろう。以上は、諸磯C式の範疇で理解しておきたい。

次に220～238、247であるが、いずれも極細の貼付文上に、半截竹管の連続押引文を施したグループである。山形を主としたイメージが感じられる。特に247は、特異で、斜織文地に施された6本指のモチーフは、把手状の渦巻との関係において興味深い。十三普堤式に比定される。

なお、第21図の241、242、244～246は、北白川下層III式と推測する。

織文中期（248～296） 248は、大形の爪形文が横位に連続して押引され、その上下に刺突文を加えたもので、裏面では斜位の織文がみられる。これは船元IA式に比定される。また極度にくびれたキャリバー形と細かな爪形文、斜位織文をみせる264、265など鷹島式にあたる資料は、関西系中期初頭として理解される。そして、やや硬い焼きしまりをみせ、波状口縁で、円環文と爪形文が施された257や、266あたりは東海系の北裏C II式と推測される。他に、恵那の阿曾田遺跡のそれと類似する259、さらに258、262などは、中期の早い段階と推測しておきたい。

次に、三河系と思われる260、263がみられる。いわゆる山田平式の系統と推測したい。やや後出的な関西系の土器群は、249～256である。249、252などは船元II式に、250～256は、細隆線による区画内での櫛目状沈線（250、251）、太い刺突文（254）、U字状の隆線文（256）など船元III式に比定されよう。

北陸系のグループでは、267～271、274などがある。主に平行沈線文によって構成され、比較的薄手な作巧を示す。いわゆる新崎式の範疇としてとらえておきたい。

中期における土器群中において多くを占めるのは、次に示す関東・信州系のそれである（272～296、261）、239、261、294～296は、やや薄手の小振りな破片が多く少量であった。平行沈線文で構成したグループで、平出3A式と考えられる。

いわゆる勝板式、藤内式、梨久保式などに比定される資料は272、273、275～293である。故大江弁氏によれば同一個体との説明もあるが、代表的な資料を載せた。前述の諸磯b式的な、厚手で、胎土中に雲母片を多く含む特徴を示すものの、若干異なり、識別は容易である。太い隆帶と爪形文、さらに隆起した口縁部文の作巧が特徴である。278、277、286などは、やや古い手法がみられるものの、全体的には中期前半の中で理解され、前述の船元II～III式のそれとの伴出関係は否やとしないであろう。

円板状土製品（297、298） 他に類似した資料がある。ただその認定は困難である。文様と胎土の観察から、297は前期の諸磯式b式、298は前期末の十三普堤式の土器片を使用していることが明らかである。いずれもほぼ円形に加工しているものの、いわゆる側面での磨りが不十分である。

織文後期（299～303） ゆるやかな波状口縁の頂点下に逆ダルマ状の文様が施された301および、209～302などは、西北出式の範疇として理解したが、303は不明である。

弥生後期（304～309） 304～306、309は甕形を呈している。いわゆる櫛目文的な文様がみられ、305、306、309では流文、山形文の表現がなされている。307の壠と308の器台はセットとみなされ、弥生時代

の終末期と思われる。

奈良時代（310）須恵器の坏身である。底部の状況から7～8世紀の所産と推定する。

## 2、石器（第28～55図）

**石鎚（311～338）** 器形的には、木葉形・三角形・開脚形に大別できる。311・312は木葉形で、幅広のタイプが多い。次に三角形（313～320）は20%を占めている。サイズ的には、第56図でみるとように2cm×2cmのやや大振りなものが多い傾向を示している。圧倒的な数量の開脚形（321～338）は79%を占めるが、サイズ的には1.2cm×1.8cmを中心とした範囲に集中し、重量では0.5g前後を示している。多様な変化をみせる同形では、338のような脚にふくらみをみせる鍔形や、335・337のように、いわゆる曾根形鍔形のものもみられる。一般的にはハート形を基本とし、薄手の作巧をみるものが多い。なお、321・332・335などのような尖端部においての造り出しをみせるものもかなり存在する。また、三角形の320や、開脚形の327・333にみられる肩張の形状を呈するものが若干存在する点に注目しておきたい。全体的には、328～334のようなタイプが普遍的といえよう。

なお、石材の面でいえば、約8%がチャート製で、若干数の黒耀石、頁岩そしてサヌカイト製が存在する。

**石鎚未成品（339～346）** 数多くの石器類の中で、器種不明なものが多く存在することは、周知のことである。今回、整理作業にあたって分類した中で、石鎚と石匙の未成品についての判定に苦慮したが、それぞれの未成品については、筆者と後藤信幸で協議のうえ認定した。それは、いわゆる石鎚の製作過程において放棄された資料である。第3表・第57図で示したように、307点にもおよぶ。第29図はその代表的な例である。339や340、344などは初期の段階と推測される。また、343は木葉形の粗形と考えてもよさそうである。なお、346の石材は、黒耀石であり（他に1点あり）興味深い。

**石鎚（347～365）** いわゆる揉錐形（347～354）と手回し形（355～365）に大別した。前者では棒状の348～350、353のようなものと347・352着柄部を意識したものもみられる。また354のような石鎚木葉形に類似した例もあるが、その剥離角度などから区別した。後者は、大小多様の変化がみられ、355～358のような小形で定形的なタイプもみられるものの、360～365のような比較的ラフなタイプが多い。また、359のごとく、明らかに石匙の再利用と分かる珍しい資料も存在している。

なお、石材的にみれば、下呂石73%、チャート24%の結果が示すように、錐本来の役割が硬さを要求される事情がその比率を示すものと理解されよう。

**櫻形石器（366～368）** 25点のうち綾形が15点、そして横形が10点である。367が前者、366が後者の代表的な資料である。368は、中間的なものの、やや横形にちかい。縄文前期での他遺跡に比較してその比率が希少である。

**石匙（369～441）** 石器成品としての比率は、他遺跡に比べ、第26図で示すように異状な数値である。

170点のうち、72点の資料を実測したが、ほぼ完形品と推定されるものは、第63図で示した139点が対象であるから、ほぼ半数にある。なお、実測図での表現方法では、376、380、384のような表裏からの均等な剥離によった例は、片面のみの図として表現した。

器形的には、綾形13、横形15の比率である。すなわち横形の石匙が全体を占める。

369～372が綾形の資料である。いずれも主剥離側からの加工である。横形は、三角形の頂点を摘部にする基本的な形状を示す一群であるものの、色々な変化がみられる。まず、373～386のようにオーソドックな例が数多くみられる。次に387～410のような摘部と肩部に“えぐり”を施した例、そして基本的に半円月形を呈するグループ（411～424）。さらに台形の425～429がみられる。以上のタイプとは別に、摘部が主軸をはずれた431～441などがみられる。以上が大まかな形状的内訳である。ところで、442～447のような極小の資料が全体で11点存在する。いずれも横形である。実用的なものとは認められない例であるが、

作巧は445をのぞき入念といえよう。

横形は、基本的な剥離状況からみれば、主に貝殻状剥片と呼ばれるような、剥片を利用するパターンである。この中にあって、ほぼ片面剥離的な例は71%を示している。

**石匙未成品**（448～459） 基本的には、三角形の素材から作出するわけであろうが、多くはその器厚面を取り切れず（剥離）放棄したか、449のような割れてしまったのかである。448は、縦形と思われるが、他は全て横形の素材と思われる。

**縦形搔器**（460～470） 45点が確認されている。460～467のような素材の剥離方向を意識して刃部を形成しているが、468、469、470のような短かな剥片での作巧も若干存在する。平面的には、旧石器末期～縄文早期初頭に多く見られる母指状搔器に類似する。しかし、側面感では463のような急角度の刃部とは異なり、全体的にゆるやかな例が多く、前期での特長と認識しておくべきである。

**抉入搔器**（471、472A） 6点のみの出土であったが、471は、いわゆる削器も兼ねていよう。

**横形削器**（472B～478） この器種についての認定は、旧石器～弥生時代に至るまで多くの問題がある。それは、他のそれとの比較においてある。96点を対象としたなかで、代表的なものを図示した。縦長剥片の側面を刃部としたものが主となる。その刃部をみれば、472A、475、476、478のような片面方向からの剥離例が多くを占めるが、473、474、477のように、両面からの剥離を示す例が存在する。後者の刃部は側面感がジグザグを示している。

**円周削器**（479、480） 少ない資料であるが、両面加工で、他器の未成品とは思われない小形のものが多い。

**尖頭器**（481、482、483） かつて大林遺跡で紹介したように、縄文草創期での尖頭器は、その側面感での剥離状態で判定したが、2例はほぼ完成品にちかいものと認定した。遺跡の尾根上部には高洞遺跡が存在することから、483の未完成品ともどもあり得るものと推察されよう。なお、482はサヌカイト製である。

**有舌尖頭器**（484） チャート製である。いわゆる柳又タイプと異なり長身である。美濃三河において多く知られる。

**块状耳飾**（487～493） いわゆる耳飾りと推測されるグループで、490、493のタイプが併存する資料である。滑石製が主で、492は風化が著しい。

**勾玉**（494） 極小の例であるが、前期に存在する数少ない資料として貴重である。

**小石刀**（485） 現在の公園が造成される事前調査でのトレンチ内の出土品と思われる。

石材はやや白っぽく風化したサヌカイト製で、尖頭部がゆるやかにふくらみ、下半部では直線的な形状を呈し、基部端に摘み状の突起が作出されている。押圧剥離が素晴らしい作巧をみせている。長さ20.8cm、幅4.7cm、厚さ0.9cm、重さ105.9gを計り、非常に薄手で、とても実用品とは思えない。いわゆる儀礼用の道具とみられる。なお、縄文前期に属する遺物と報告されているが、弥生後期末の住居址が存在する事実を考慮して、後者の可能性も推測される。

**分銅形石器**（486） 黒みのつよい下呂石製で、かつて打製石斧と報告されているものである。両面加工で、横位の割れがみられる。この遺物については、剥離技術的にみて疑問があり、今後の問題点となろう。

**礫石錘**（495～547） いわゆる扁平な河原石の長軸両端に、打ち欠きによる糸掛けを施した漁網錘と考えられるものである。第64図で示したようなデータから、5cm×4cm、重さ40g～70gと、かなりの大きさ、重さである。筆者がかつて、塚原遺跡、河合遺跡等を報告した例と大きく異なるものの、基本的な糸掛け部の作法（打ち欠き）には変わらない。

糸掛け部のピッチを明示したが、その部分での剥離は、やや粗雑さが目立つ。なお、平面での糸掛け部分を示す資料は、519、522のみであったが、石材との関係において考慮すべきであろう。

なお、547は磨石Bを再利用したものの、横張網の中間部に付ける“錘”と理解したい。

**切目石錘**（548） ホルンヘルス製の1点のみ出土した。縄文前期とは判定しにくい。

**叩石**（549～558） 手の平に入るタイプ（549～552）から、にぎるタイプ（553～558）がある。前者で

は梢円形の端部に、そして後者では側面にまで叩痕がみられる。第62図でみるとように 6 cm × 4 cm で 200 g 程度の円錐が多く利用されている。下呂石による石器製作地としては大変少なく、それは発掘当時の認識の問題であろう。

**磨製石斧** (559～571) 側面に角を有し、ほぼ長方形を呈する定角形がほとんどである。559～561などは明らかに“のみ的”なものである。570は加熱のため破損部分が多い。

**打製石斧** (572～585) 331点のうちほとんどが短冊形である。石材的には、流紋岩、安山岩、砂岩の順である。第66図でみると、幅 4 cm × 長さ 10 cm から 幅 6 cm × 長さ 12 cm で、50 g ～ 150 g の範囲内あたりに集中するようである。

ここで注目しておきたいのは、平面の大多数に河原石の表皮面を残していることである。すなわち、扁平な梢円形の河原石を選び、大きな石に打ちおろす方法でもって得られた薄身の素材が多用されている事実である。それは資料のほとんどに証拠がみられる。

**磨石** (579～610) いわゆる磨面の表現は、27図で示したが、当時の発掘時の選別、特に“磨面”に対する認識は現在のそれとは違うだろう。したがって、自然石、すなわち河原石の平坦な部分での磨面には、ほとんど注目していなかったであろう。したがって、多くの遺物が見捨てられたものと思い残念である。次に、ここで表現した使用面(1)は、あらかじめ敲打調整後の磨面を示し、使用面(2)は、河原石の素面そのものが磨られている状況をあらわしたものである。次に、分類的に記述する。

102点のうち完形品のみ測定し、65図に示した。梢円形で、にぎりやすい河原石を素材とした A 形 (586 ～ 595) は 40% を占め安定した位置を示している。次に、大形で扁平な河原石を素材とした B 形 (596 ～ 610) は、平面部分での凹みが観察される例が多くみられる。ただ、紫蘇輝石安山岩の例では風化面が著しく、その観察が困難であった。

**打製石庖丁** (611～613) 打製石斧との区別については苦慮するものの、極めて薄手の素材が選ばれ、側縁部分での使用痕が顕著な特長を示す。特に、611では、L 字状の使用面と、比較的軟らかな石材を選んでいる点に注目しておきたい。

**砥石** (614) 平板的なものも多く存在したと推定されるが、残念ながら本例のみ残されている。砂岩製で、表裏共に多用され凹み部分が多い。

**石皿** (615～621) 石皿は、有縁タイプ (616～621) を代表としたものが目立つが、615のような平板状石皿がもっと存在したものと推測される。有縁タイプでは、618のような小形から 621 の大形まで認められるが、全て紫蘇輝石安山岩製である。なお、619のような表裏での使用例は数少ないものと思われる。

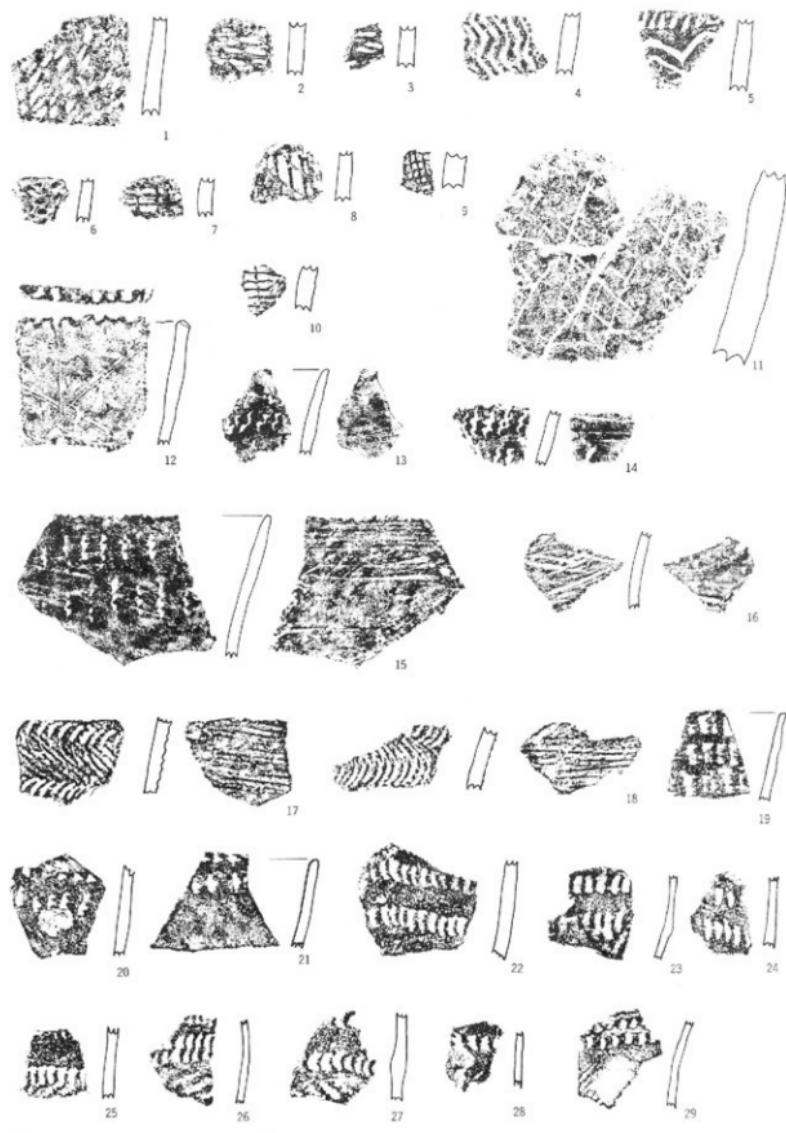
期	系 統	推定型式	口縁～胴	小 計
早	信 州	樋沢・細久保	16	20
	関 西	大 鼻	4	
前	東 海 ・ 関 西	石塚下層	33	2,224
		北白川下層Ⅰ	25	
		北白川下層Ⅱ	379	
		北白川下層Ⅲ	525	
		大歳山	35	
	関 東	黒 浜	4	
		諸磯 b	781	
		諸磯 c	350	
		十三善堤	92	
中	関 西	鷹 島	4	226
		船元Ⅱ・Ⅲ	58	
	信州・関東	藤内・勝坂	150	
	北 陸	新 崎	9	
	東 海	北裏 c	5	
中・後	関 西	里木Ⅱ	3	3
後			3	3
無 文			2,067	
縄文地文			4,559	
底 部			424	
合 計			9,526	

第2表 縄文土器統計表

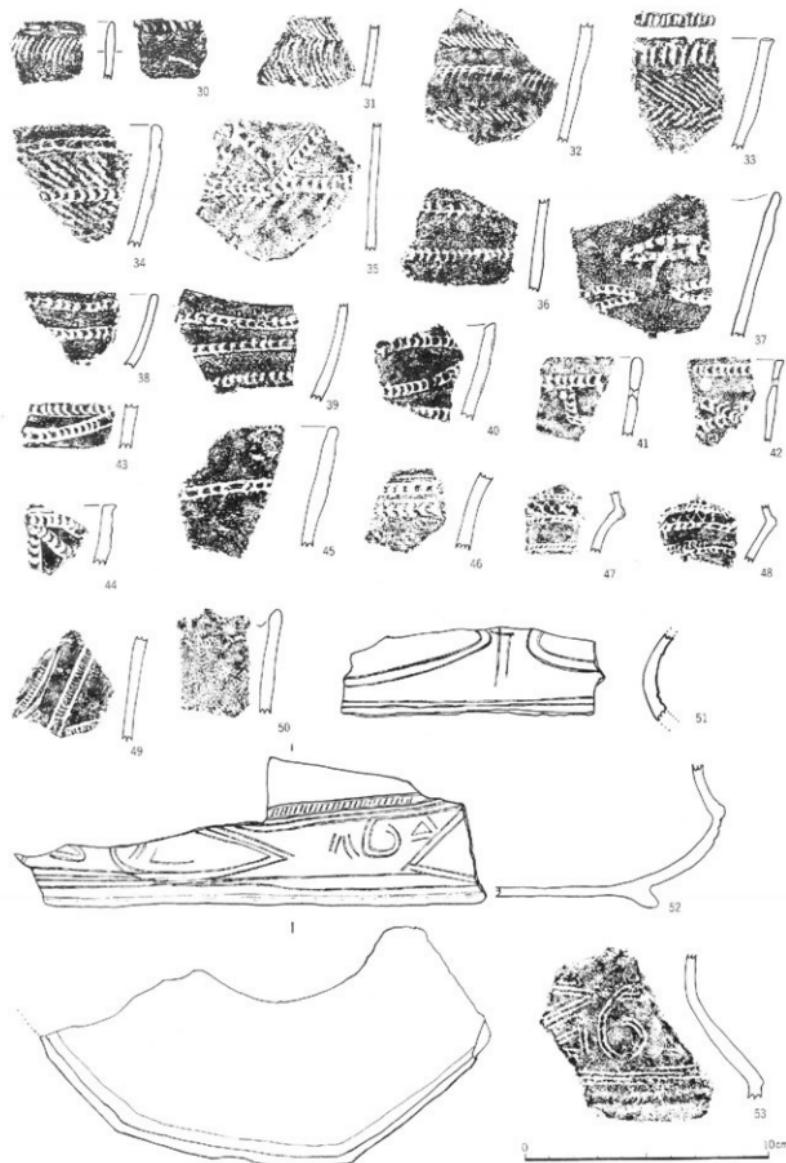
石材 器種	下呂石	サヌカイト	チャート	頁岩	鉄石英	黒耀石	砂岩	流紋岩	ホルンヘルス	紫輝安山岩	粘板岩	蛇紋岩	軟玉	滑石	計
槍先形尖頭器	1	1													2
同 未成品	10														10
有舌尖頭器			1												1
三角形	153		13	1		2									169
開脚形	581	3	54	2		10									650
石鏃	木彫形	8													8
	不明	21		1											22
同 未成品	269	1	35			2									307
石錐	錐錐形	38		16		2									56
	手回し形	73		21		2									96
	不明	2													2
石匙	縦形	12	1												13
	横形	124	8	17	5	1	2								157
同 未成品	30														30
模形	縦形	11		2		2									15
石器	横形	10													10
搔器	縦形	33		12											45
	抉入形	6													6
削器	横形	88		8											96
	円彫形	6													6
使用痕ある剝片	261		15		2										278
剥片・碎片	6,985		190		57										7,232
尖頭器 剥片		3													3
石核	306		2												308
打製石斧	短冊形		3		59	124	27	101	2						316
	撥形				4	5		5							14
	分鋸形									1					1
磨製石斧	定角形				4	1		2			31	1			39
	乳棒形									1					1
石錐	礫石錐				146	173	9	61	5						394
	亞目石錐									1					1
磨石	A I 形						3		3						6
	A II 形					21	10								31
	A I + II?					3	1								4
	B I 形					3	4		5						12
	B II 形					4	2		31						37
	B I + II?					2			4						6
	B III 形					1			3						4
	B IV 形					1	1								2
打製石庖丁		1			4		2								7
叩石					11	18									29
石皿									8						8
砥石						1									1
勾玉										1					1
玦状耳飾										1	2	1	3		7
小石刀	1														1
分銅形石器	1														1
計	9,032	15	387	12	1	81	264	342	38	224	9	35	2	3	10,445

※紫輝安山岩は紫蘇輝石安山岩

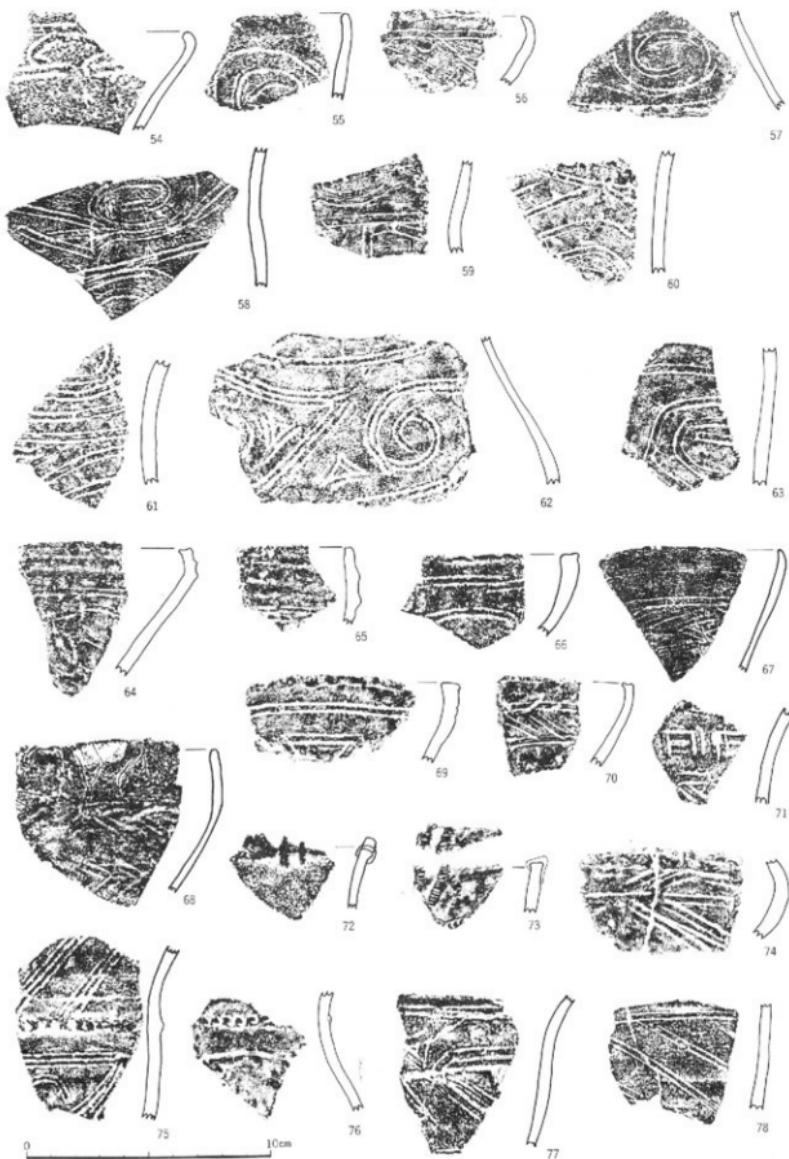
第3表 石器統計表



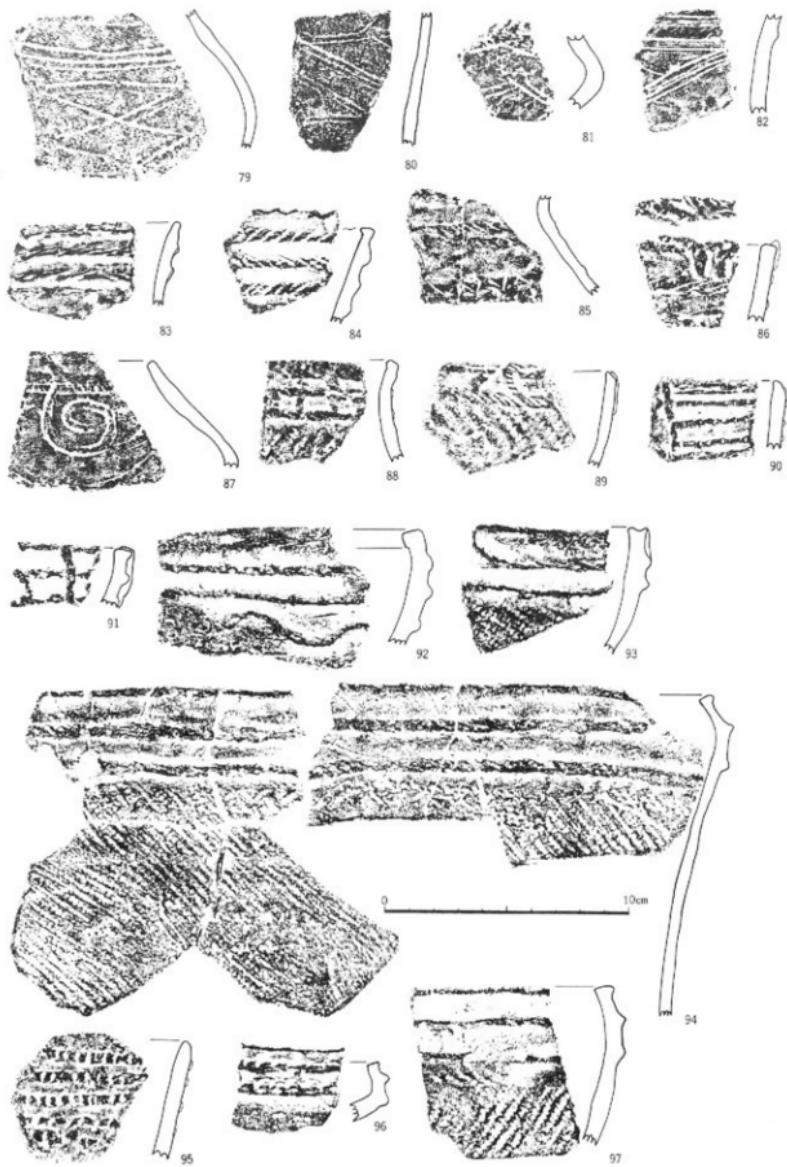
第6図 土器実測図（1）



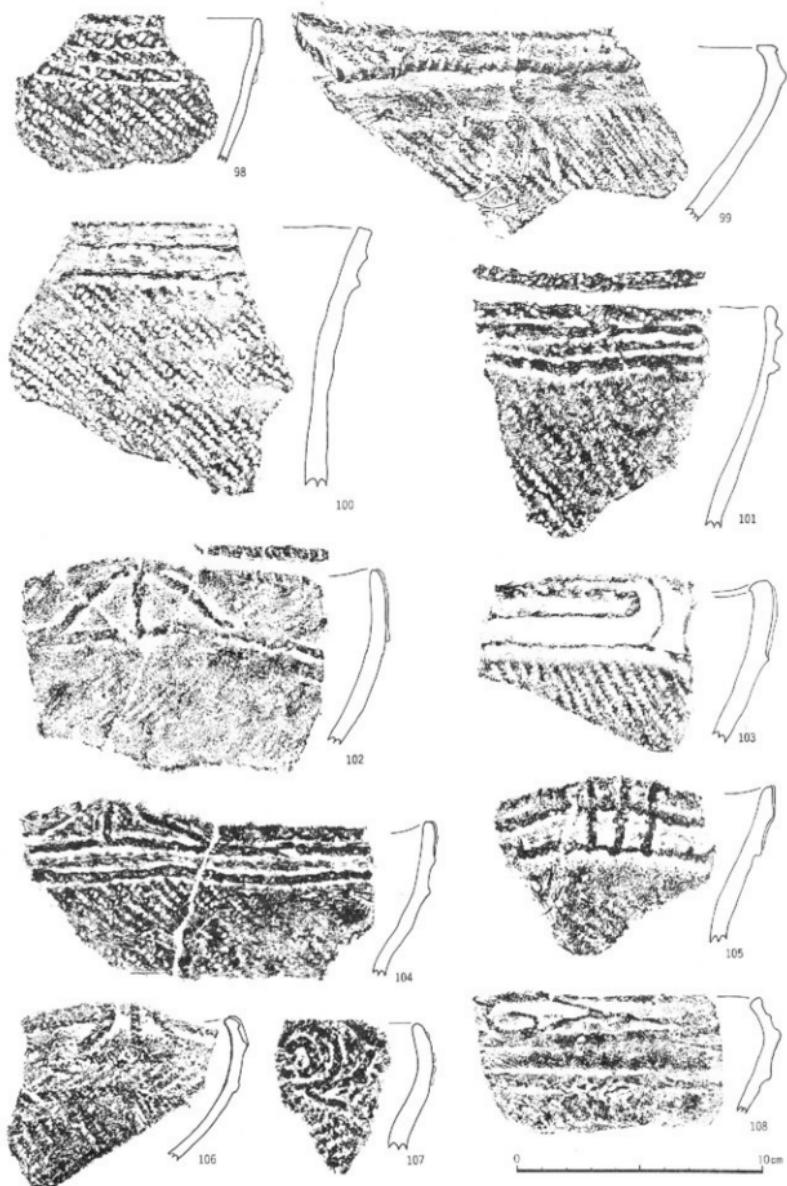
第7図 土器実測図（2）



第8図 土器実測図（3）



第9図 土器実測図(4)



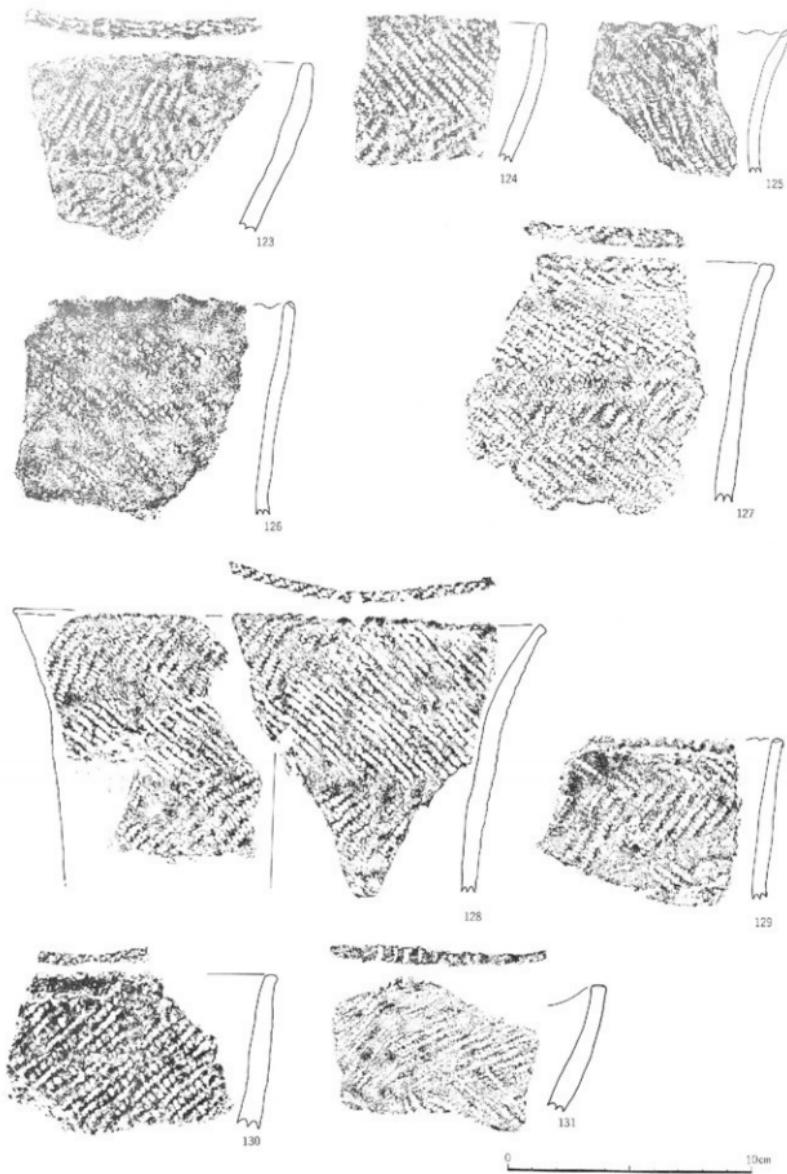
第10図 土器実測図（5）



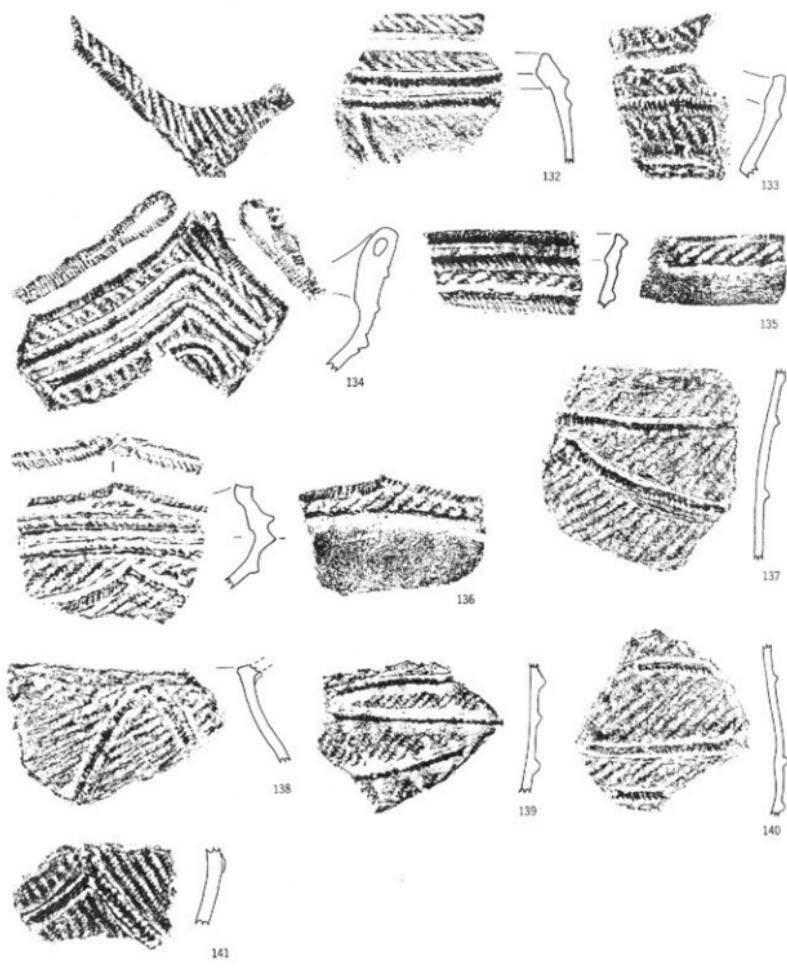
第11図 土器実測図（6）



第12図 土器実測図（7）

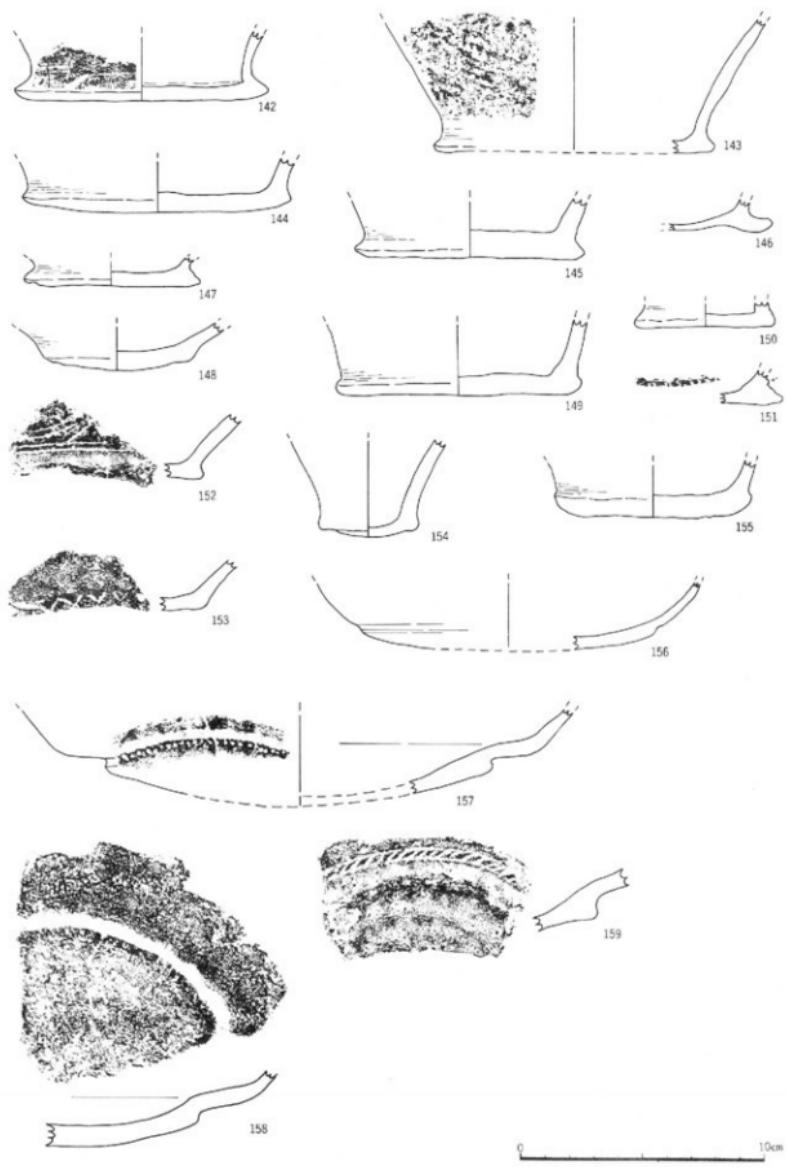


第13図 土器実測図 (8)

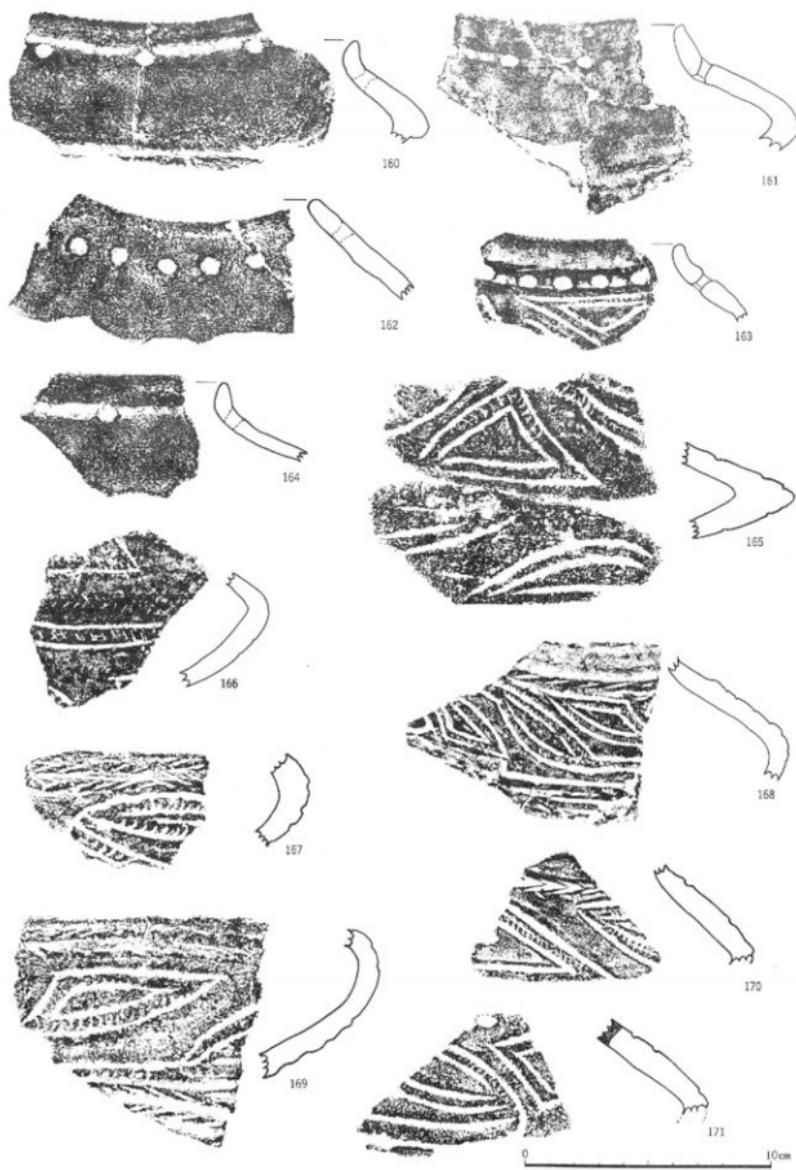


0 10cm

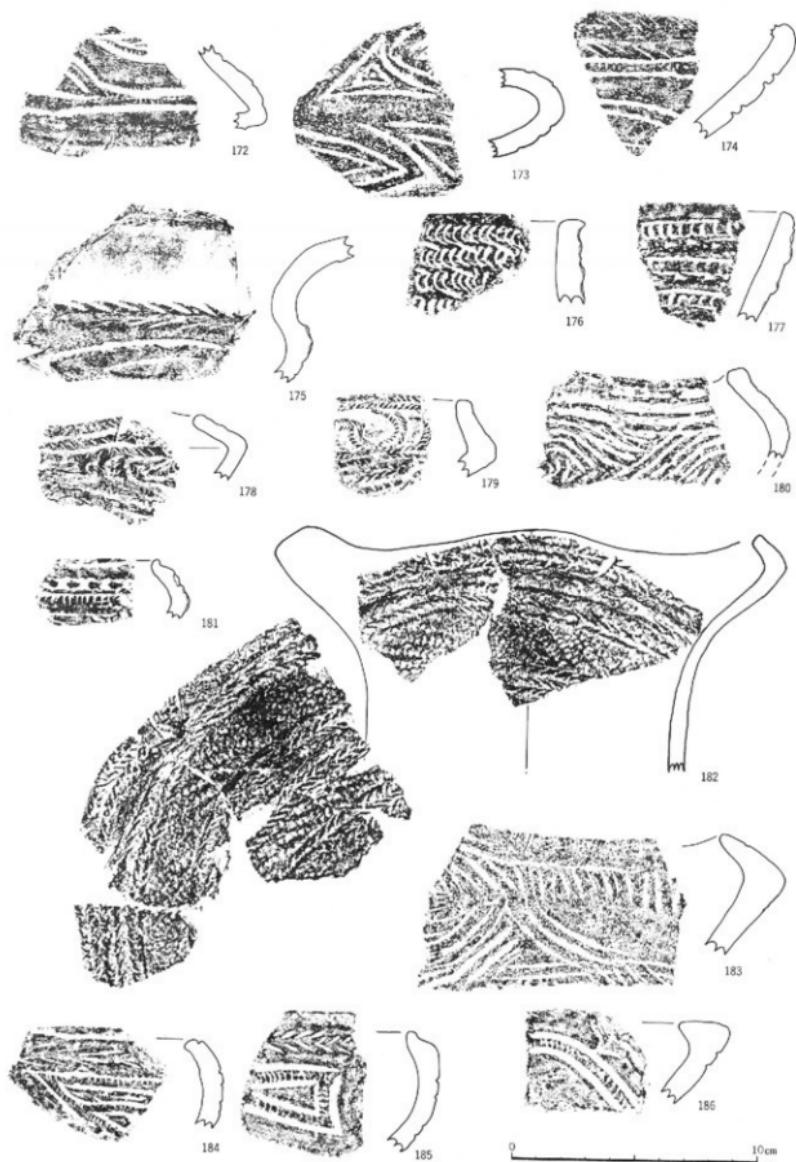
第14図 土器実測図（9）



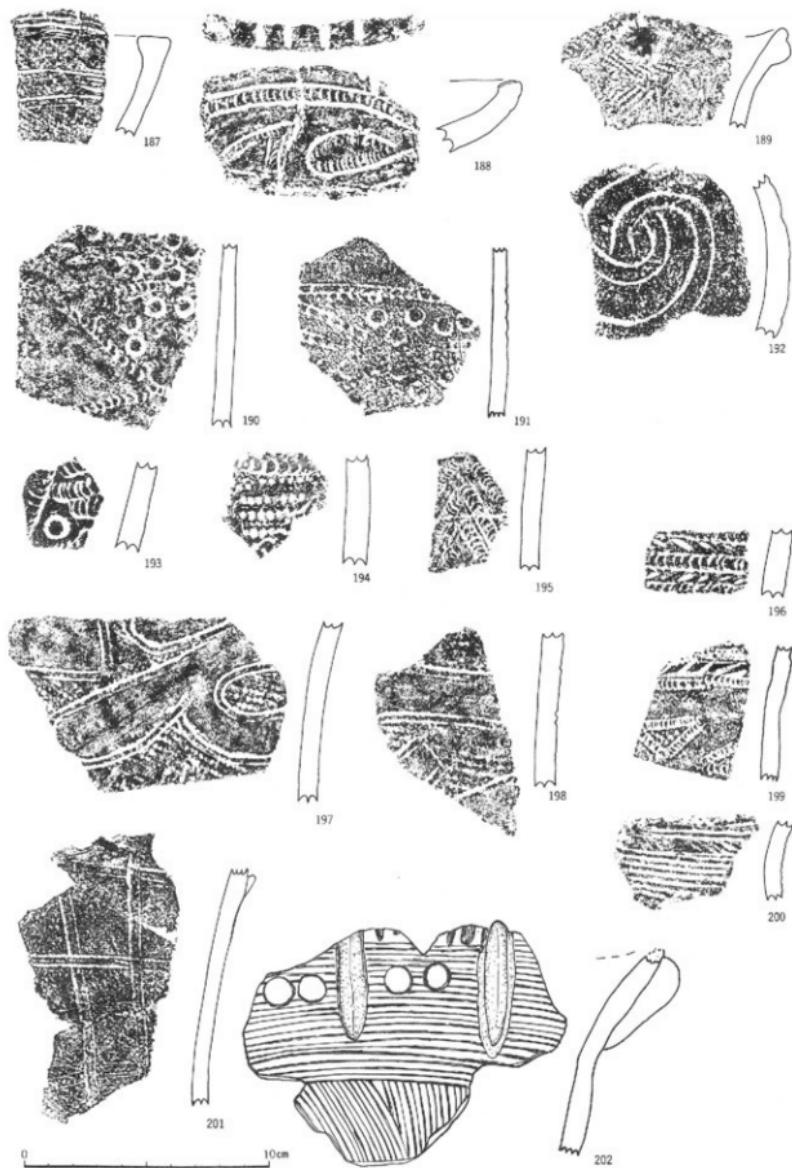
第15図 土器実測図 (10)



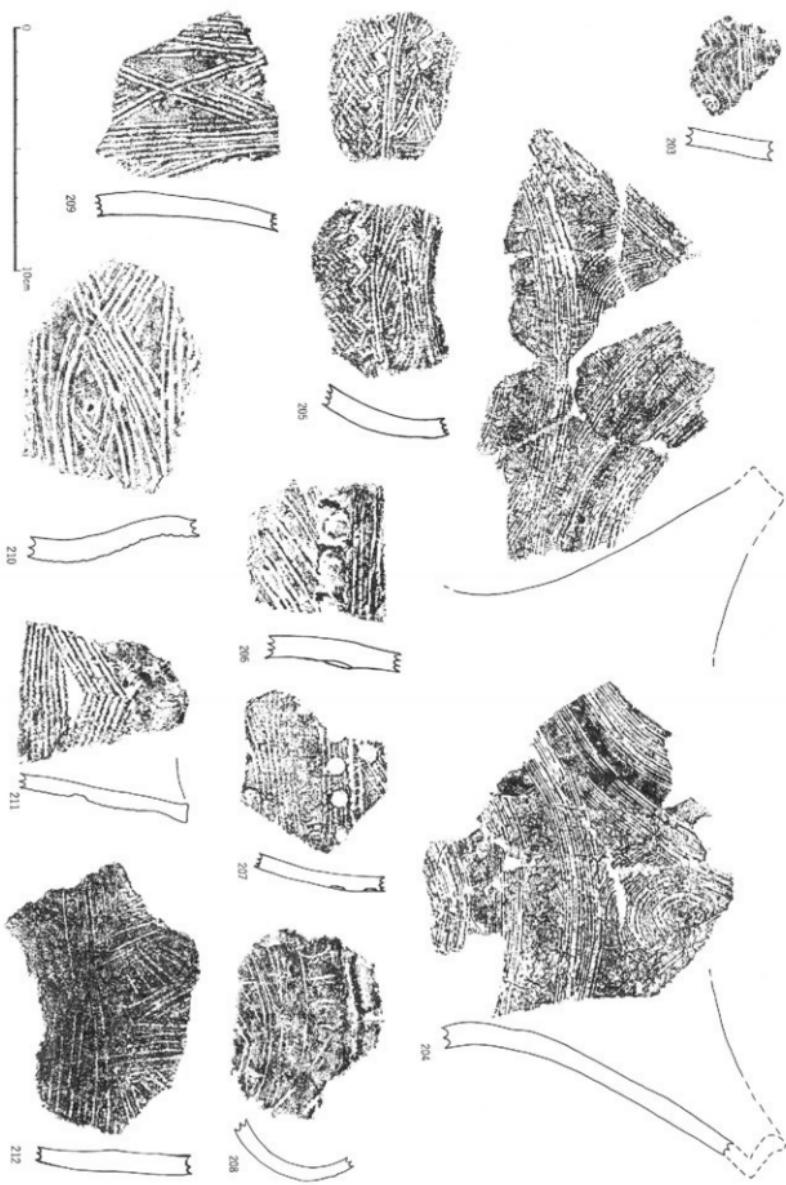
第16図 土器実測図 (11)



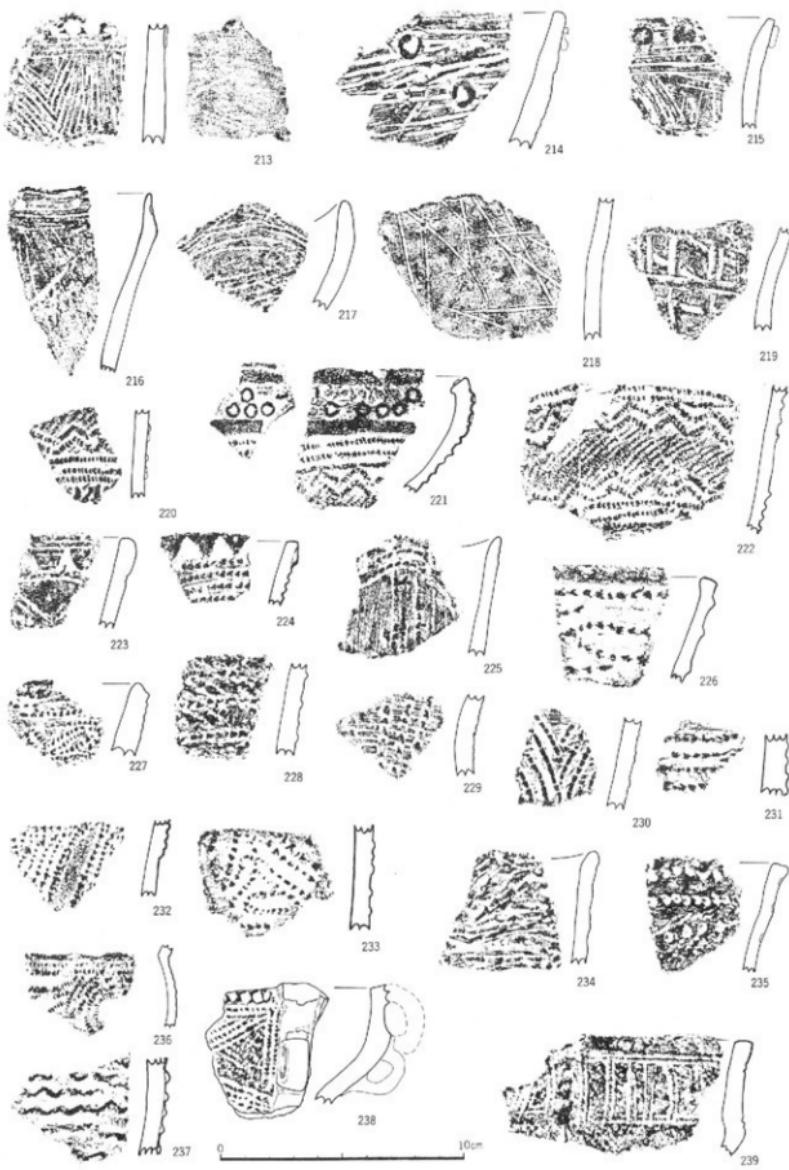
第17図 土器実測図 (12)



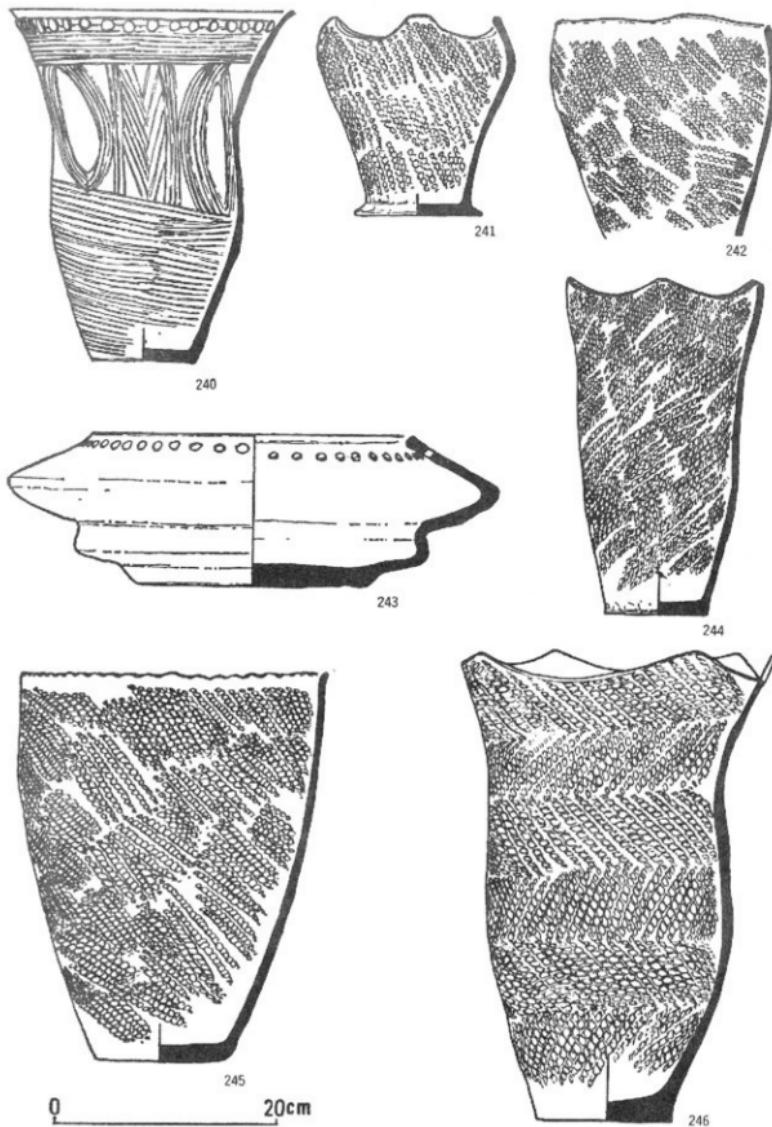
第18図 土器実測図（13）



第19図 土器実測図 (14)



第20図 土器実測図 (15)



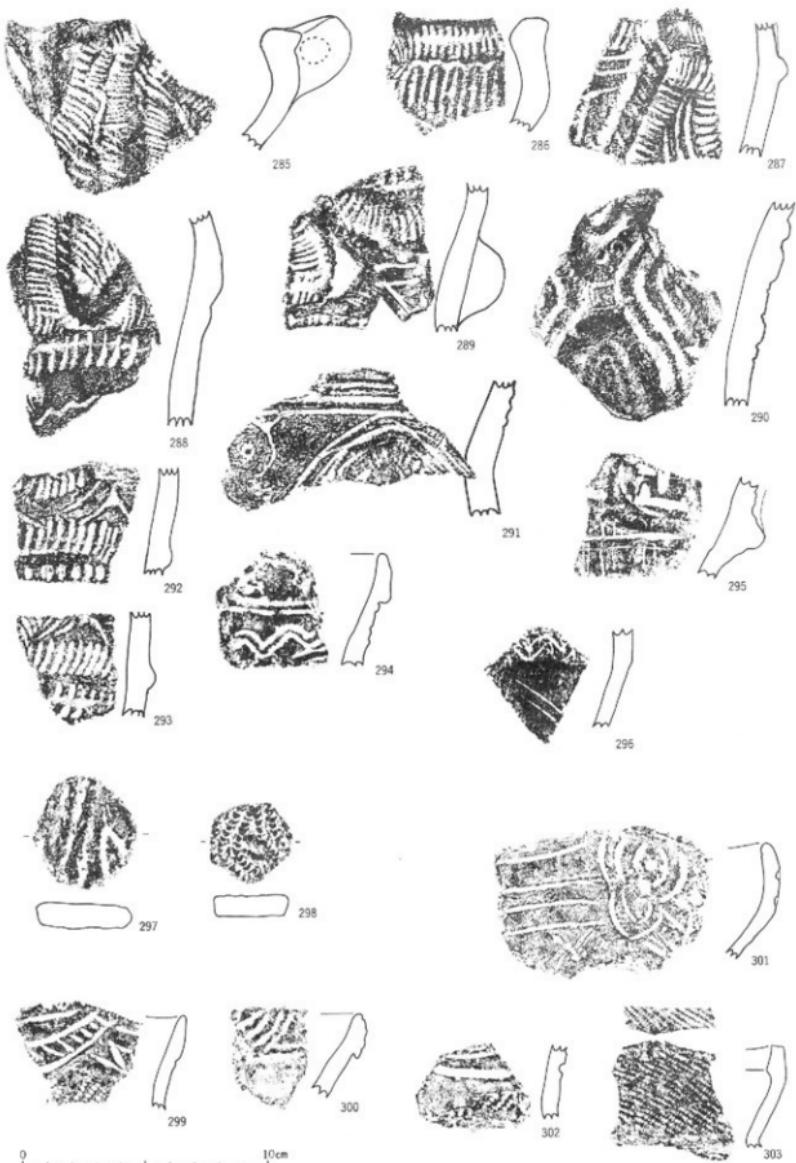
第21図 土器実測図 (16)



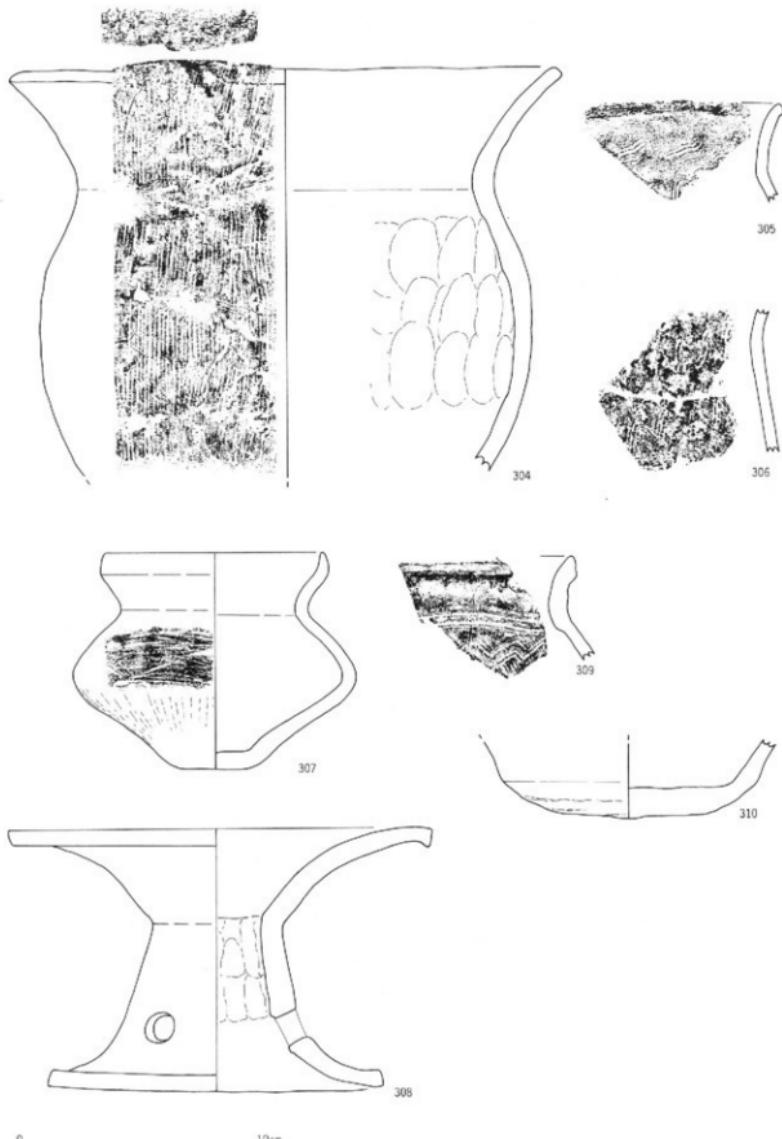
第22図 土器実測図 (17)



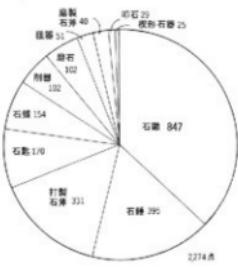
第23図 土器実測図 (18)



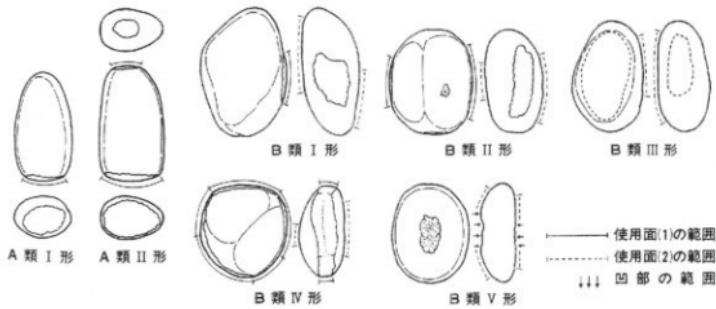
第24図 土器実測図 (19)



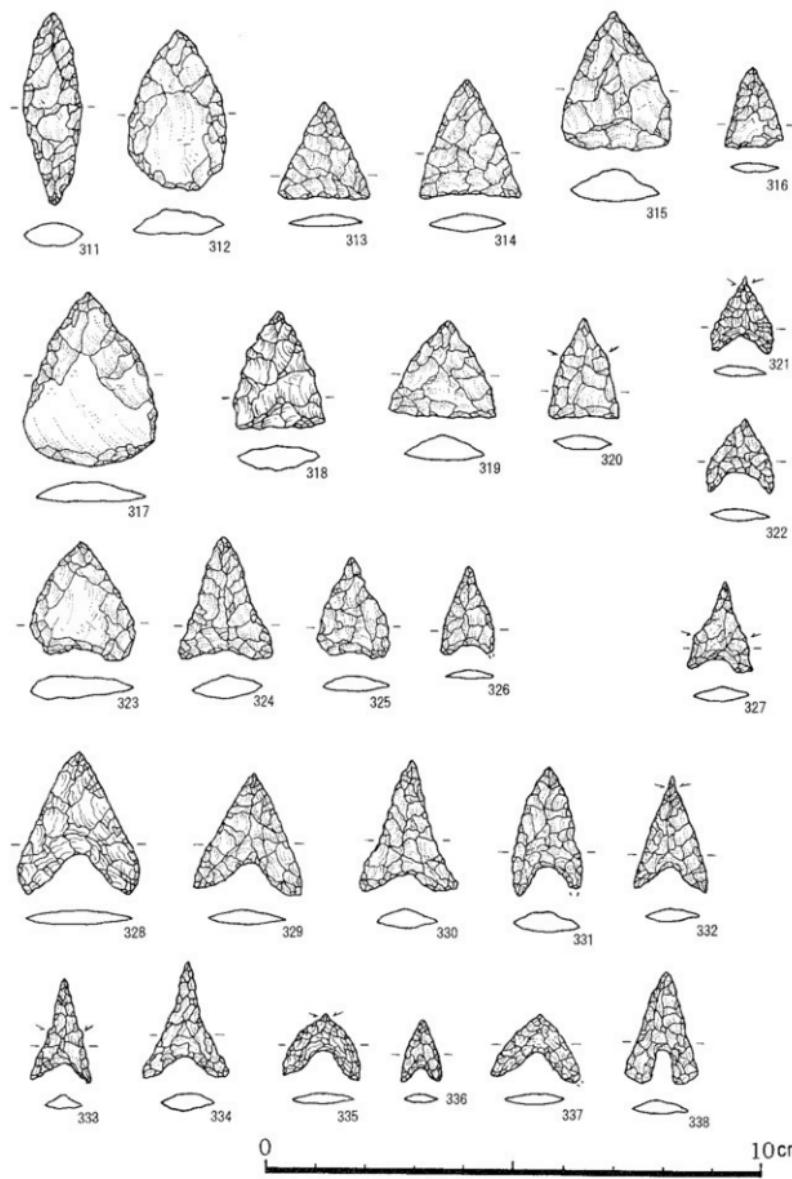
第25図 土器実測図 (20)



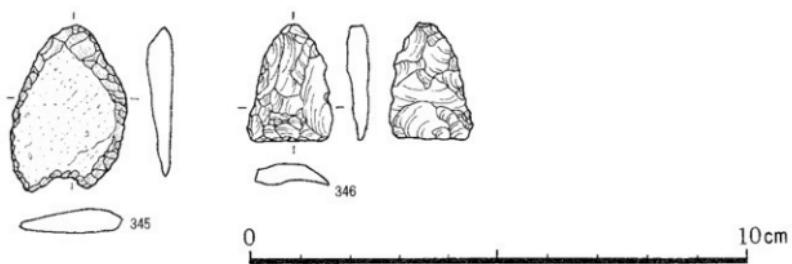
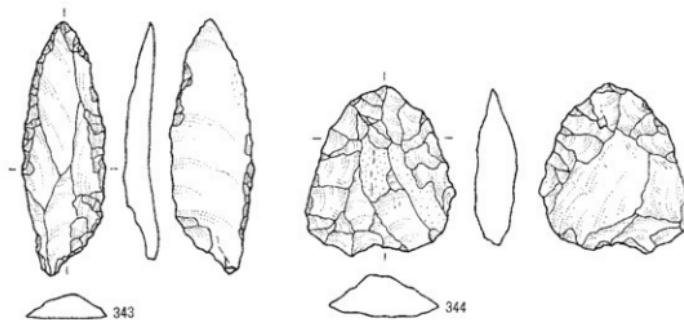
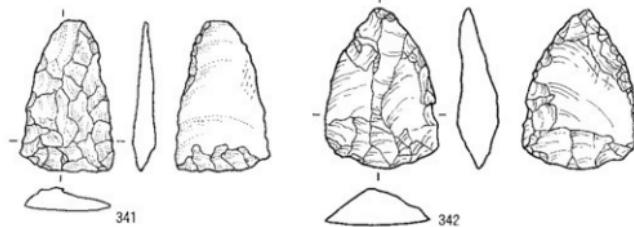
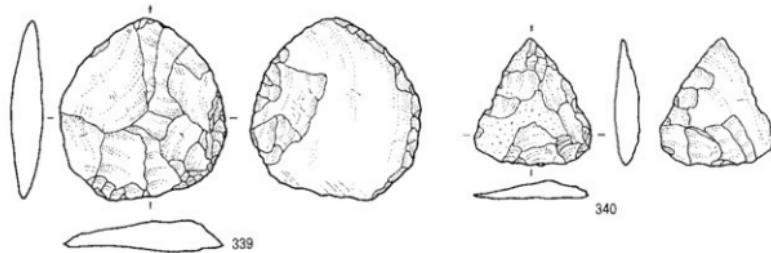
第26図 石器の占有率



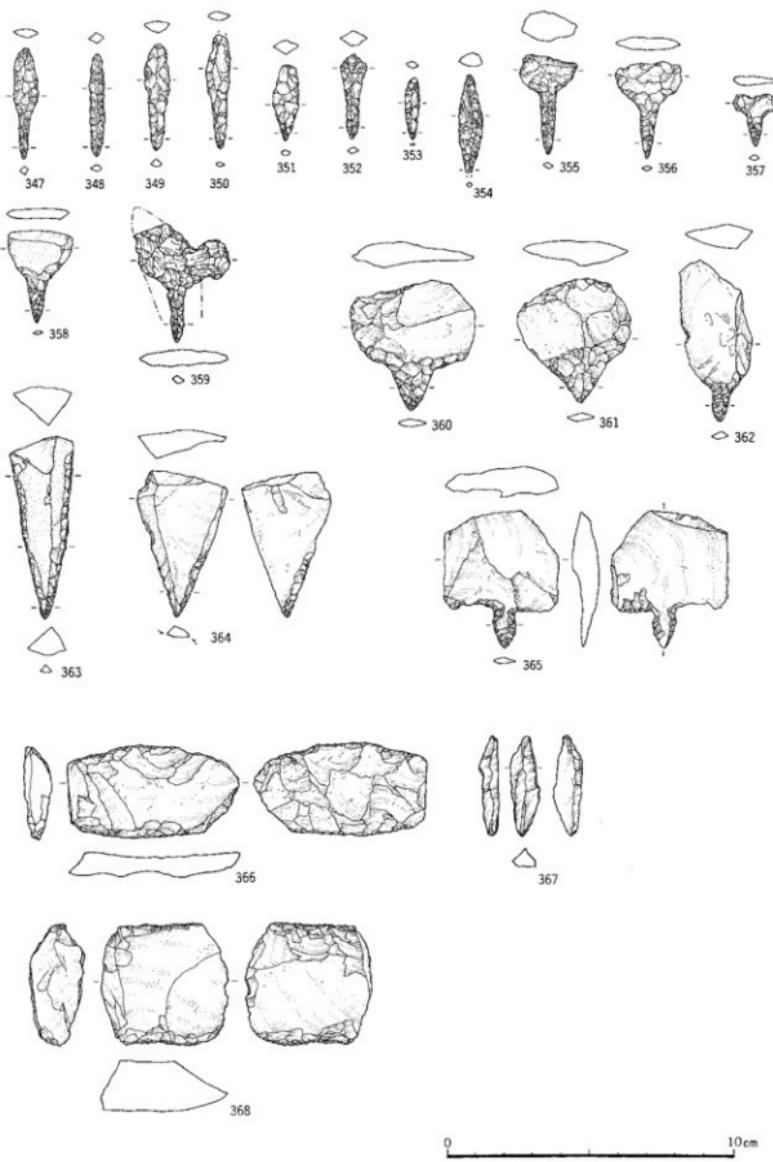
第27図 磨石の分類



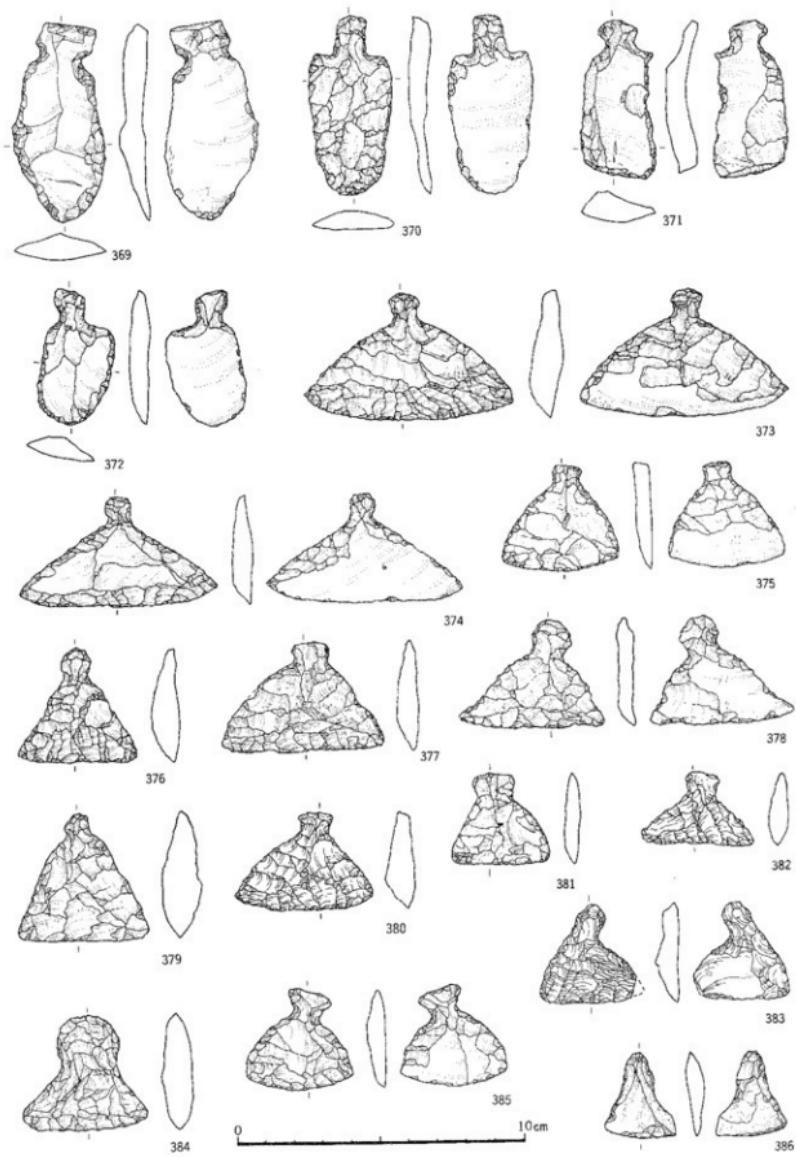
第28図 石器実測図（1） 石鏃



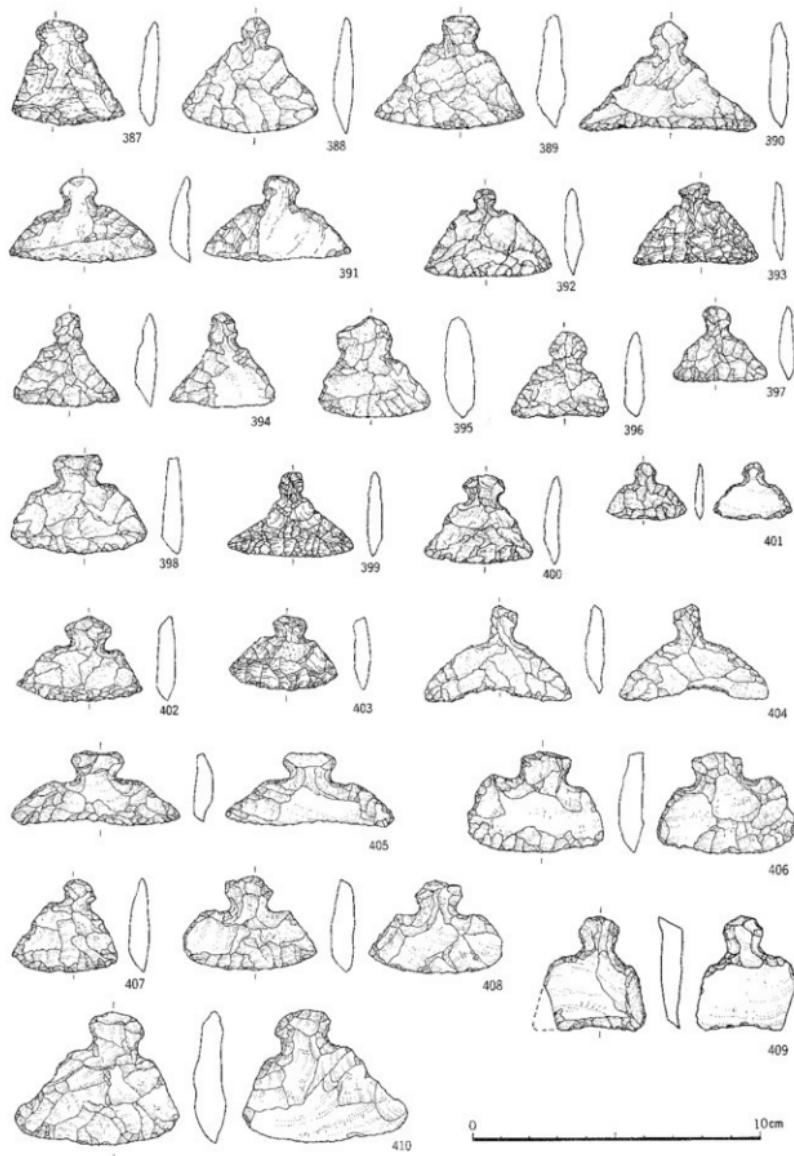
第29図 石器実測図（2） 石鏃未成品



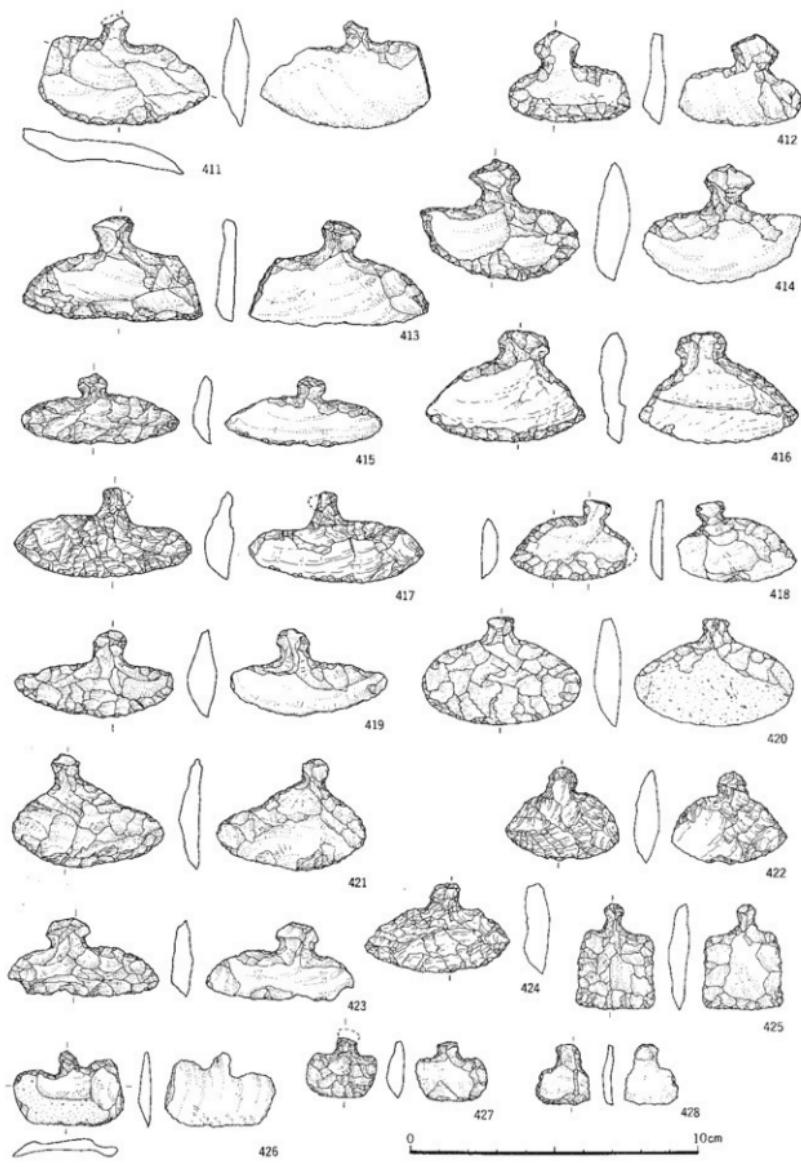
第30図 石器実測図（3） 石錐（347～365）楔形石器（366～368）



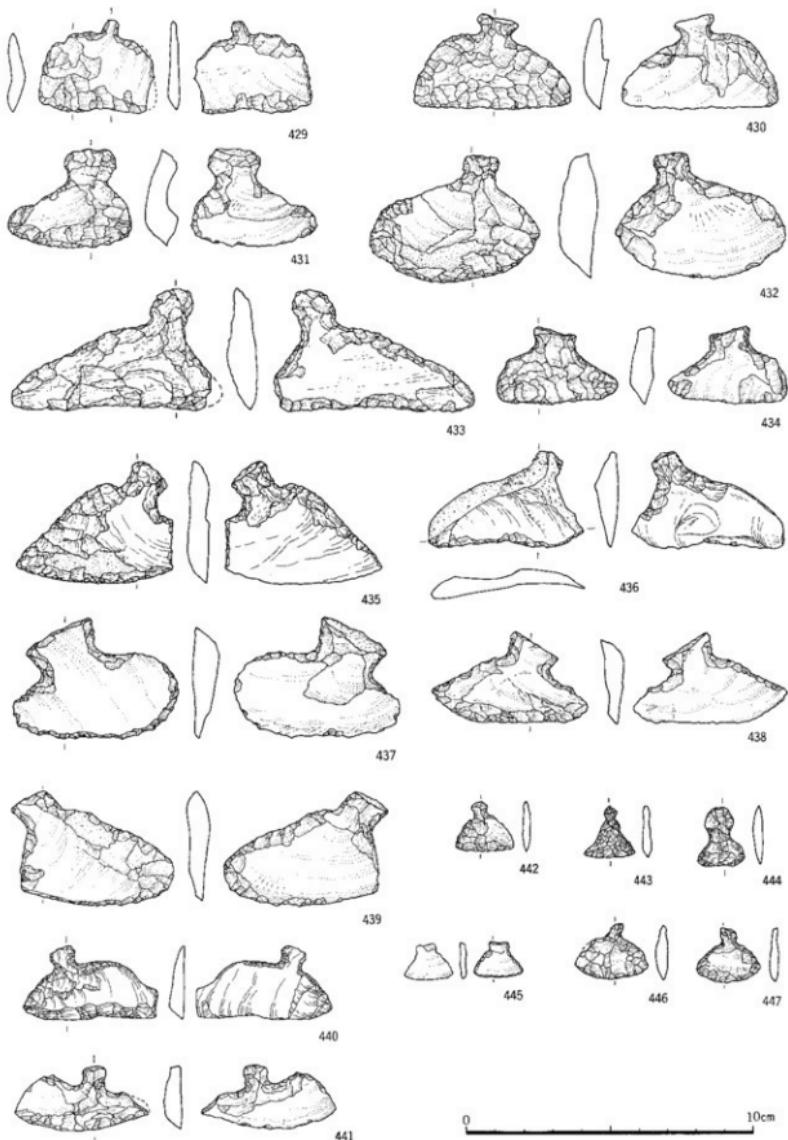
第31図 石器実測図（4） 石匙



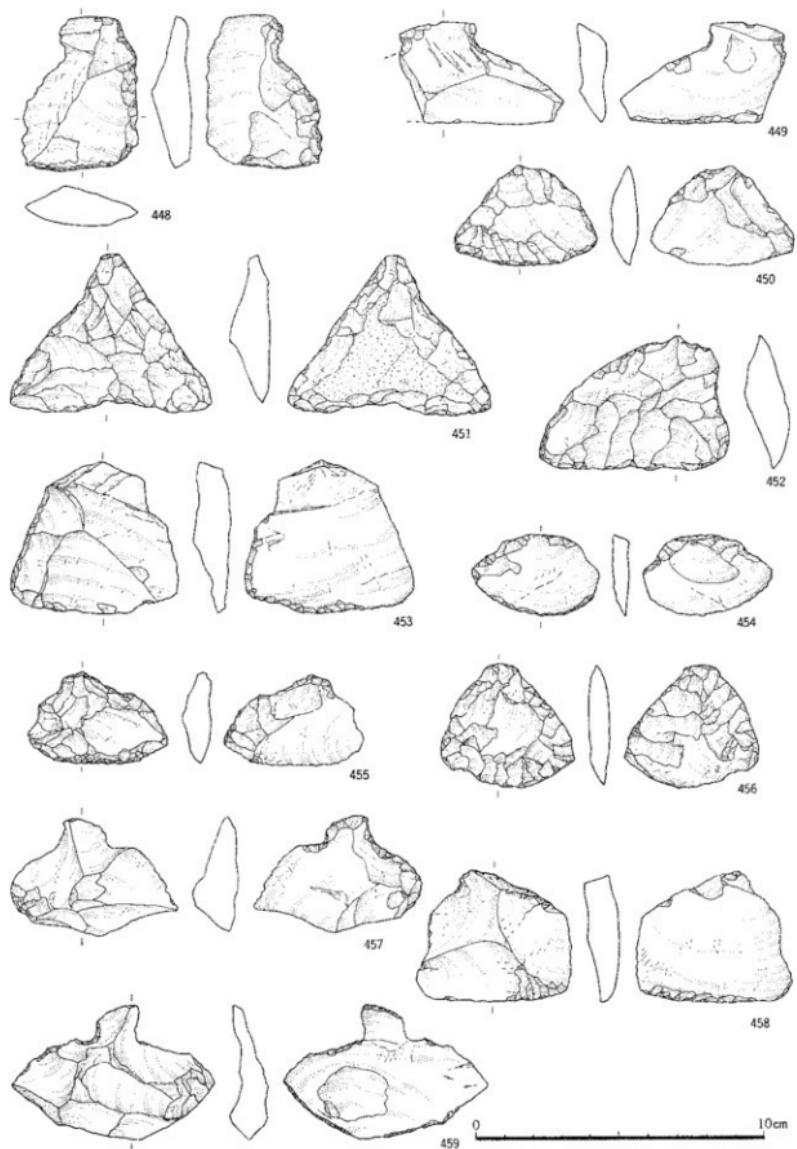
第32図 石器実測図（5） 石匙



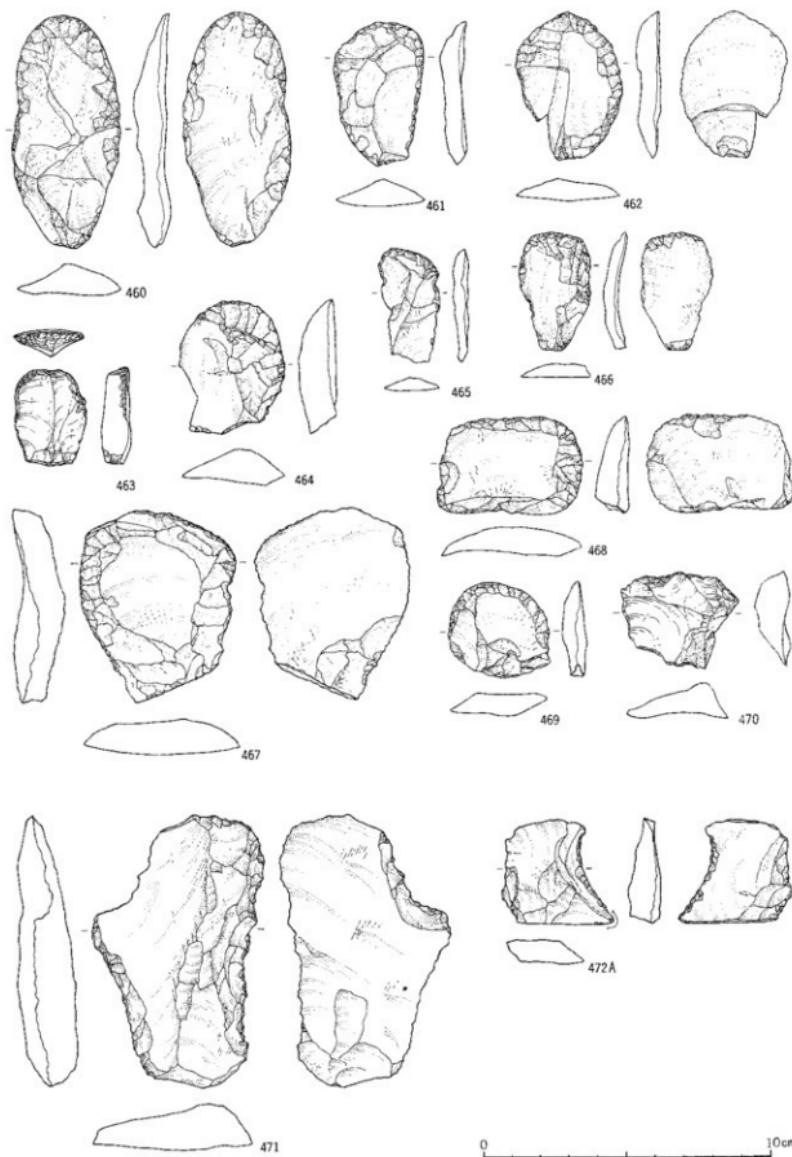
第33図 石器実測図（6） 石匙



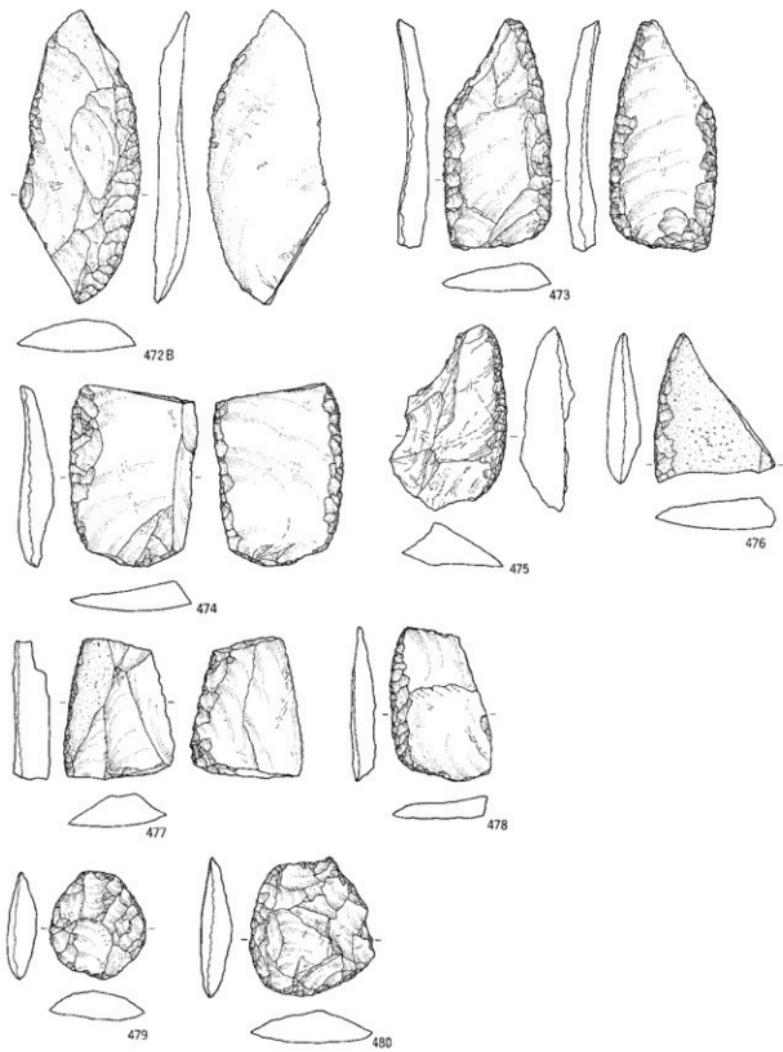
第34図 石器実測図（7） 石匙



第35図 石器実測図（8） 石匙未成品

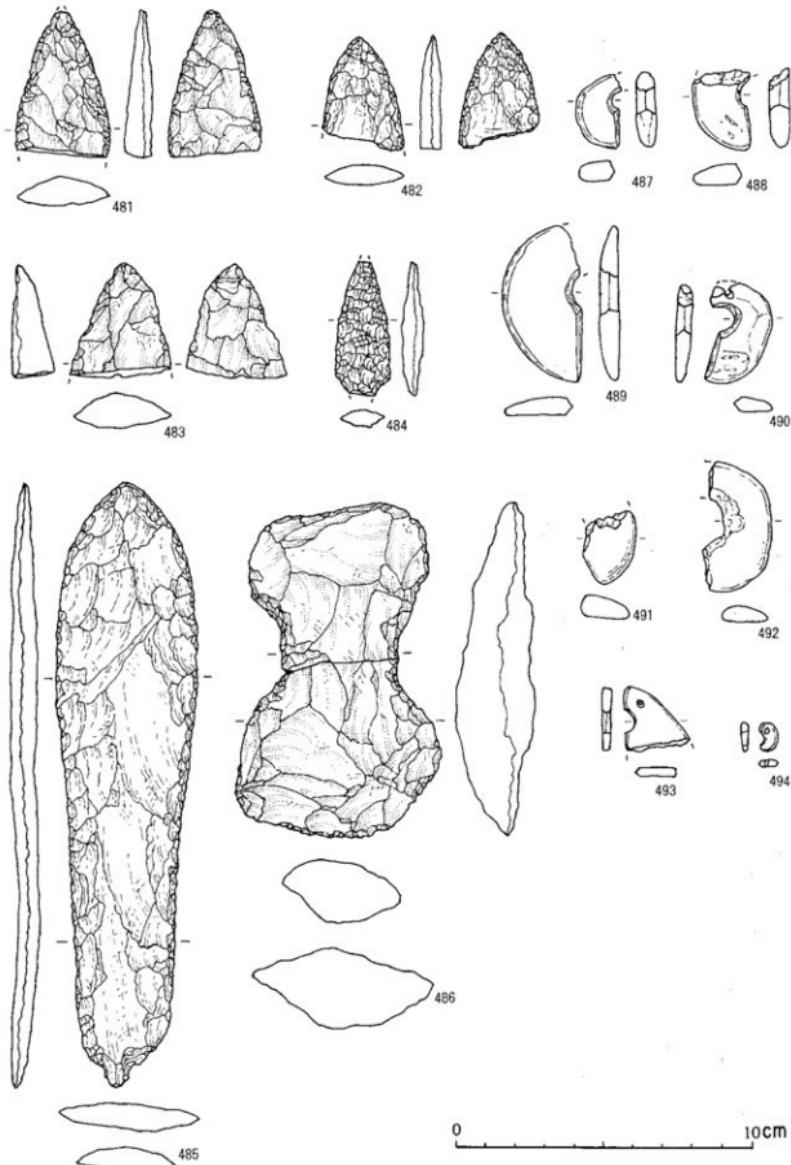


第36図 石器実測図（9） 刮器

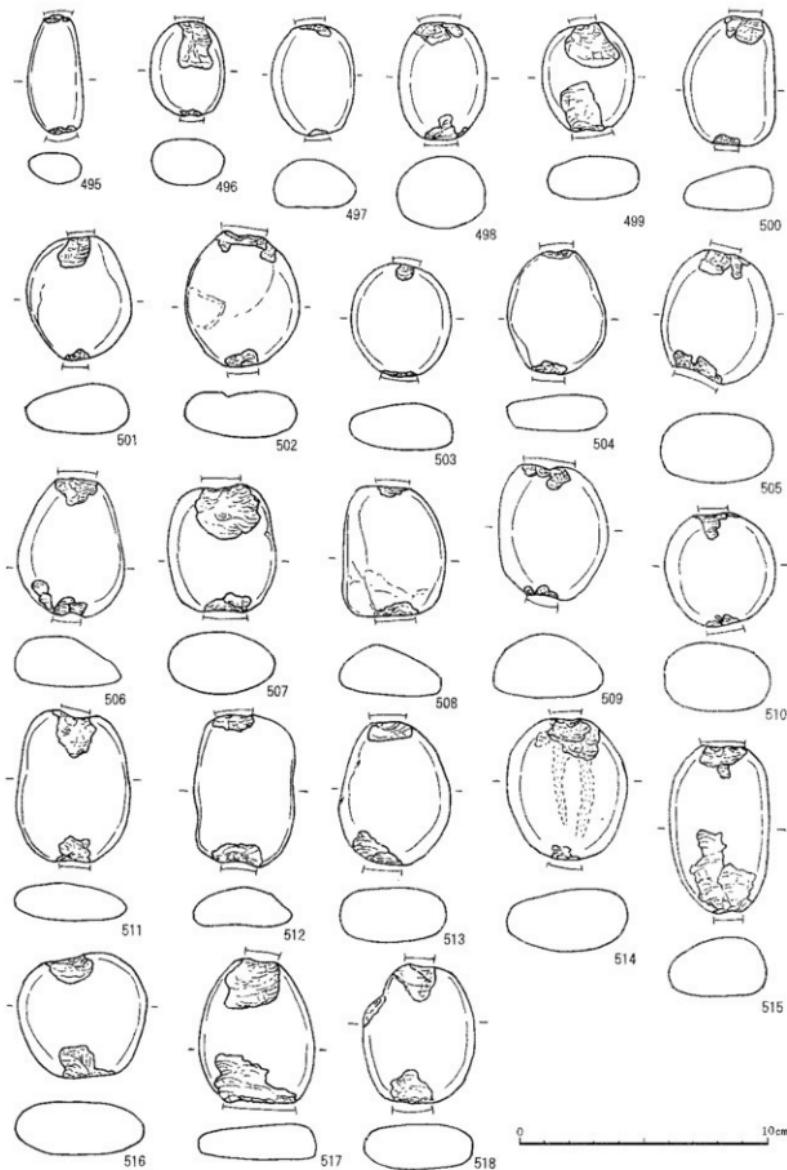


0 1 10cm

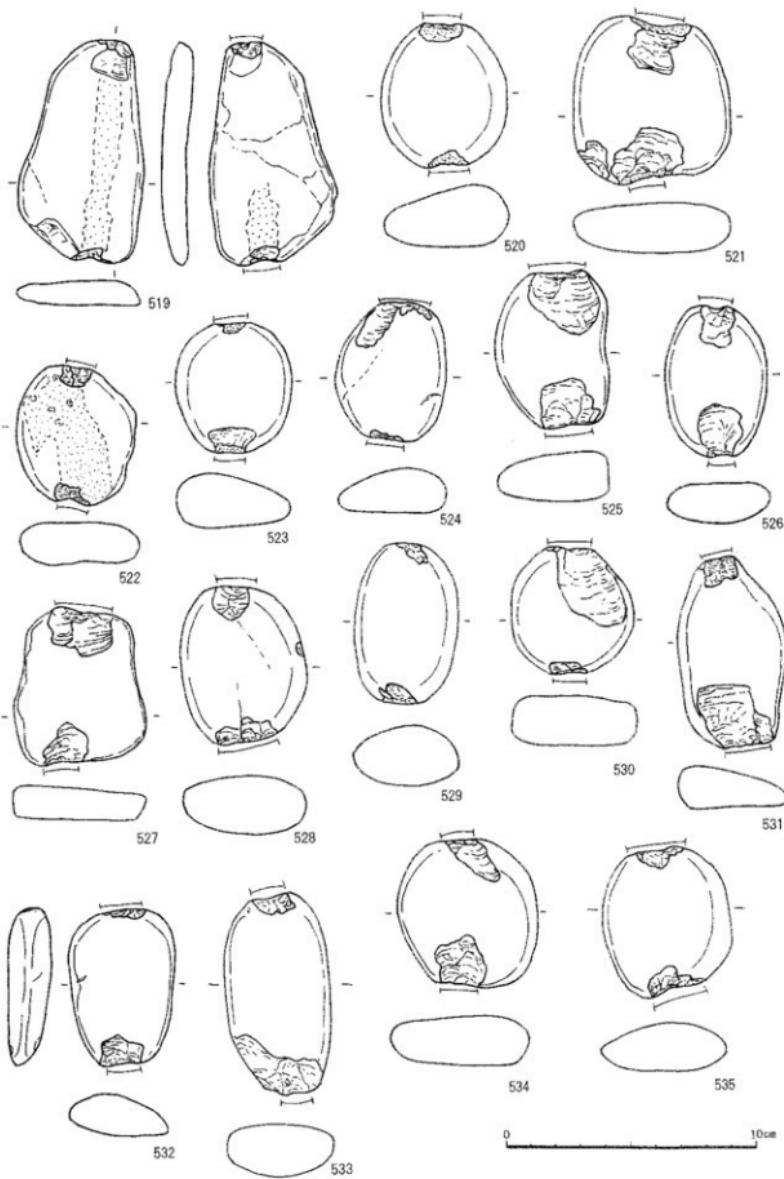
第37図 石器実測図 (10) 削器



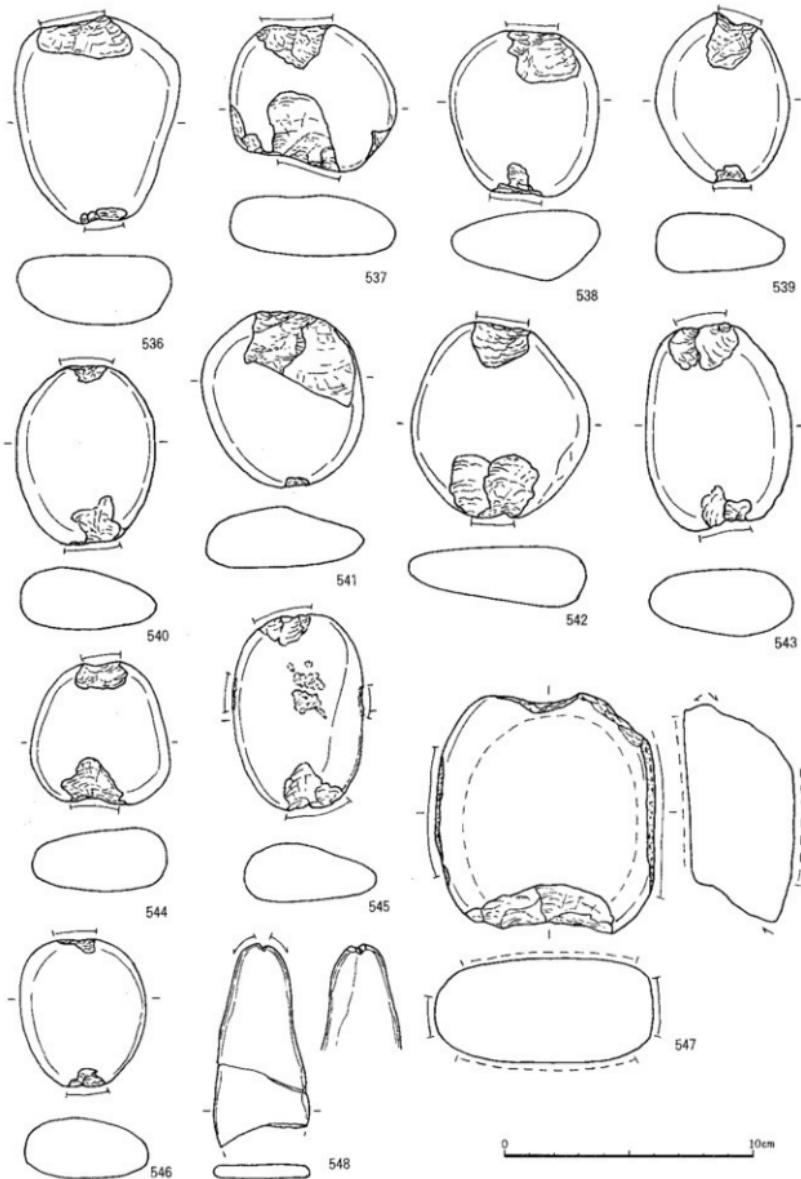
第38図 石器実測図 (11) 尖頭器 (481、482) 同未成品 (483) 有舌尖頭器 (484) 小石刀 (485)  
分銅形石器 (486) 塊状耳飾 (487～493) 勾玉 (494)



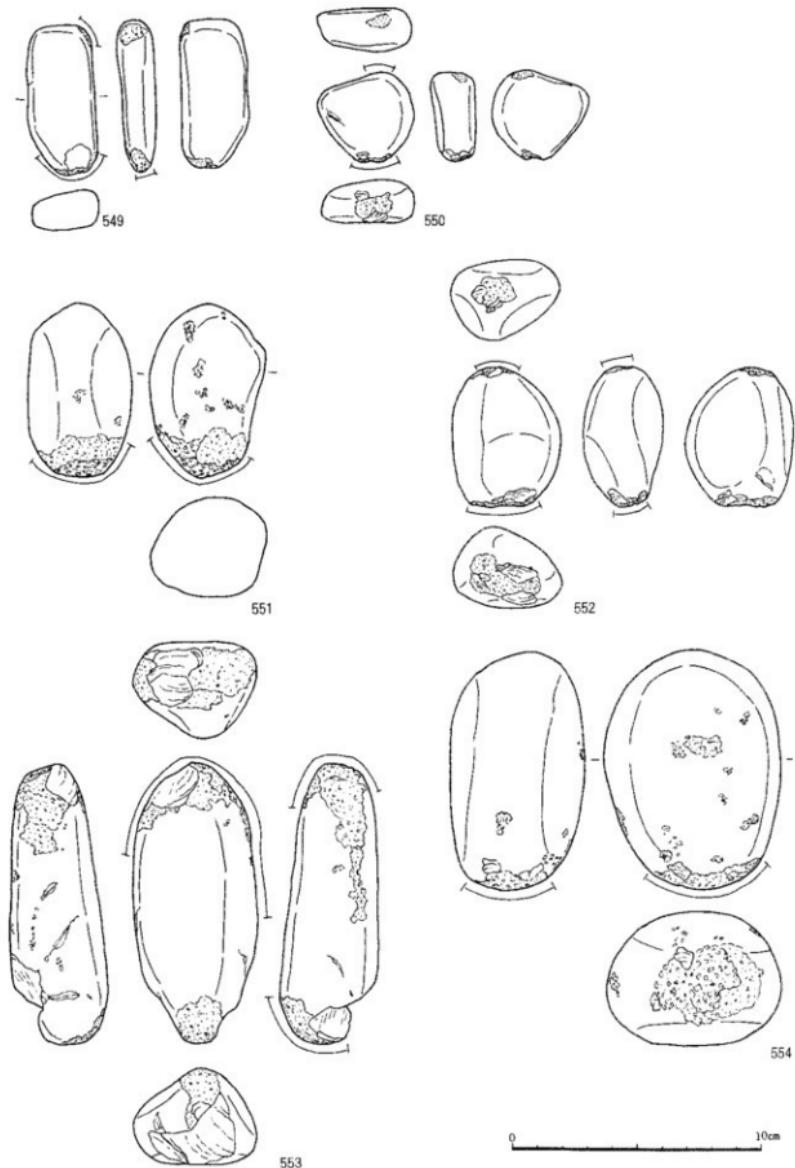
第39図 石器実測図 (12) 磚石錘



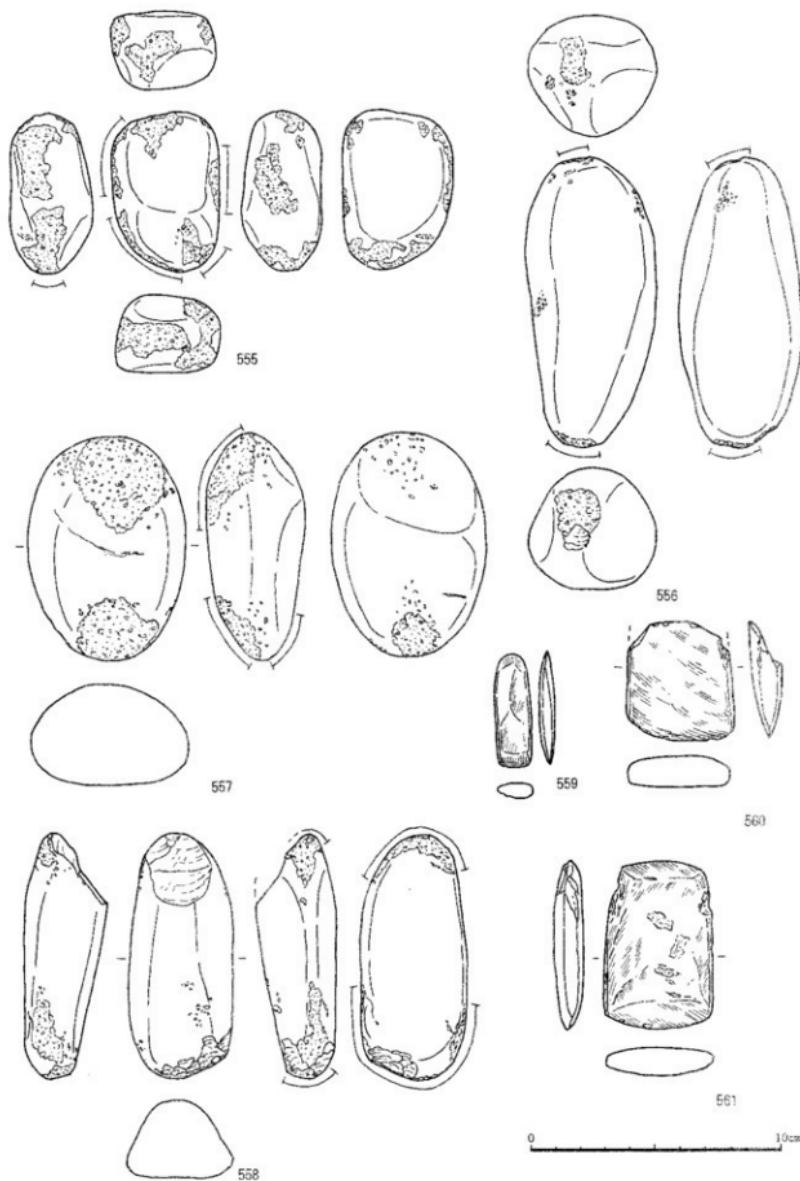
第40図 石器実測図 (13) 槌石錐



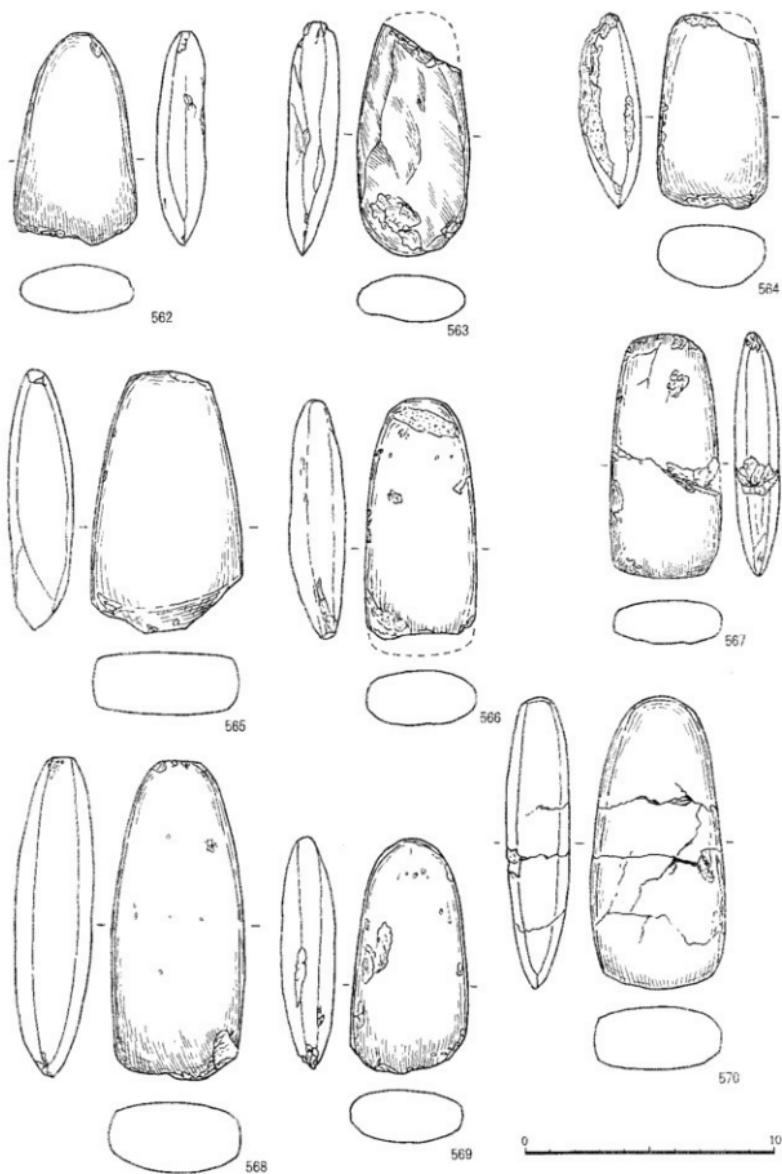
第41図 石器実測図 (14) 碓石錐 (536~547) 切目石錐 (548)



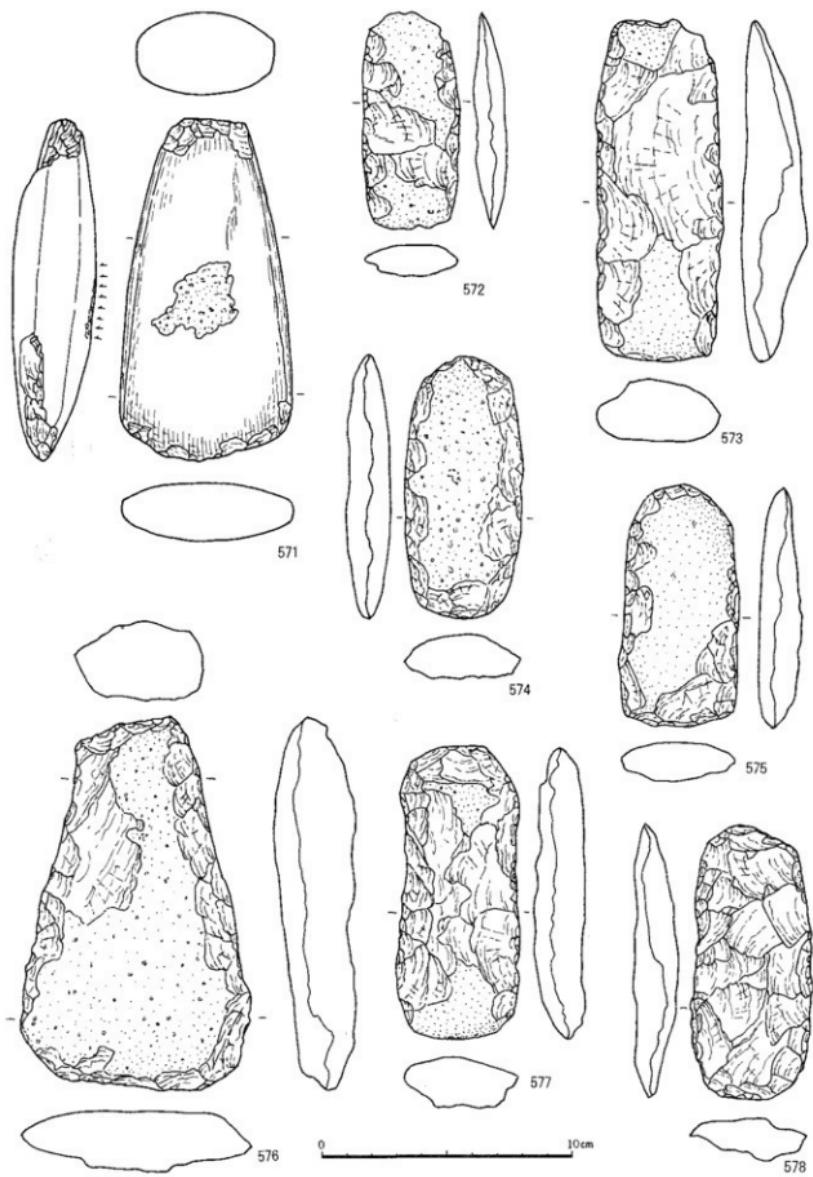
第42図 石器実測図 (15) 命石



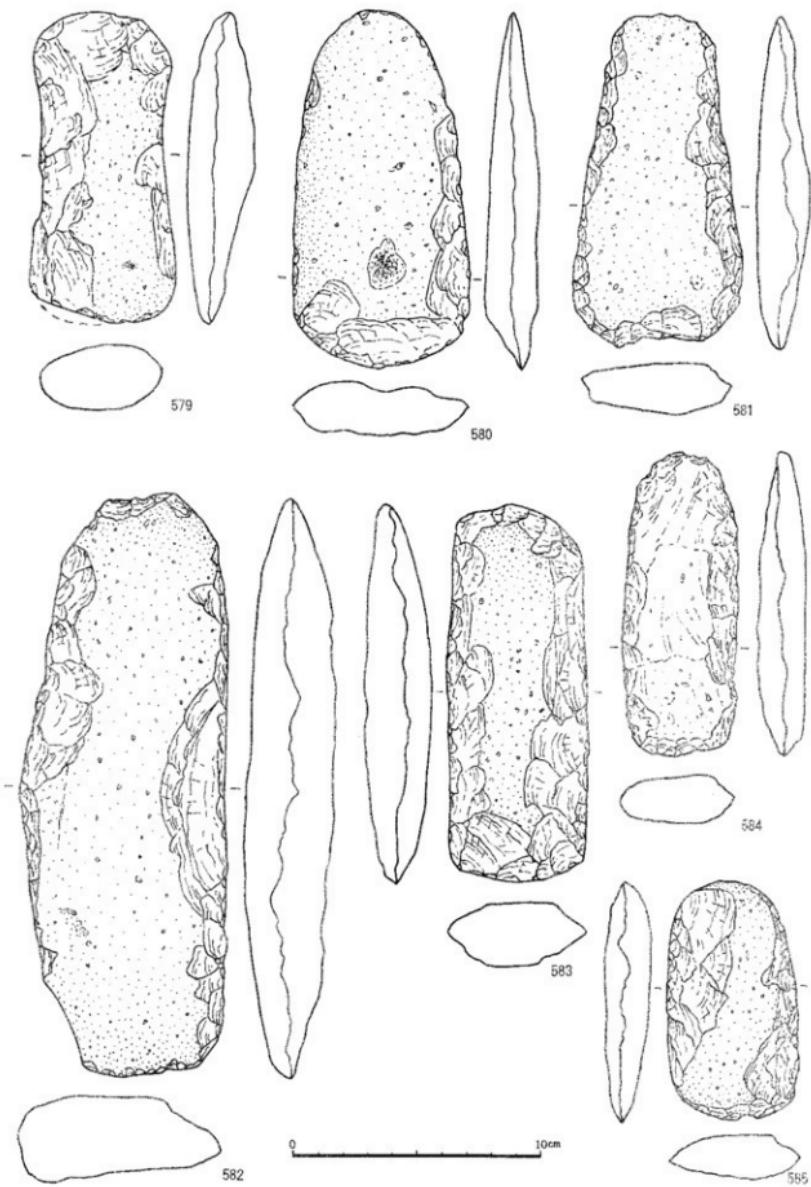
第43図 石器実測図 (16) 印石 (555~558) 磨製石斧 (559~561)



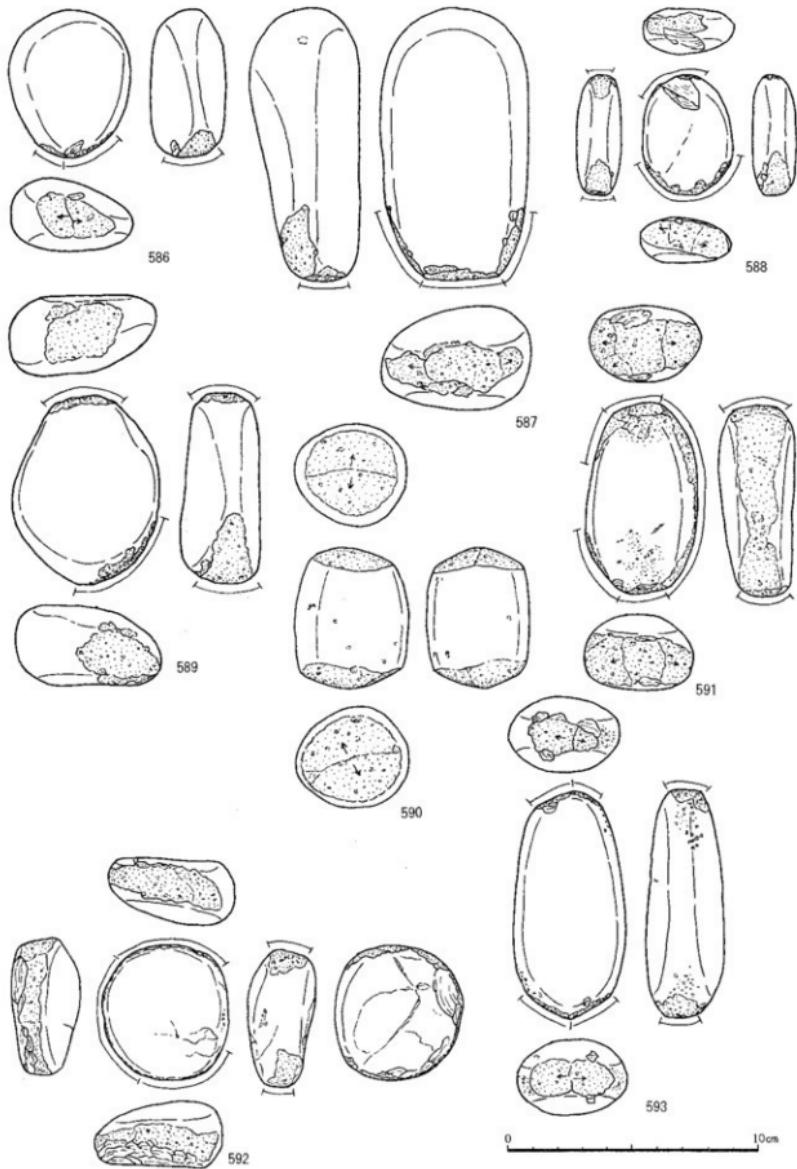
第44図 石器実測図 (17) 磨製石斧



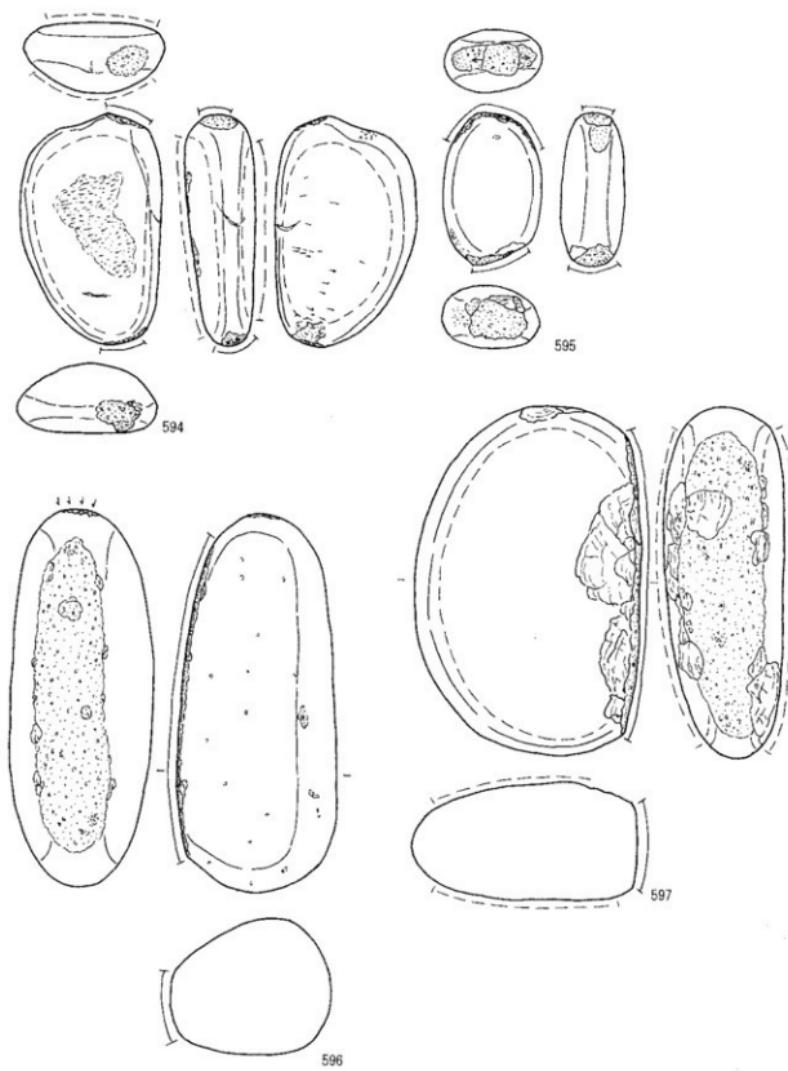
第45図 石器実測図 (18) 磨製石斧 (571) 打製石斧 (572~578)



第46図 石器実測図 (19) 打製石斧

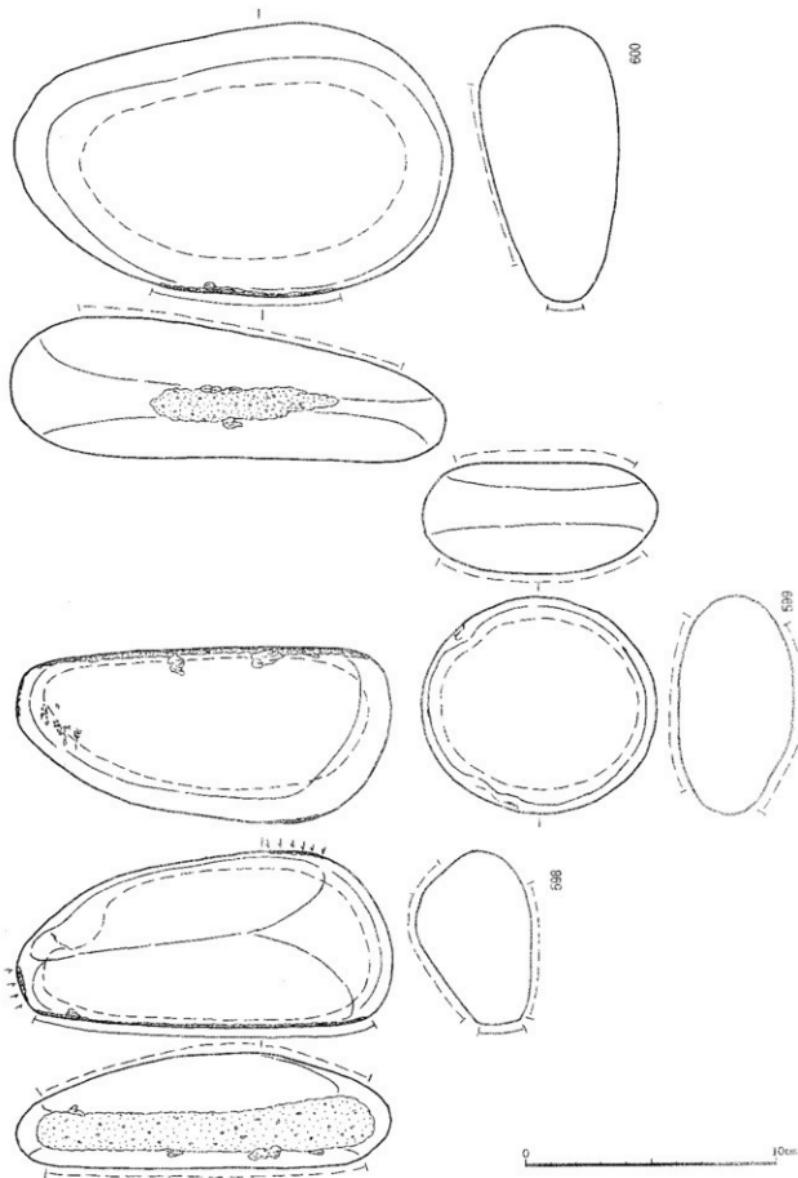


第47図 石器実測図 (20) 磨石

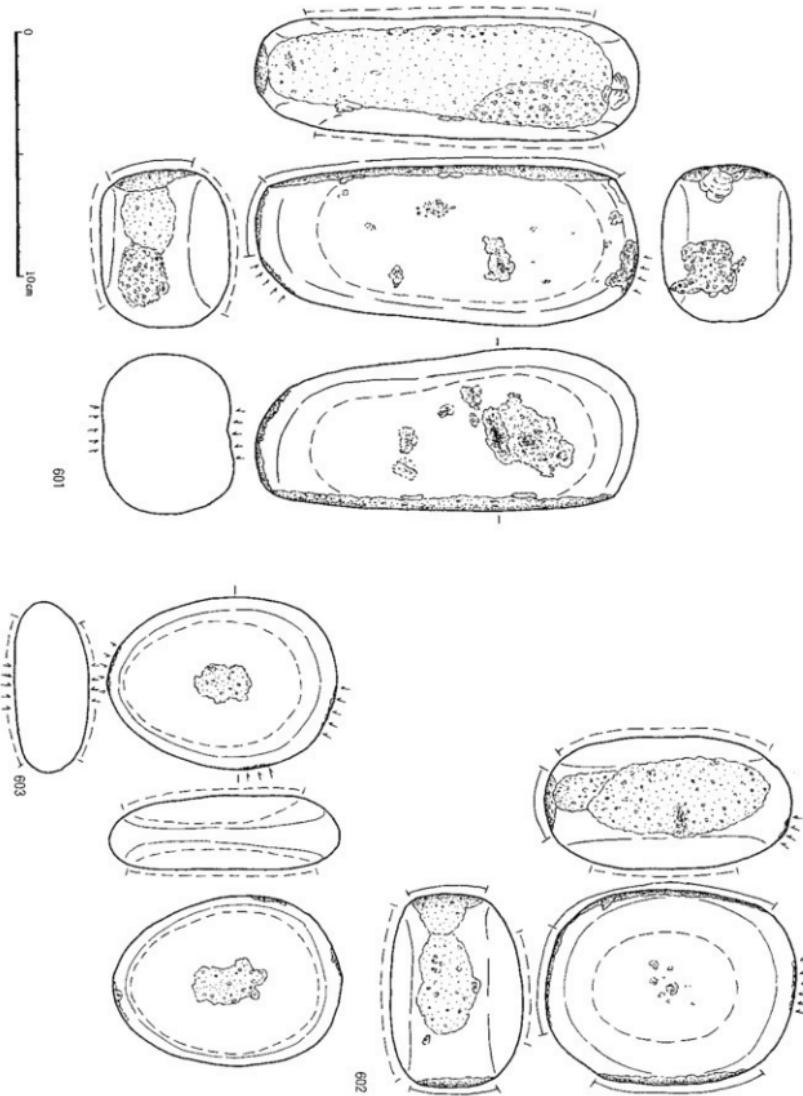


0 1 10cm

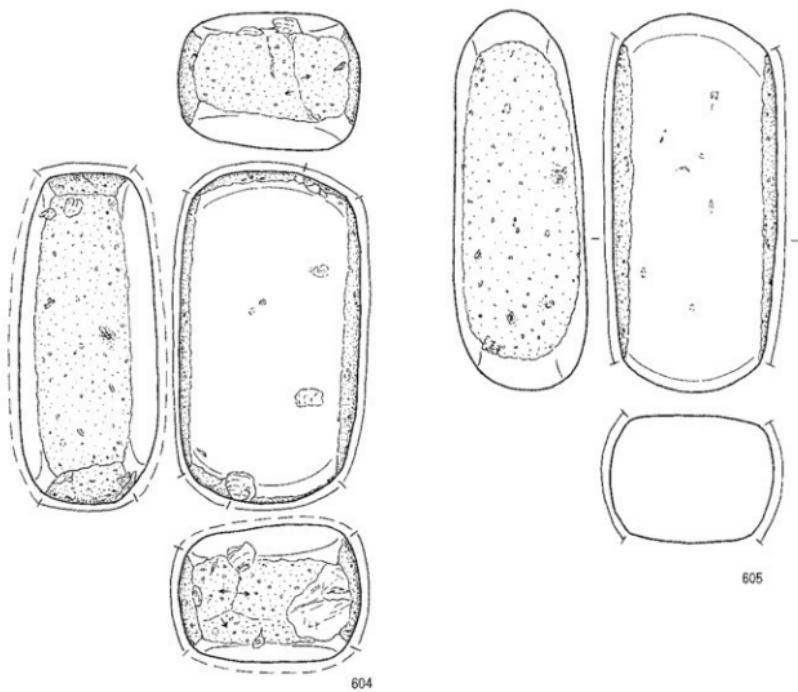
第48図 石器実測図 (21) 磨石



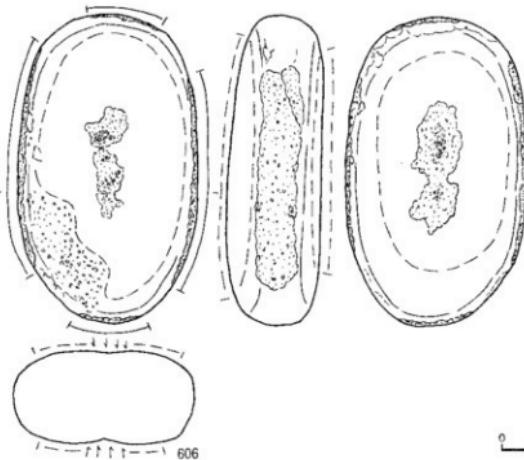
第49図 石器実測図 (22) 磨石



第50図 石器実測図 (23) 磨石

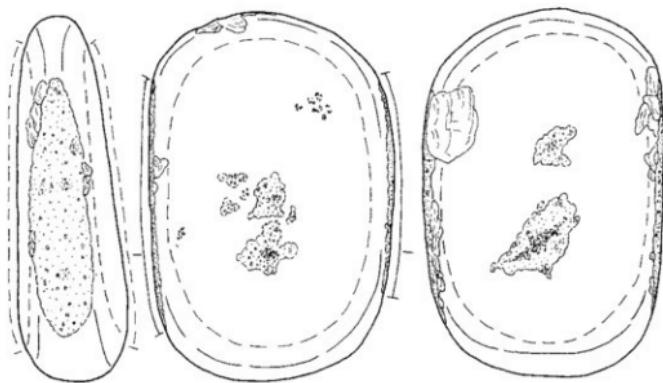


605

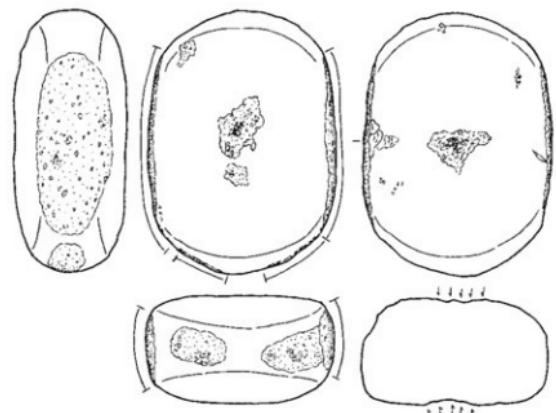


0 10 cm

第51図 石器実測図 (24) 磨石



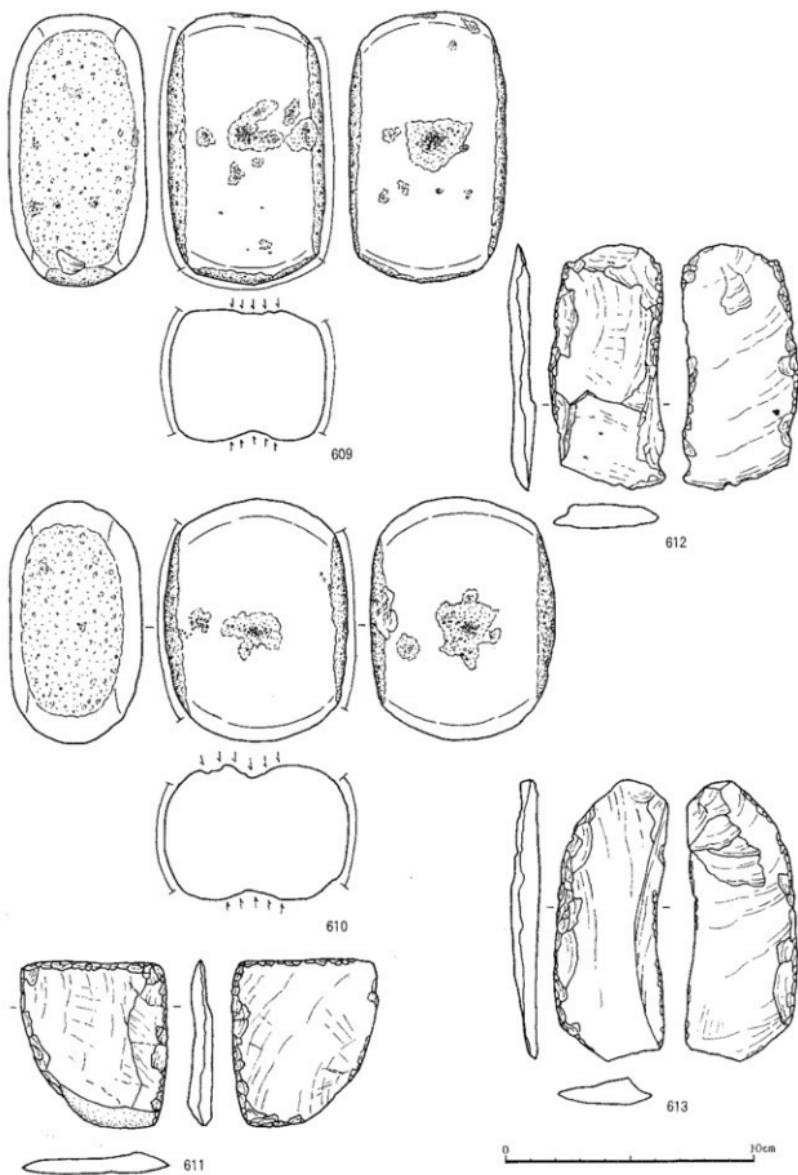
607



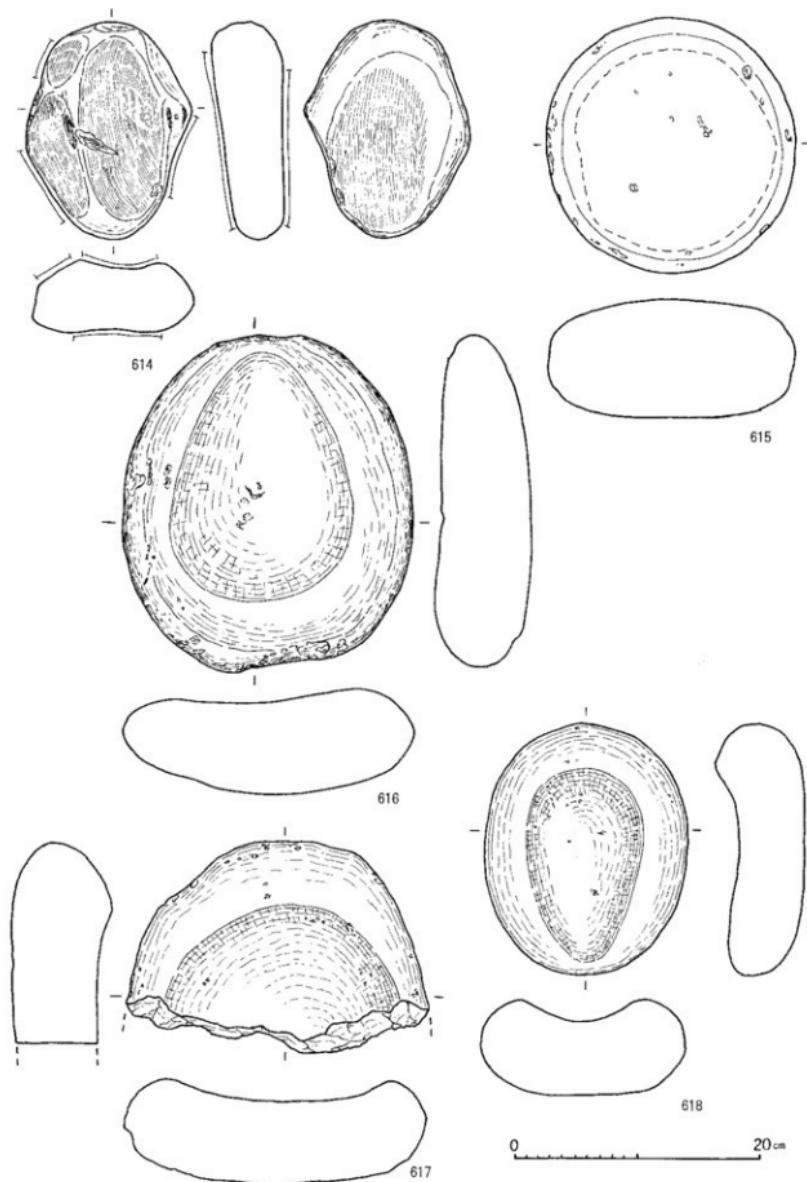
608

0 10cm

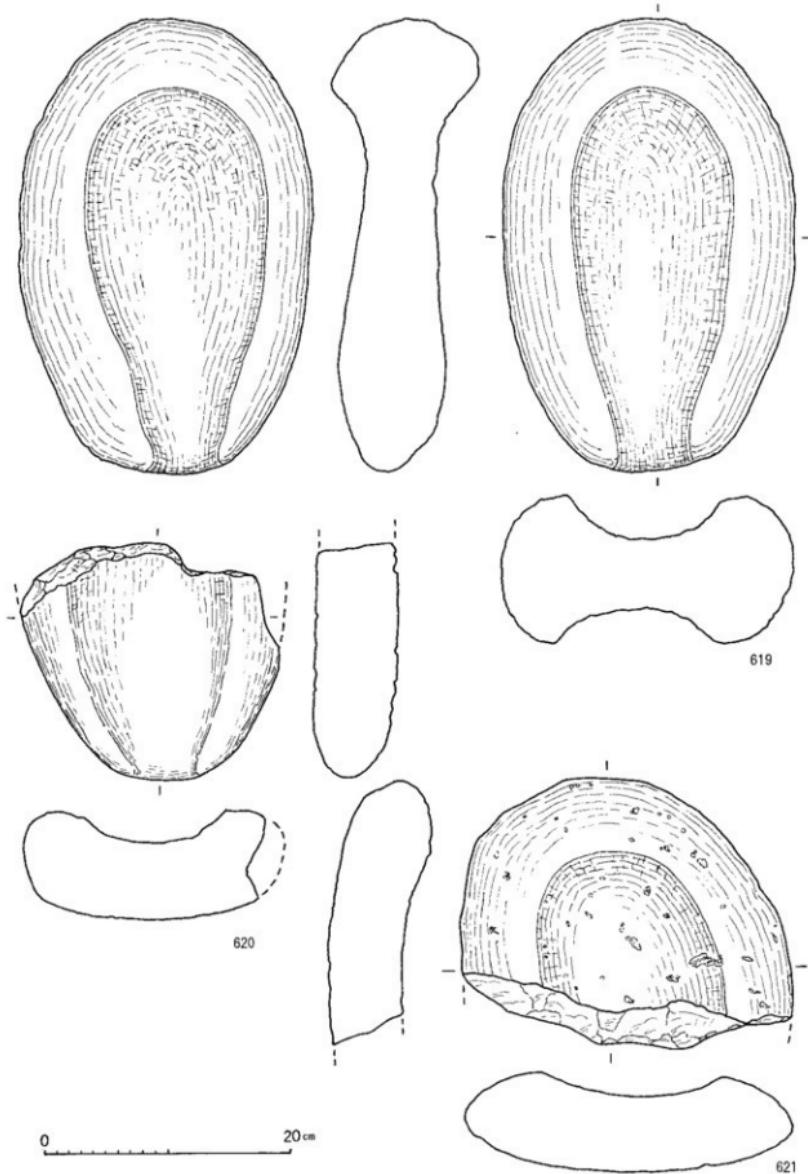
第52図 石器実測図 (25) 磨石



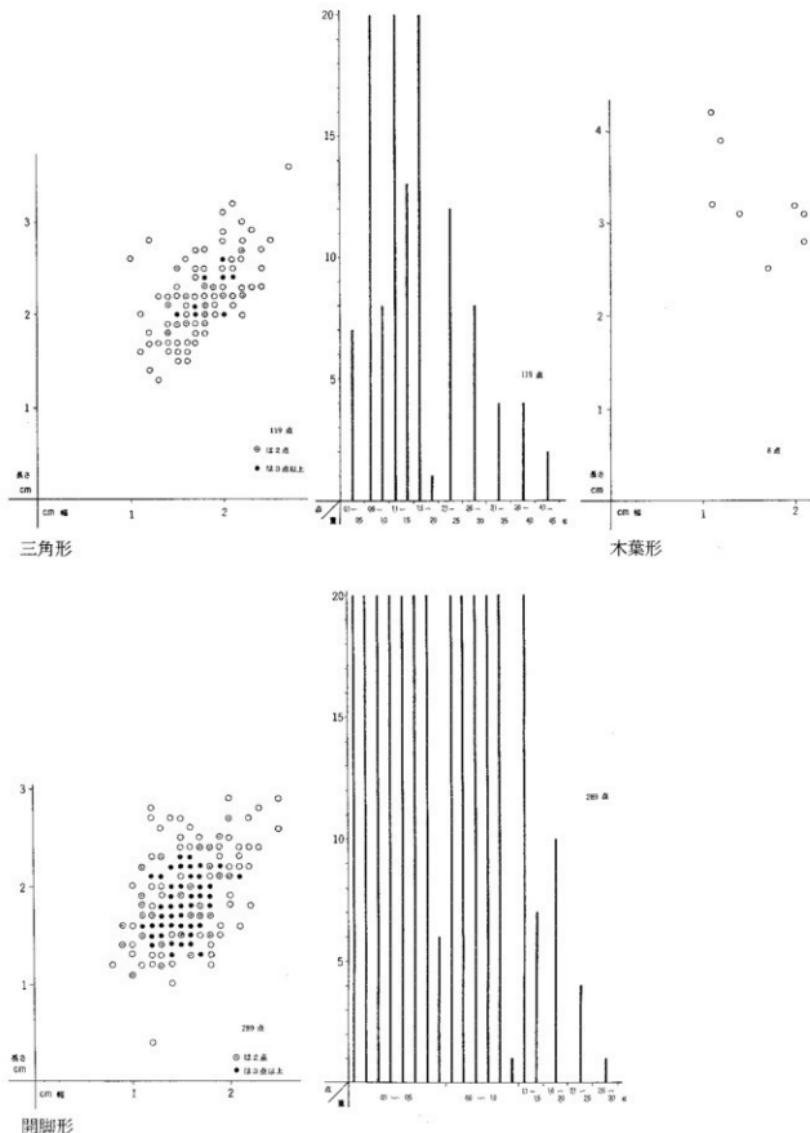
第53図 石器実測図 (26) 磨石 (609, 610) 打製石庖丁 (611~613)



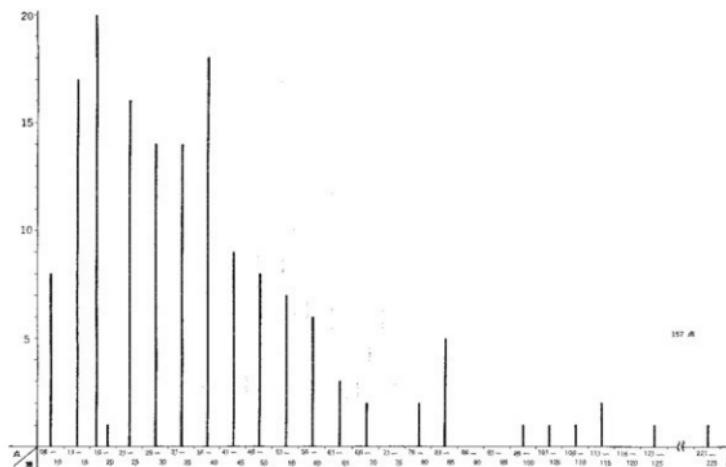
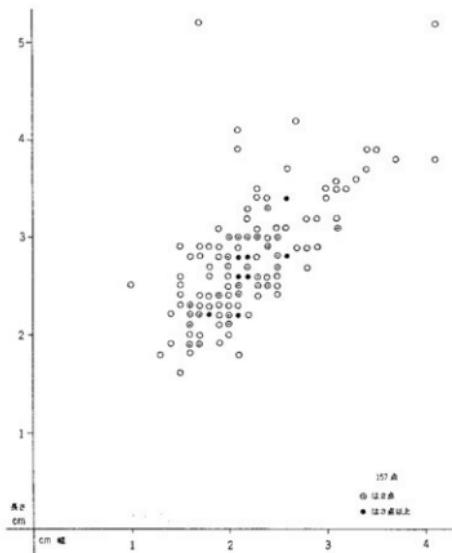
第54図 石器実測図 (27) 磨石 (614) 石皿 (615~618)



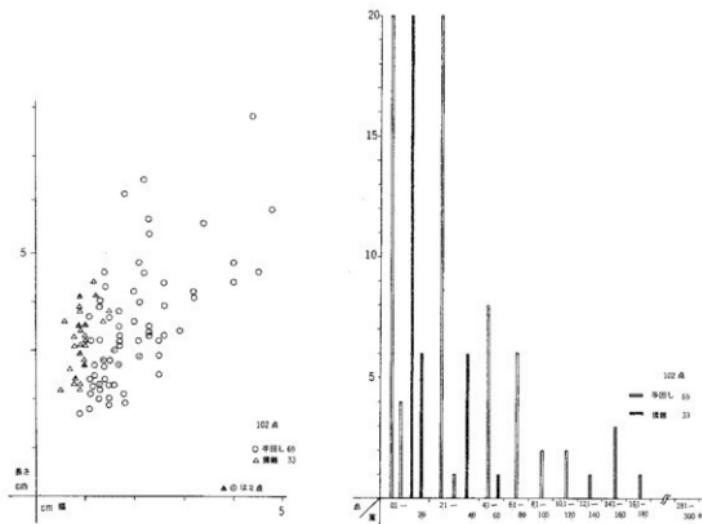
第55図 石器実測図 (28) 石皿



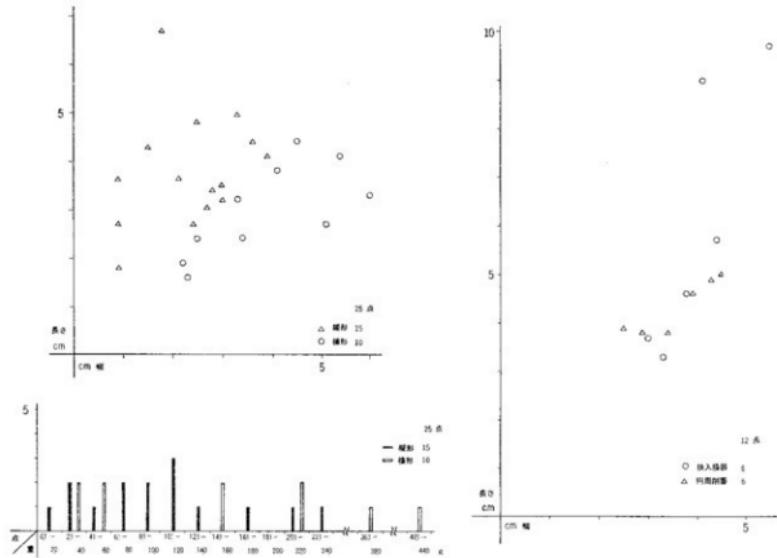
第56図 石鐵の測定



第57図 石鎧未成品の測定

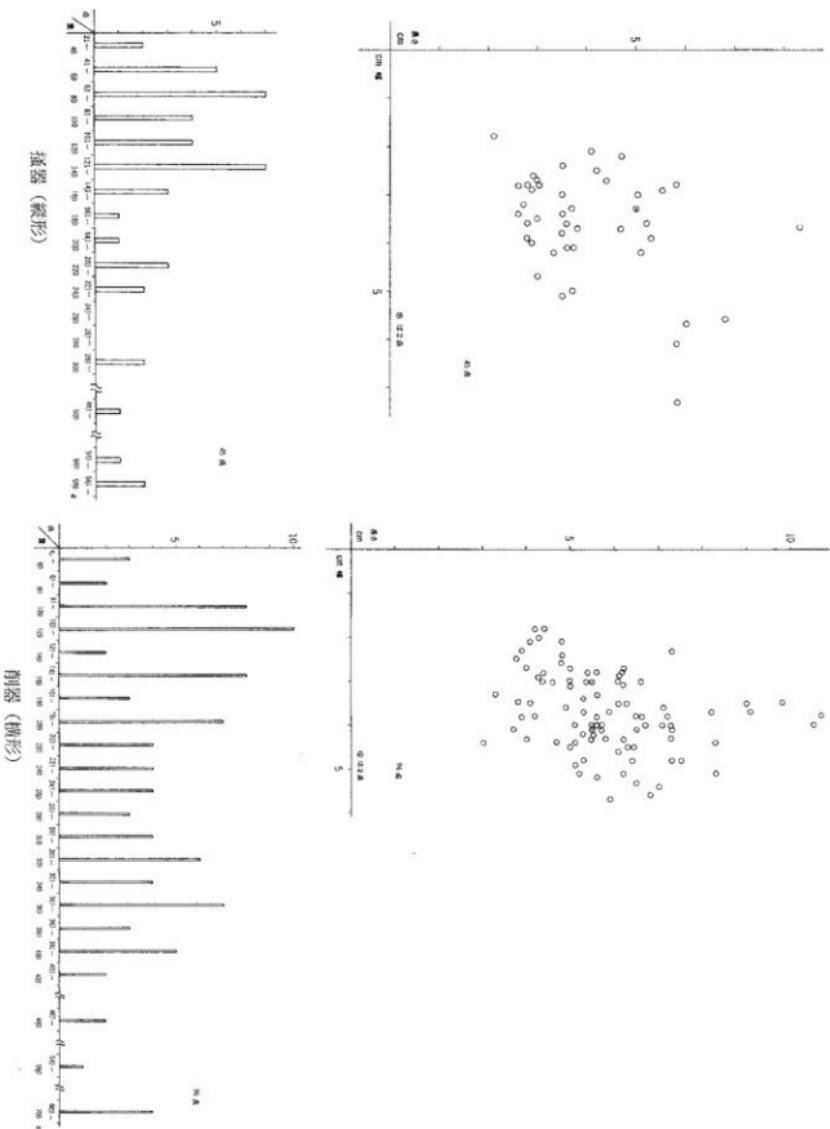


第58図 石錐の測定

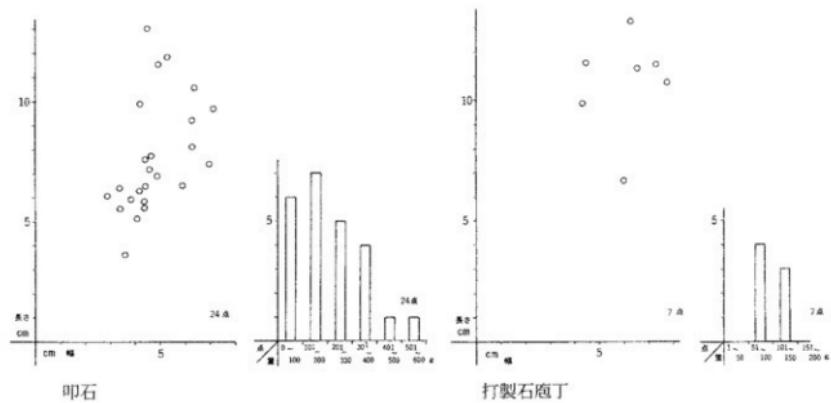


第59図 條形石器の測定

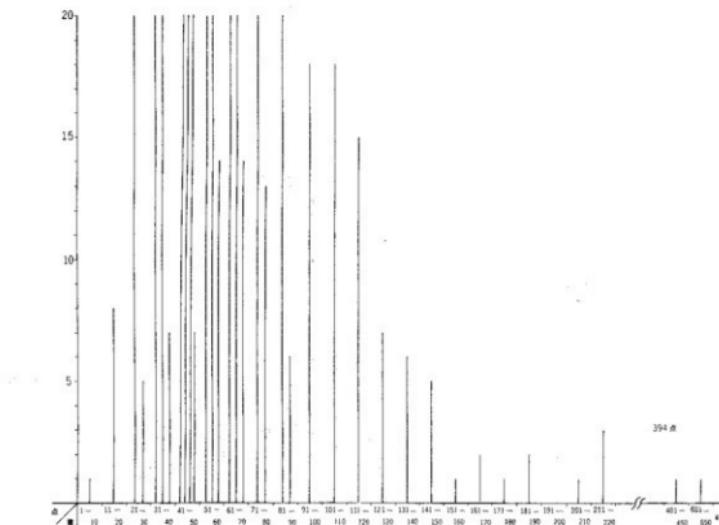
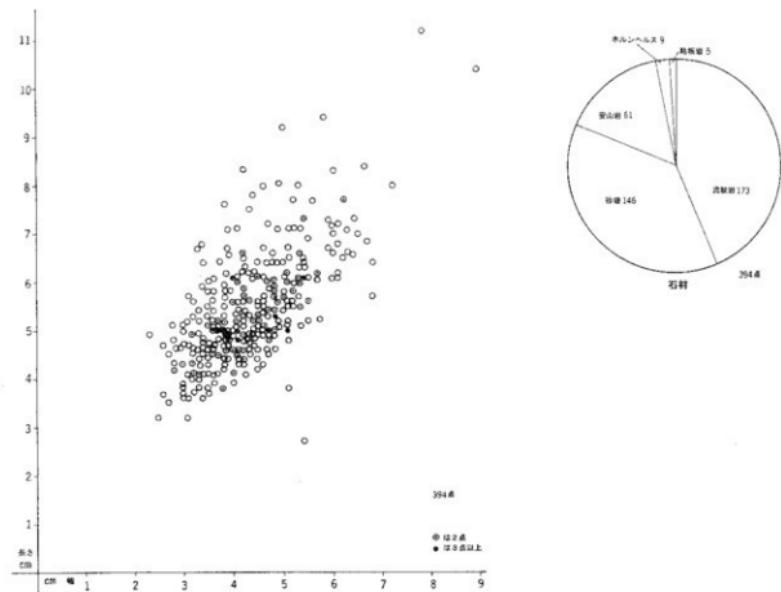
第60図 扱入搔器・円周削器の測定



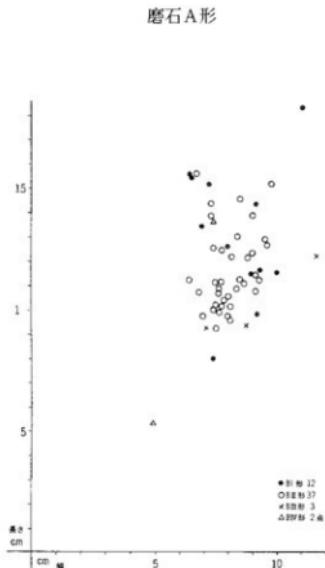
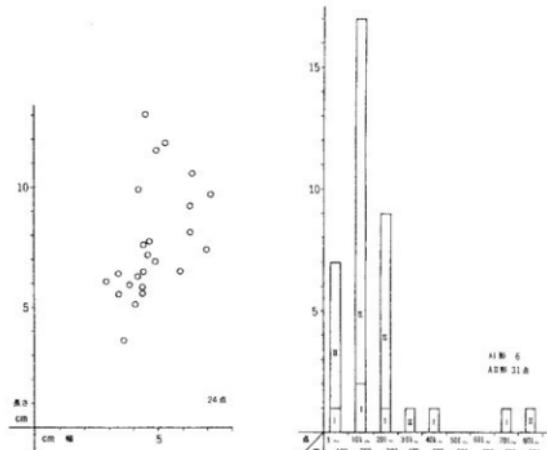
第61図 振器・削器の測定



第62図 叩石・打製石庖丁の測定

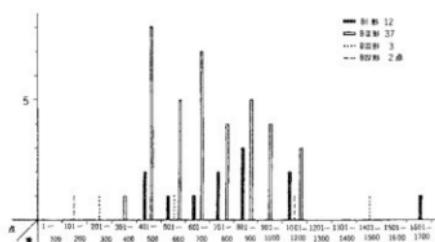


第64図 磚石錘の測定

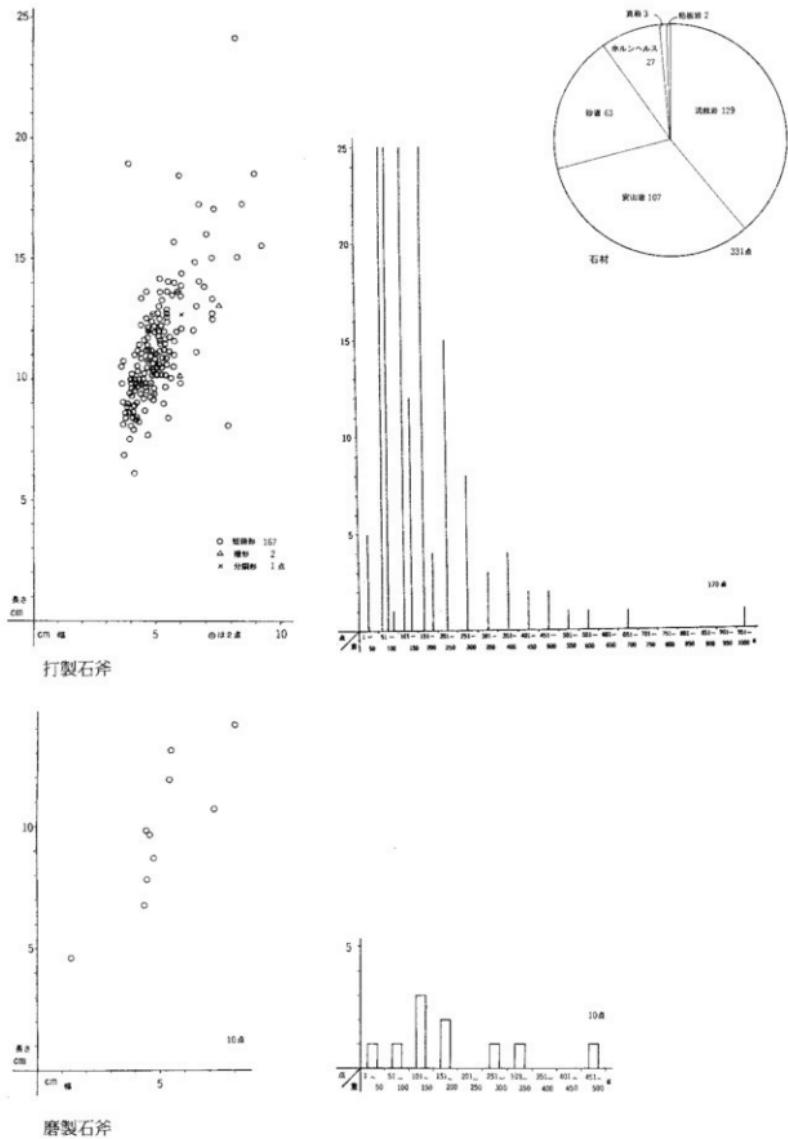


	形	砂岩	安山岩	流紋岩	計
A	I	3	3	6	6
	II	21		10	31
B	I	3	5	4	12
	II	4	31	2	37
	III	1	2		3
	IV	1		1	2
計		30	41	20	91

石材別統計



第65図 磨石の測定



第66図 打斧・磨斧の測定

### 3、自然遺物

自然遺物としては、クルミ・ガヤの炭化物の3点が発見されている。この他に、縄文前期の土器を含む層より、2点のパン状炭化物が発見されている。このパン状炭化物は、長径2cm前後のかたまりが幾つも練り合わせられ、パン状・センベイ状をなしている。その個々の粒には、薄い年輪状層が見られる。内面は漆黒色で、外表面は褐色土が付着している。なお、出土層は、縄文前期の遺物包含最下層と推定されている。したがって、同期の所産と推測される（飛驒下呂より）。現在、館に保存されている遺物は図版11では現状約12.0×8.5×2.0cm、そして他の破片1点は、約8.0×4.5×0.8cmを計る。長い年月の間での移動等で若干の破損もみられる。

なお、図版11での放射性炭素年代測定は、第3章に記述するように、約5,100年前との報告がなされ、いわゆる縄文前期後半における実年代、各地の基本的なデータと矛盾しない。そして図版11の写真は、町史すなわち「飛驒下呂」発刊当時のものと推測される。

## 第3章 炭化物のC14測定

### 1. 放射性炭素年代測定について

試料の放射性炭素年代測定を㈱地球科学研究所に依頼した。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄した後、石墨に調整し、加速器質量分析計（AMS）にて測定し、年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用し、同位体補正をして年代値を算出した。また、付記した年代誤差は計数値の標準誤差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料の<sup>14</sup>C計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の<sup>14</sup>C計数率の $\frac{{}^{14}\text{C}_{\text{(Sample)}}}{{}^{14}\text{C}_{\text{(Modern)}}} \geq 1$ の時は、Modernと表示し、 $\frac{{}^{14}\text{C}_{\text{(Sample)}}}{{}^{14}\text{C}_{\text{(Modern)}}}$ の%値を付記する。

暦年代の補正是、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代値（yrBP）に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730±30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にCALIB3.0 [Stuiver and Reimer, 1993; IBM-PC用:Reference (Stuiver & Pearson, 1993)]を使用した。なお、交点年代値は<sup>14</sup>C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、 $1\sigma$ 年代幅は<sup>14</sup>C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確立で $1\sigma$ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正是約一萬年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を\*\*またはModernと表示する。また、AD1,955\*はModernを意味する。

### 2. 放射性炭素年代測定結果

測定No	試 料	<sup>14</sup> C年代値	補正暦年代	
Beta-125568	パン状炭化物 (昭和45年発掘)	5,100 ± 80 yrBP (BC 3,150年)	交点年代値 BC 3,950、3,830年	$1\sigma$ 年代幅 BC 3,980 to 3,790

#### 引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended <sup>14</sup>C database and revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program.

以上  
山形 秀樹（パレオ・ラボ）

## 第4章 考 察

### 第1節 土 器

9,526点を数える一万点あまりの土器群は、前述のごとく大まかな分類を試みた。すなわち、かつて江牟氏が「飛驒下呂」でしめされたものを基とした。これは第2表に図示したが、近年、詳細な編年（第67～71図）<sup>註7</sup>が示されている。したがって現在での個々における編年の見解の差は否めないであろう。ただ、大まかにみて遺跡の本幹である前期末での内容が、関西・関東の両系がほぼ半々との状況がみられる。なお、第2表下部に示した無文・縄文地文・底部などのコーナーを含め、筆者の独断的な選出であるが、詳細な点は今後の検討が必要であろう。

### 第2節 石 器

約一万点ものぼる石器群は、本遺跡が下呂石産出地であると同時に、最も石器量の多い時期（縄文前期後半）にあたることに起因するものと推測される。その内容を詳細にみてゆくと、下呂石による石器製作の課程が浮び上がってくる。特に石匙について注目したい。

第72、73図で示したように、近年、縄文早・前・中期における農器具に関すると思われる石器類が、数多く研究され、それぞれにその使用法などが指摘されている。例えば石匙である。本遺跡において140点を数えているが、そのうち今回79点を図示、さらに未成品を加えることによって、剥片から成品への過程での作業手順をみることができる。

図示した縦形4点、横形75点を観察すると、①器全体が主剥離面側での加工が少ない。②摘部の加工が極めて入念である。以上の2点に注目して考えてみると、①は搔器的な要素が強く、②は部位での負担が多いと考える説で、その部分に紐掛けした手作業に使用した可能性が極めて強いと考えている。すなわち第74図に示した使用方法である。1. 横形、2. 縦形である。摘部を紐で結び、先に木製の根付を付ける。これを指間に挟み、3、4のように穂先を引っぱりながら折り切るわけである。数多くの実験の結果、3～5mm程の芯でも容易に切り取れることが判明した。

第72、73図は、縄文時代（10）に示された長崎元廣氏の資料である。縄文前期からの農耕論は、いわゆるほぼ市民権を得ている今日、否やはないであろう。ただ、第72図で示されたものは、実際に製作し作業してみると“否”である。例えば第72図石爪鍬7～9での場合、①石匙の固定方法（7、8）が分からぬ。②ルソン島例のような柄の必要性があるのか？などである。

石匙は從来の狩猟に伴う皮ハギ、スクレーバー的な用途と考えられた長い時代は終り、現在では農耕に伴う重要な器具、打製石包丁とともに、特に石匙が穂刈具として位置付けられつつある。

第73図に示した例は、最近の発表資料として注目されている。先学の研究はともかくとして、筆者は、過去20年にわたり後藤信幸による石器製作に注目してきた。つい2年前での下呂町大林遺跡についての考察でも述べたように、実際の製作者の心境が事実に近いものと思うのである。

さて、削器、いわゆるスクレーバーは、前述の石匙など広い意味での搔・削器として記述されるものの、実際どのように使用されたかは、種々の説がある。本遺跡での削器は、102点にものぼるが、器形や大きさなどさまざまである。今後の可能性としては、第74図5のごとき使用方法例を試案している。

礫石錘、前述のように多数の礫石錘は、重さが50～60gに集中する傾向をみせている。美濃平野の遺跡出土の20～30gに比べてみると2倍ほどの重量を示している。それは、川漁錘の錘を想定した場合、飛驒川上流での条件に対応すると理解できるものの、一部では他の利用方法も考えられよう。それは、かつて筆者が示したゴリ追い込みなどを含まれる。<sup>註8</sup>

さて、本遺跡のなかで、故大江牟氏が記述した『飛驒下呂の12頁』は第4次調査の事実である。当時

筆者と、故福本美知子氏が担当したトレンチであった。現在ガラス張りの保存住居、3号住居址の東側トレンチ内で、検出されている（図版2-5）。20数点がまとまって出土したとされる記述がこれであろう。

現在、疊石錘に記されたD番号がそれかと推測され、浅い土壤内との意味と理解している。さて、これらの疊石錘には、現実にD番号が記されているものも少なく、不明な点が多い。しかし、第39図の514でみられるような焼化による例や、タール付着例など、興味深い資料がみられる。これは、かつて筆者がたずさわった「関市塚原遺跡」の縄文中期における疊石錘出土例と極めて似ている。それは、図版2-5でみると、ほぼ盛り上がり<sup>立</sup>た低い山形で置かれ、あたかも網を置いたように推測される。塚原遺跡の例でも同様である。したがって、いずれも網は別として、連結したものが縦位に置かれたことは事実であろう。

さて、先に述べた関市の塚原遺跡出土の例では、煤付着の状況から「ちの輪」までが想定されているが、やはり浅い凹み内の検出例が気にかかる。

今回の出土状況は不明な点が多いものの、一部に煤付着が認められることから、両者の共通点を考えてゆきたい。

## あとがき

想えば30年以上前の発掘調査の報告書を担当するとは、つい最近まで思いもよらなかったものの、昭和44年度(第4次)に参加した調査員の一人である故に、感無量であります。

平成15年6月20日～11月23日までの約4ヶ月間、下呂町夏焼の上原小学校官舎から女房ともども峰一合の事務所へ通い、30数年前のほこりをはらいながら整理を行なった。そのうちには、後藤信幸氏の強い援助があったことを記しておきたい。

「去るものは追わず、来るものは拒まず」と大江弁先生はいつも言っておられました。あの当時、そんな考古学者はいませんでしたよ。今は当時の状況を知る人も少なくなりましたが、それは考古学者であると同時に、由緒ある福應寺住職としての宗教家の信念であったと思います。若い頃、関のヤンチャ坊と言われた筆者は、先生のおかげで現在があると思っています。諸般の事情によって、大変遅くなってしまった事実は事実として……。

最後に、この報告書が筆者等の手によって成されたことを喜んで頂けることを信じ、大江弁先生のご冥福をお祈り致します。合掌

(吉田英敏)

註1 ガラス質湯ヶ峰流紋岩と命名されている。

註2 1979 岐阜県考古学会「岐阜県考古7」鈴木、片田

註3 2002 下呂町教育委員会「大林遺跡試掘調査報告書」吉田英敏

註4 2002 岐阜県文化財保護センター「上ヶ平遺跡発掘調査報告書」八賀、上出

註5 1985 下呂町教育委員会「下島遺跡発掘調査報告書」高井良夫

註6 1990 下呂町教育委員会「飛騨下呂・通史、民俗」大江弁他

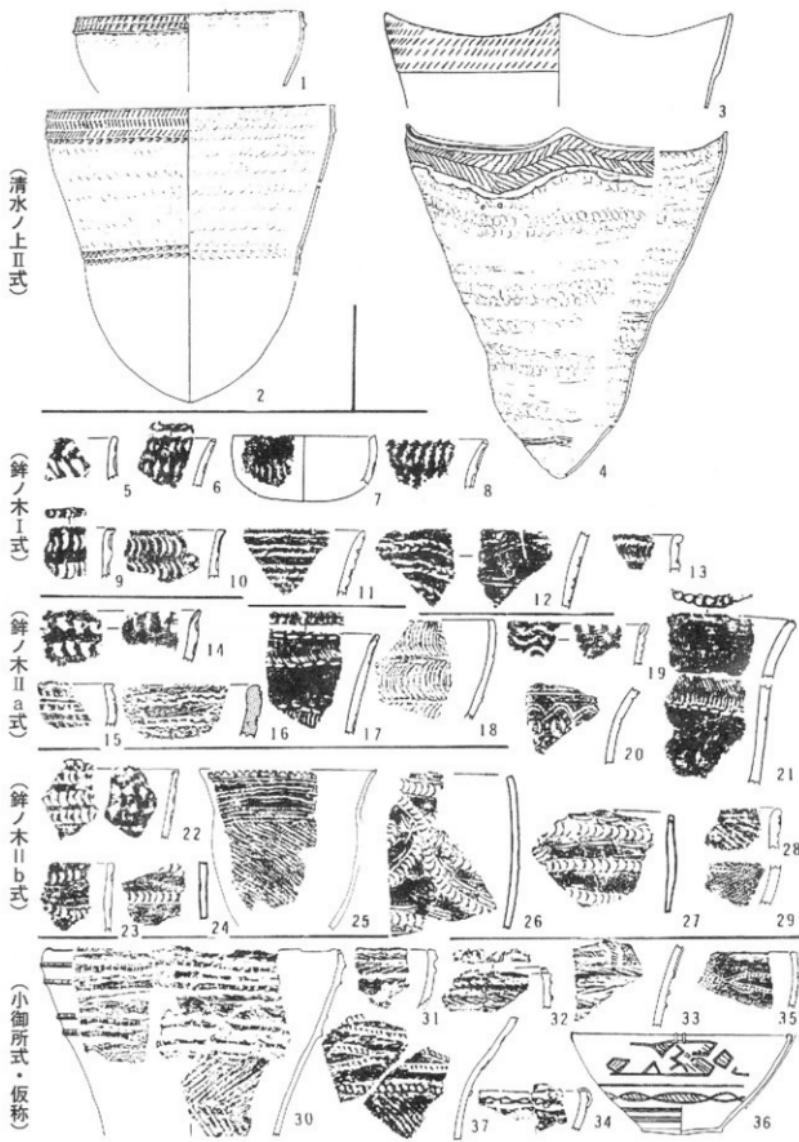
註7 1999 縄文時代文化研究会「縄文時代10」

註8 1984 岐阜県考古学会「岐阜県考古9」吉田、後藤

註9 1989 関市教育委員会「塚原遺跡・塚原古墳群」篠原、吉田

### 縄文土器全国編年表（中部日本）

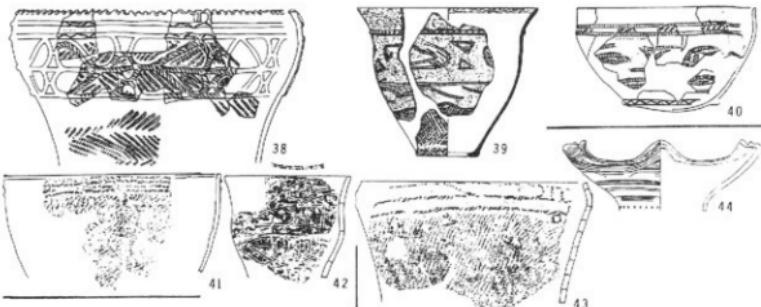
第4表 編年表（縄文土器全国編年表・縄文時代文化研究会 1999・12）より



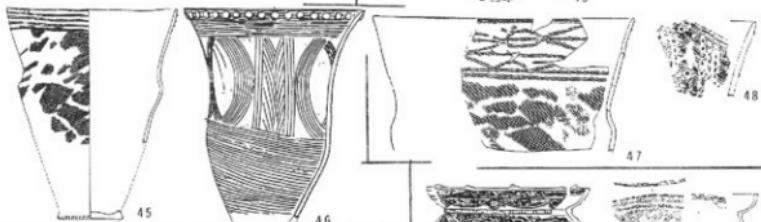
東海地方の縄文前期土器(1)

第67図 参考資料(前期1) 縄文時代(10)より

(清水ノ上Ⅲ式)  
(大麦田Ⅰ式)



(大麦田Ⅲa式)



(終末一期)



(終末Ⅲ期)

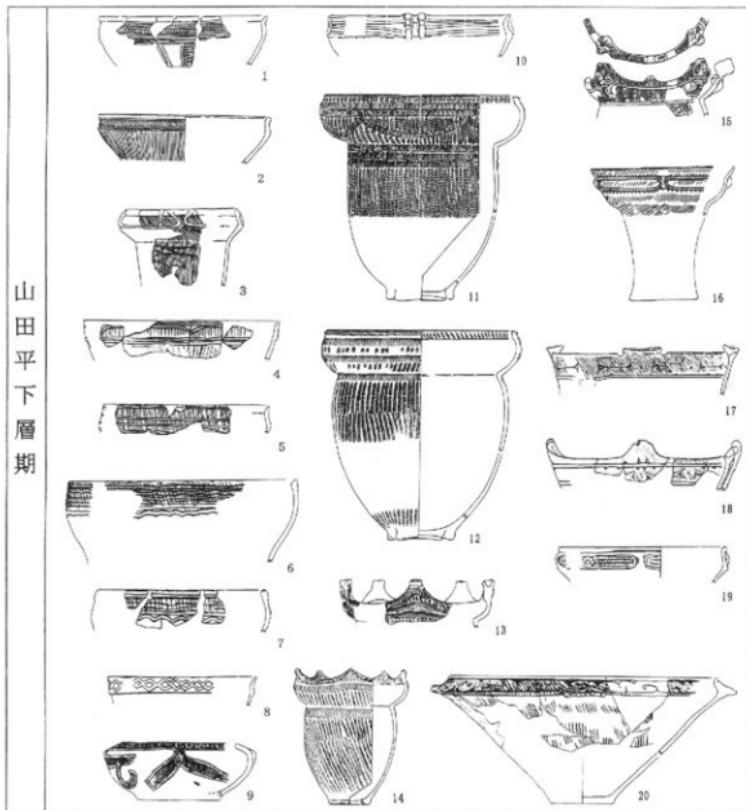


東海地方の縄文前期土器(2)

1,2,38,40 (清水ノ上／山下・巖部・杉崎 1996、山下勝年 1997b) 3,4 (上広範) 5～23,25,28～37,59  
(小御所) 41～43 (阿曾田／渡辺誠 1985) 44 (花無山／西部 1982) 45,47,48 (芦戸／高木 1989)  
46 (峰一合／紅村はか 1977) 50 (久武瀬) 51 (落合五郎／渡辺誠 1988) 52～55 (御望／内堀 1995)  
56～58 (九合／澄田・大參 1956) 59～61 (上方場／池本 1992)

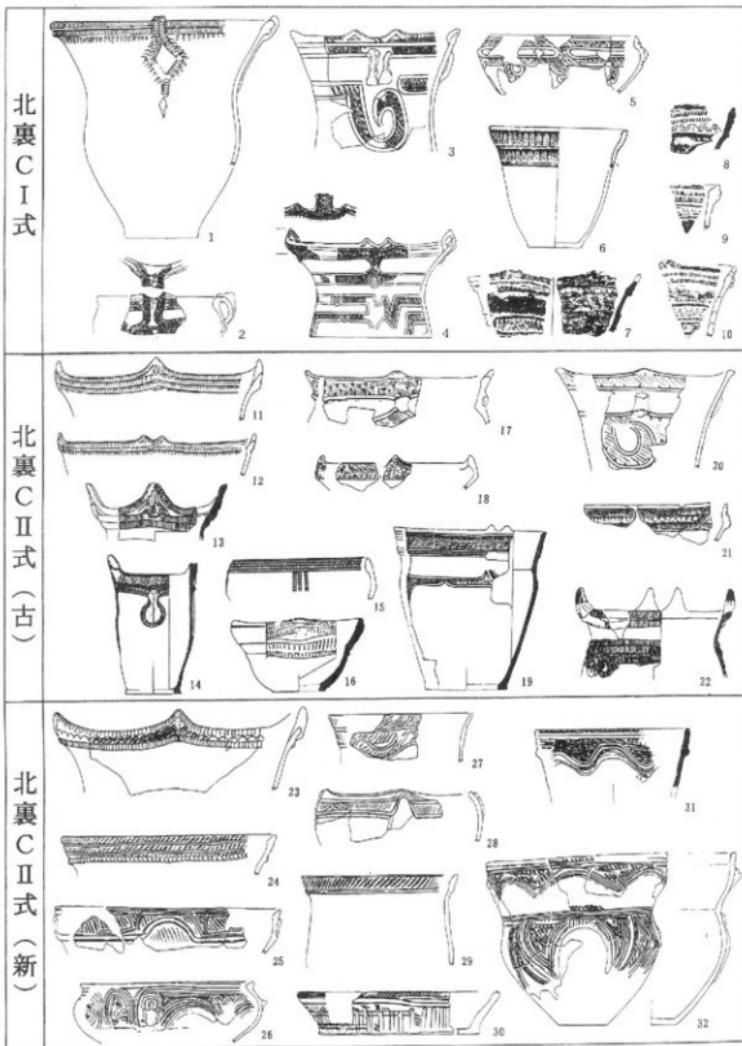
第68図 参考資料(前期2) 縄文時代(10) より

山田平下層期



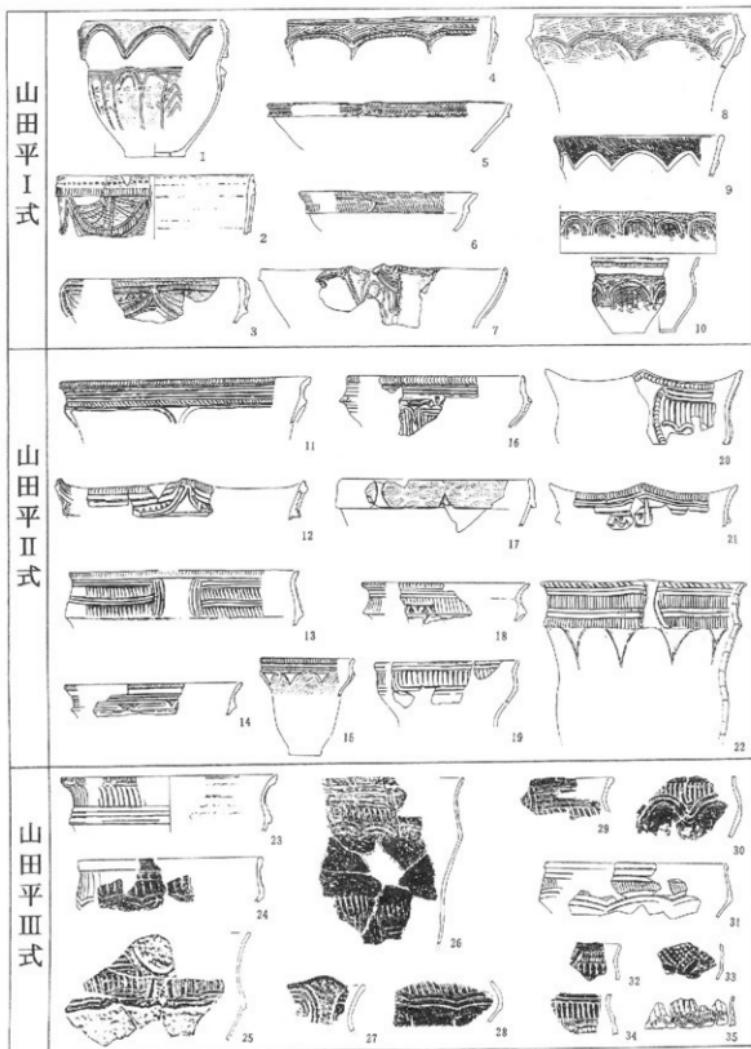
山田平下層期の土器 1~20 山田平

第69図 参考資料（中期1）初頭期 繩文時代（10）より



北裏C期の土器 1・3・5・9・11・12・15・17・18・20・21・23～20 山田平、2・4 五領ヶ台、6・8 南森、  
7 乙福谷、10 多摩ニュータウンNo471、13・22 頭殿沢、14・15・19 北裏、  
31 船塙社11号住、32 梨久保96号住

第70図 参考資料（中期2）前半期 縄文時代（10）より



山田平期の土器

1~9・11~17・23~24・35 山田平、10 神谷原、18~19・31 南風ヶ崎、  
25 日駄田、20~21 清水ノ上、22 南原2号住、26~28 潤良川、  
29~30 上山地25号住、32~33 公藏面、34~35 筑摩田

第71図 参考資料（中期3）前半期 繩文時代（10）より

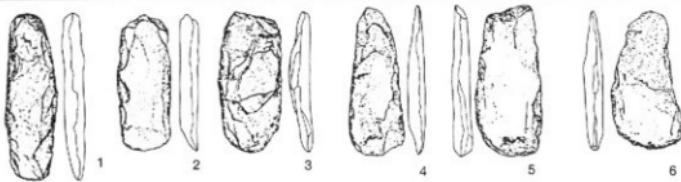


縄文早・前期の農具としての石爪鎌（横型石匙）と石弯曲鎌（縦型石匙）およびその操作法  
（五味 1980）より編成

1 石川赤浦、2・3 福井鳥浜（前期）、4 新潟泉竜寺（前期）、5・6 岐阜村山（前期）、7 ルソン島ティンギアン族のラコム（爪鎌）、8 は7に基づき竹製柄へ装着復元した石爪鎌、9 石爪鎌の操作法の復元、10・11 北海道函館空港第4地点（前期）、12・13 青森熊沢（前期）、14・15 南アジア・バター族の刃茎差込み式の鎌、16 ヨーロッパにおけるコムギの収穫

第72図 参考資料（石匙） 縄文時代（10）より

耕作具（石鉋）の機能と形態移行



フルハシ形に定形化

土工工具

→ 深耕

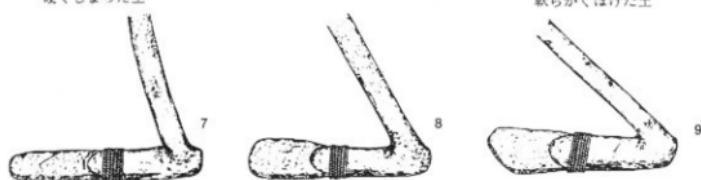
硬くしまった土

標準形

靴形に分化

中耕除草具

軟らかくほけた土



中耕除草具（有茎石器）

収穫具

有茎半月形

有茎三角形

有茎広刃形

打製石丁



10



13



16



19



11



14



17



20



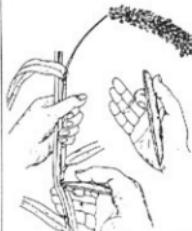
12



15



18



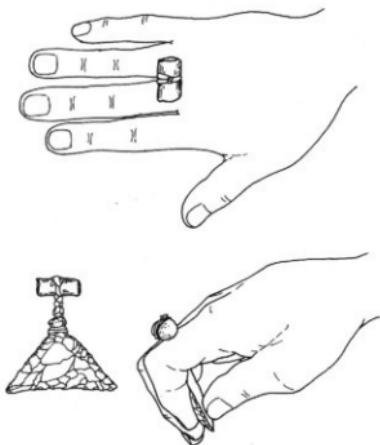
21

水平押切法による穀刈

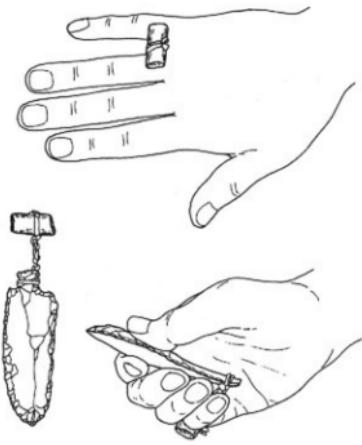
縄文中期の農具としての打製石器群とその使用法（曾利遺跡）

（武藤・小林 1978）より編成

第73図 参考資料（打製石斧など） 縄文時代（10）より



1 橫形の使用法（A）



2 縦形の使用法（A）



3 同上（B）



4 同上（B）



5 木製柄の削器を装着・復元した鎌

第74図 石匙の使用法試案

第5表 遺物觀察表 土器(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
1	6	3	胴	逆楕円	大鼻	ミ5-11	
2	6	3	胴	逆楕円	大鼻		
3	6	3	胴	逆楕円	大鼻	ミ5-10, 9-59	
4	6	3	胴	山形	桶沢	ミ4-11	
5	6	3	胴	山形・平行線	桶沢	ミ5-9, 9-11	
6	6	3	胴	楕円	細久保	ミ4-7, 3-23	
7	6	3	胴	格子目	細久保		
8	6	3	胴	格子目	細久保	ミ4, 3-77	
9	6	3	胴	格子目	細久保	ミ5-1	
10	6	3	胴	格子目	細久保	ミ5-10	
11	6	3	胴	沈線	高山寺	ミ1-172	織維
12	6	3	口縁	沈線	木鳥	ミ2-1357	
13	6	3	口縁	貝殻刺突	羽島下層	ミ5-9, 9-21	裏 貝殻条痕
14	6	3	胴	貝殻刺突	羽島下層	ミ4-5, D-21	裏 貝殻条痕
15	6	3	口縁	貝殻刺突	羽島下層	ミ5-11	裏 貝殻条痕
16	6	3	胴	貝殻条痕	羽島下層	ミ4-28, 2-3	裏 貝殻条痕
17	6	3	胴	貝殻条痕・爪形	北白川下層I		裏 貝殻条痕
18	6	3	胴	貝殻条痕・爪形	北白川下層I	ミ5-4, 3-3	裏 貝殻条痕
19	6	3	口縁	貝殻刺突	羽島下層II	ミ5-10	
20	6	3	胴	貝殻刺突	羽島下層II	ミ2-629	
21	6	3	口縁	貝殻刺突	羽島下層II	ミ4	
22	6	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ4-595	
23	6	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ2-622	
24	6	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ4-3	
25	6	3	胴	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ5	
26	6	3	胴	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ4-3	
27	6	3	胴	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ2-497	
28	6	3	胴	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ4-240	
29	6	3	胴	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ2-626	
30	7	3	口縁	爪形・沈線	北白川下層II	ミ4-28, 2-60	
31	7	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ2-606	
32	7	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ4-3	
33	7	3	口縁	爪形・羽状繩文	北白川下層II	ミ2-492	
34	7	3	口縁	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ4-576	
35	7	3	胴	爪形・斜繩文	北白川下層II	ミ2-942	
36	7	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ4-3	
37	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ4-3	
38	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ5-10, 9-67	
39	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ6-10, 9-67	
40	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ5-10, 9-82	
41	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ4	穿孔

第6表 遺物観察表 土器(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
42	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ4-5	穿孔
43	7	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ2	
44	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ2-1239	
45	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ1-127	
46	7	3	胴	爪形・斜縄文	北白川下層II	ミ5-70, 9-56	
47	7	3	胴	爪形・沈線	北白川下層II	ミ2-1157	
48	7	3	胴	爪形・沈線	北白川下層II		
49	7	3	胴	爪形	北白川下層II	ミ3-197	
50	7	3	口縁	爪形	北白川下層II	ミ4-28, 2-60	
51	7	3	胴	平行沈線	北白川下層II		
52	7	3	底	爪形・平行沈線	北白川下層II		
53	7	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-716	
54	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2-1049	
55	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2-962	
56	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ5-8, 8-22	
57	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-704	
58	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2	
59	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-710	
60	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ5	
61	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ4-579	
62	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II		
63	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-1043	
64	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2-711	
65	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2-1204	
66	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II		
67	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II		
68	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2	
69	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2-900	
70	8	3	口縁	平行沈線	北白川下層II	ミ2-700	
71	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-909	
72	8	3	口縁	貼付	北白川下層II	ミ4-3	
73	8	3	口縁	貼付	北白川下層II	ミ4	
74	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II		
75	8	3	胴	平行沈線・隆線	北白川下層II	ミ2-1000	
76	8	3	胴	平行沈線・隆線	北白川下層II	ミ2-706	
77	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2	
78	8	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-708	
79	9	3	胴	平行沈線	北白川下層II		
80	9	3	胴	平行沈線	北白川下層II	ミ2-715	
81	9	3	胴	平行沈線	北白川下層II		
82	9	3	胴	平行沈線・隆線	北白川下層II	ミ5	

第7表 遺物観察表 土器(3)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
83	9	3	口縁	隆線・刻み	北白川下層II	ミ4-8	
84	9	3	口縁	隆線・刻み	北白川下層II	ミ4-3	
85	9	3	胴	隆線・刻み	北白川下層II	ミ4	
86	9	3	口縁	隆線・刻み	北白川下層II	ミ4-3	
87	9	3	口縁	平行沈線・刻み	北白川下層II	ミ4-3	
88	9	3	口縁	隆線・斜繩文	北白川下層III	ミ4-3	
89	9	3	口縁	隆線・斜繩文	北白川下層III		
90	9	3	口縁	隆線・押圧	北白川下層III	ミ2-483	
91	9	3	口縁	隆線・押圧	北白川下層III	ミ2-616	
92	9	3	口縁	隆線・押圧	北白川下層III		
93	9	3	口縁	隆線・押圧・斜繩文	北白川下層III	ミ2-487	
94	9	3	口縁	隆線・押圧・斜繩文	北白川下層III	ミ2-780-1	
95	9	3	口縁	隆線・押圧	北白川下層III	ミ4-61	
96	9	3	口縁	隆線・押圧	北白川下層III	ミ4	
97	9	3	口縁	隆線・羽状繩文	北白川下層III	ミ2	
98	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-1891	
99	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-1900	
100	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III		
101	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-1897	
102	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ5	
103	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-681	
104	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ5	
105	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ5-4, 3-20	
106	10	4	口縁	隆線・押圧羽状繩文	北白川下層III	ミ4-594	
107	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ4-20	
108	10	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-673	
109	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ5-5, 3-17	
110	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-1557	
111	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ5	
112	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-1894	
113	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III	ミ2-1896	
114	11	4	口縁	隆線・押圧羽状繩文	北白川下層III	ミ5-4, 3-11	
115	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III		
116	11	4	口縁	隆線・押圧斜繩文	北白川下層III		
117	12	4	胴	隆線・押圧羽状繩文	北白川下層III	ミ4	
118	12	4	胴	隆線・押圧羽状繩文	北白川下層III	ミ4	
119	12	4	口縁	羽状繩文	北白川下層III	ミ2-1391	
120	12	4	口縁	羽状繩文	北白川下層III	ミ6	
121	12	4	口縁	羽状繩文	北白川下層III	ミ2-1898	
122	12	4	口縁	斜繩文	北白川下層III	ミ2	
123	13	4	口縁	羽状繩文	北白川下層III	ミ2-1602	

第8表 遺物観察表 土器(4)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
124	13	4	口縁	羽状繩文	北白川下層Ⅲ	ミ4	
125	13	4	口縁	斜繩文	北白川下層Ⅲ		
126	13	4	口縁	斜繩文	北白川下層Ⅲ		
127	13	4	口縁	羽状繩文	北白川下層Ⅲ	ミ2	
128	13	4	口縁	羽状繩文	北白川下層Ⅲ		
129	13	4	口縁	羽状繩文	北白川下層Ⅲ	ミ4-3	
130	13	4	口縁	斜繩文	北白川下層Ⅲ	ミ2	
131	13	4	口縁	羽状繩文	北白川下層Ⅲ	ミ2-1656	
132	14	5	口縁	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ4-3	裏、斜繩文
133	14	5	口縁	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ5-9、10-33	裏、斜繩文
134	14	5	口縁	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ4-24	裏、斜繩文
135	14	5	口縁	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ4	裏、斜繩文
136	14	5	口縁	隆線刺突・斜繩文	大歳山		裏、斜繩文
137	14	5	胴	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ5-10	
138	14	5	胴	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ5-10	
139	14	5	胴	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ4-669	
140	14	5	胴	隆線刺突・斜繩文	大歳山	ミ6-10	
141	14		胴	隆線刺突・斜繩文	大歳山		
142	15		底部	沈線	北白川下層		
143	15		底部		北白川下層	ミ4	
144	15		底部		北白川下層	ミ2-529-526	
145	15		底部		北白川下層		
146	15		底部		北白川下層		
147	15		底部		北白川下層	ミ2-517	
148	15		底部		北白川下層	ミ4-2	
149	15		底部		北白川下層	ミ2-527	
150	15		底部		北白川下層	ミ4-337	
151	15		底部	隆線刻み	北白川下層	ミ2-1018	
152	15	5	底部	平行沈線	北白川下層	ミ5	
153	15	5	底部	刻み	北白川下層	ミ2-953	
154	15	5	底部		北白川下層	ミ4	
155	15	5	底部		北白川下層	ミ5-12	
156	15	5	底部		諸磯 b ?	ミ2-522	
157	15	5	底部	刺突	諸磯 b		
158	15	5	底部	刺突	諸磯 b		
159	15	5	底部	平行沈線	諸磯 b	ミ4-101	
160	16	5	口縁		諸磯 b		穿孔
161	16	5	口縁		諸磯 b	ミ5-5-3	穿孔
162	16	5	口縁		諸磯 b		穿孔
163	16	5	口縁	平行沈線・刺突	諸磯 b		穿孔
164	16	5	口縁		諸磯 b		穿孔

第9表 遺物觀察表 土器(5)

遺物番号	捕図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
165	16	5	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b		
166	16	5	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ2-822	
167	16	5	胴	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b	ミ2-834	
168	16	5	胴	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b	ミ5	
169	16	5	胴	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b	ミ2-814	
170	16	5	胴	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b		
171	16	5	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b		穿孔
172	17	5	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ4-563	
173	17	5	胴	平行沈線	諸磯 b		
174	17	5	胴	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b	ミ5	
175	17	5	胴	平行沈線・刻み	諸磯 b	ミ2-683	
176	17	5	口縁	爪形	諸磯 b	ミ2-610	
177	17	5	口縁	平行沈線・爪形	諸磯 b	ミ5-10, 9-90	
178	17	5	口縁	隆線・刻み	諸磯 b	ミ2-1022	
179	17	5	口縁	隆線・刻み	諸磯 b		
180	17	5	口縁	平行沈線	諸磯 b	ミ2	
181	17	5	口縁	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ4-9	
182	17	5	口縁	刻み・斜縄文	諸磯 b	ミ4	
183	17	5	口縁	平行沈線	諸磯 b		
184	17	5	口縁	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ2-834	
185	17	5	口縁	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b	ミ2-820	
186	17	5	口縁	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ4-7	
187	18	7	口縁	平行沈線・斜縄文	諸磯 b	ミ2-308	
188	18	7	口縁	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ5-5, 2-2	
189	18	7	口縁	羽状縄文	諸磯 b	ミ2-607	
190	18	7	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b		
191	18	7	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b		
192	18	7	胴	平行沈線	諸磯 b	ミ2-813	
193	18	7	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ2-1878	
194	18	7	胴	平行沈線・刺突・縦文	諸磯 b	ミ4-397	
195	18	7	胴	平行沈線・刺突	諸磯 b	ミ2	
196	18	7	胴	平行沈線・刺突・刻み	諸磯 b	ミ4-3	
197	18	7	胴	平行沈線・斜縄文	諸磯 b		
198	18	7	胴	平行沈線・斜縄文	諸磯 b	1-9-3	
199	18	7	胴	平行沈線・斜縄文	諸磯 b	ミ2-602	
200	18	7	胴	平行沈線	諸磯 c	ミ1-213	
201	18	7	胴	平行沈線	諸磯 c	ミ2-736	
202	18	7	口縁	平行沈線・貼付	諸磯 c		
203	19	7	胴	平行沈線	諸磯 c	ミ5-9, 10-3	
204	19	7	口縁	平行沈線	諸磯 c		
205	19	7	胴	平行沈線・羽状縄文	諸磯 c	ミ4-24 ミ5-10	

第10表 遺物観察表 土器（6）

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
206	19	7	胴	沈線	諸磯 c	ミ2-482	
207	19	7	胴	平行沈線	諸磯 c	ミ-4-3	
208	19	7	胴	平行沈線	諸磯 c		
209	19	7	胴	平行沈線	諸磯 c	ミ4-102	
210	19	7	胴	平行沈線	諸磯 c	ミ4-136	
211	19	7	胴	平行沈線	諸磯 c		
212	19	7	胴	沈線	諸磯 c	ミ4-564	
213	20	7	胴	沈線	諸磯 c	ミ4-4	
214	20	7	口縁	沈線・貼付	諸磯 c	ミ2-601	
215	20	7	口縁	沈線・貼付	諸磯 c		
216	20	7	口縁	沈線	諸磯 c	ミ2-581	
217	20	7	口縁	沈線	諸磯 c	ミ4	
218	20	7	胴	沈線	諸磯 c		
219	20	7	胴	沈線	諸磯 c		
220	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ5-10	
221	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ5-10	
222	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ5-10	
223	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤		
224	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ4-227	
225	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤		
226	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ4-115	
227	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ2-1623	
228	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ4-10	
229	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ2-1788	
230	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミネイチゴ 14	
231	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ4-137	
232	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ2-565	
233	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ4-116	
234	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ2-5767	
235	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ2-952	
236	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤		
237	20	7	胴	貼付・押引	十三善堤	ミ4	
238	20	7	口縁	貼付・押引	十三善堤	ミ4-224	
239	20	7	口縁	平行沈線	平出3 A	ミ2-25	
240	21	6	口縁	沈線・貼付	諸磯 c		
241	21	6	口縁	繩文	北白川下層III		
242	21	6	口縁	繩文	北白川下層III		
243	21	6	口縁		諸磯 b		
244	21	6	口縁	繩文	北白川下層III		
245	21	6	口縁	繩文	北白川下層III		
246	21	6	口縁	繩文	北白川下層III		

第11表 遺物觀察表 土器 (7)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	地文	推定型式	記入番号	備考
247	22	6	口縁	繩文	十三菩提		
248	22	7	口縁	爪形	船元 I A	ミ4-333	
249	22	7	口縁	繩文	船元 II	ミ4-1	
250	22	7	口縁	沈線	船元 III	ミネイチゴ 14	
251	22	7	胴	沈線	船元 III	ミ1-220	
252	22	7	口縁	繩文	船元 II	ミ5-2	
253	22	7	口縁	繩文	船元 III	ミ3-8	
254	22	7	口縁	刺突	船元 III		
255	22	7	胴	繩文	船元 III	ミ2-567	
256	22	7	胴	隆線	船元 III	ミ6-1-26	
257	22	7	口縁	爪形	北浦 C II		
258	22	7	口縁	爪形	?	ミ2-983	
259	22	7	口縁	隆線	?		
260	22	7	胴	沈線	山田平		
261	22	7	胴	沈線	平出 3 A	ミ4-103	
262	22	7	口縁	沈線	?	ミネイチゴ 14	
263	22	7	口縁	沈線	山田平	ミ2-781	
264	22	7	胴	繩文	鷹島	ミ5-7	
265	22	7	胴	繩文	鷹島	ミ5-10	
266	23	8	口縁	爪形	北浦 C II		
267	23	8	口縁	沈線	新崎	ミ1-235, 229	
268	23	8	口縁	沈線	新崎	ミ5-10	
269	23	8	口縁	沈線	新崎	ミ2-1707, ミ5	
270	23	8	口縁	沈線	新崎	ミ4-113	
271	23	8	胴	沈線	新崎	ミ2-950	
272	23	8	口縁	爪形	藤内	ミ5	
273	23	8	口縁	爪形	藤内	ミ5	
274	23	8	口縁	沈線	新崎	ミ2-643	
275	23	8	口縁	沈線	梨久保		
276	23	8	胴	沈線	勝坂		
277	23	8	胴	爪形	勝坂	ミ4-11	
278	23	8	口縁	爪形	藤内	ミ4-2	
279	23	8	胴	爪形	藤内	ミ4-112	
280	23	8	胴	爪形	藤内	ミ4-109	
281	23	8	胴	繩文	勝坂	ミ2-618	
282	23	8	胴	爪形	藤内	第3トレンチ	
283	23	8	胴	繩文	勝坂	ミ4-207	
284	23	8	口縁	爪形	勝坂	ミ4-202	
285	24	8	口縁	爪形	藤内	ミ4	
286	24	8	口縁	爪形	藤内	ミ4-105	
287	24	8	胴	爪形	藤内	ミ4-133	



第13表 遺物観察表 石器 (1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)				石材	記入番号	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
311	28	9	石 鋸	木葉		3.9	1.2	0.6	2.4	下呂石	ミ4	
312	28	9	石 鋸	木葉		3.2	2.0	0.6	3.7	下呂石	ミ5	
313	28	9	石 鋸	三角		2.0	1.9	0.3	0.9	下呂石	ミ2	
314	28	9	石 鋸	三角		2.4	2.0	0.3	1.1	下呂石	ミ5-11, 9-104	
315	28	9	石 鋸	三角		2.9	2.3	0.7	3.6	下呂石	ミ2-307	
316	28	9	石 鋸	三角		1.6	1.1	0.2	0.4	下呂石	ミ5	
317	28	9	石 鋸	三角		3.6	2.7	0.5	4.4	下呂石	ミ4-7	
318	28	9	石 鋸	三角		2.4	1.8	0.5	2.1	チャート	ミ2-12	
319	28	9	石 鋸	三角		2.0	2.2	0.6	2.2	下呂石	ミ5	
320	28	9	石 鋸	三角		2.0	1.5	0.3	1.0	下呂石	ミ2-312	尖造り出し
321	28	9	石 鋸	開脚		1.5	1.3	0.2	0.2	黒耀石		
322	28	9	石 鋸	開脚		1.5	1.4	0.3	0.4	下呂石	ミ2-116	
323	28	9	石 鋸	開脚		2.4	2.1	0.5	2.4	下呂石	ミ2-353	
324	28	9	石 鋸	開脚		2.5	1.9	0.5	1.4	下呂石	ミ5-11	
325	28	9	石 鋸	開脚	一部欠	2.0	(1.4)	0.3	0.7	下呂石	ミ2-104	
326	28	9	石 鋸	開脚		1.8	1.1	0.2	0.4	下呂石	ミ5-4, 3-8	
327	28	9	石 鋸	開脚		1.9	1.3	0.3	0.5	下呂石	ミ2-393	両肩張る
328	28	9	石 鋸	開脚		2.9	2.5	0.3	1.5	チャート	ミ4-27, 3-37	
329	28	9	石 鋸	開脚		2.4	2.2	0.3	0.9	下呂石	ミ5-11, 10-44	
330	28	9	石 鋸	開脚		2.7	2.0	0.4	1.0	下呂石	ミ1-4	
331	28	9	石 鋸	開脚	一部欠	2.7	(1.4)	0.4	0.9	下呂石	ミ2-121	
332	28	9	石 鋸	開脚		2.3	1.5	0.2	0.6	下呂石	ミ2-289	尖造り出し
333	28	9	石 鋸	開脚		2.1	1.2	0.3	0.4	下呂石	ミ5-20, 10-44	両肩張る
334	28	9	石 鋸	開脚		2.4	1.7	0.3	0.7	下呂石	ミ2-348	
335	28	9	石 鋸	開脚		1.3	1.6	0.2	0.3	チャート	ミ5-7, 9-64	尖造り出し
336	28	9	石 鋸	開脚		1.2	0.8	0.2	0.1	下呂石	ミ2-154	
337	28	9	石 鋸	開脚		1.3	1.8	0.2	0.2	頁石	ミ5-11, 10-3	
338	28	9	石 鋸	開脚		2.3	1.5	0.3	0.6	下呂石	ミ2-100	鋸形
339	29	9	石鋸未成品			3.6	3.3	0.6	7.8	下呂石	ミ5	
340	29	9	石鋸未成品			2.6	2.3	0.5	2.2	下呂石	ミ5	
341	29	9	石鋸未成品			3.1	1.9	0.5	2.3	下呂石	ミ2-63	
342	29	9	石鋸未成品			3.3	2.2	0.7	5.1	チャート	ミ5	
343	29	9	石鋸未成品			5.2	1.7	0.5	4.4	下呂石	ミ2-38	
344	29	9	石鋸未成品			3.4	3.0	0.8	8.2	下呂石		
345	29	9	石鋸未成品			3.5	2.3	0.5	4.0	下呂石	ミ2-1	
346	29	9	石鋸未成品			2.4	1.7	0.5	1.8	黒耀石	ミ2-62	
347	30	9	石 锤	揉錐		3.9	0.9	0.3	1.2	チャート	ミ2-2	両
348	30	9	石 锤	揉錐		3.6	0.6	0.5	1.2	チャート	ミ-5	両
349	30	9	石 锤	揉錐		3.8	0.9	0.4	1.2	下呂石	ミ1-9	両・磨滅
350	30	9	石 锤	揉錐	一部欠	(4.1)	0.9	0.4	1.3	下呂石	ミ2-4	両・ツブレ
351	30	9	石 锤	揉錐		2.7	1.0	0.6	1.5	下呂石	ミ5-94	両

第14表 遺物観察表 石器（2）

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)				石材	記入番号	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
352	30	9	石 錐	揉錐		3.1	1.0	0.6	1.3	チャート	ミ1	両
353	30	9	石 錐	揉錐		2.2	0.5	0.3	0.4	下呂石	ミ4	両・磨滅
354	30	9	石 錐	揉錐		3.5	0.9	0.5	1.8	チャート	ミ2-9	両
355	30	9	石 錐	手回し		3.6	2.0	1.1	4.0	チャート	ミ5	両
356	30	9	石 錐	手回し		3.4	2.3	0.5	2.2	下呂石	ミ2-4-2	両
357	30	9	石 錐	手回し		2.8	1.5	0.3	0.5	下呂石	ミ2-4-53	両
358	30	9	石 錐	手回し		3.3	2.3	0.4	2.3	下呂石	ミ4	両
359	30	9	石 錐	手回し		4.2	3.2	0.6	5.4	チャート	ミ5-4-3-15	両・石匙の再生
360	30	9	石 錐	手回し		4.6	4.5	0.8	11.8	下呂石	ミ2-8	両
361	30	9	石 錐	手回し		4.4	4.0	1.0	12.9	下呂石	ミ4	両
362	30	9	石 錐	手回し		5.7	2.3	0.9	8.8	下呂石	ミ4-6	磨滅・両
363	30	9	石 錐	手回し		6.5	2.2	1.3	14.5	下呂石	ミ2-12	磨滅・片?
364	30	9	石 錐	手回し		5.1	3.2	1.0	10.7	下呂石		両
365	30	9	石 錐	手回し		4.8	4.0	1.0	17.7	下呂石	ミ5-91	両
366	30	9	楔形石器	横		3.3	6.0	0.9	21.8	下呂石	ミ5-8, 9-36	
367	30	9	楔形石器	縦		3.6	0.9	0.7	2.3	下呂石		
368	30	9	楔形石器	横		4.4	4.5	1.8	42.5	下呂石		側調
369	31	9	石 匙	縦		7.0	3.3	0.9	19.2	下呂石	ミ5-4, 4-1	片
370	31	9	石 匙	縦		6.4	2.9	0.7	12.1	下呂石	ミ2-1	片
371	31	9	石 匙	縦		5.8	2.7	0.9	14.0	下呂石	ミ1-6	片・上下逆
372	31	9	石 匙	縦		4.8	2.5	0.7	8.4	下呂石	ミ2-48	片
373	31	9	石 匙	横		4.6	7.3	1.1	26.7	下呂石	ミ5-9, 9-17	片
374	31	9	石 匙	横		3.8	6.8	0.8	14.0	下呂石	ミ5-12, 10-1	片
375	31	9	石 匙	横		3.8	4.1	0.5	7.2	下呂石	ミ4-24	片
376	31	9	石 匙	横		4.1	4.2	0.9	11.1	鉄石英	ミ2?	両
377	31	9	石 匙	横		3.9	5.7	0.7	12.3	下呂石	ミ2	両
378	31	9	石 匙	横		3.9	5.1	0.6	8.2	下呂石	ミ2-8	片
379	31	9	石 匙	横		4.5	4.5	1.5	20.0	下呂石	ミ3-1	両
380	31	9	石 匙	横		3.5	4.8	1.0	13.0	チャート		両
381	31	9	石 匙	横		3.2	3.3	0.6	5.5	サヌカイト	ミ2-36	両
382	31	9	石 匙	横		2.6	3.9	0.7	5.0	チャート	ミ2-2	両
383	31	9	石 匙	横	一部欠	3.4 (3.4)	0.8	7.4	黒耀石	ミ2-50	片・上下逆	
384	31	9	石 匙	横		4.1	4.4	1.0	14.6	下呂石	ミネイチゴ19	両
385	31	9	石 匙	横		2.6	3.7	0.6	6.9	下呂石	ミ5	片
386	31	9	石 匙	横		3.0	2.5	0.6	3.1	下呂石	ミ1-17 P3	片・ツマミ形
387	32	10	石 匙	横		3.8	3.8	0.6	8.5	サヌカイト	ミ5-3-3	両
388	32	10	石 匙	横		4.1	4.7	0.6	9.1	下呂石	ミ2-4-26	両
389	32	10	石 匙	横		4.0	4.2	0.9	13.6	下呂石	ミ12-2, 3-12-??	両
390	32	10	石 匙	横		3.7	6.1	0.6	9.4	下呂石	ミ2-38	両
391	32	10	石 匙	横		3.0	5.1	0.7	7.9	頁岩	ミ2-10	片
392	30	10	石 匙	横		3.1	4.3	0.6	5.6	下呂石	ミ2-3	両

第15表 遺物観察表 石器（3）

遺物番号	挿図番号	國版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)				石材	記入番号	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
393	32	10	石匙	横		2.8	4.3	0.4	4.6	チャート	ミ2-49	両
394	32	10	石匙	横		3.3	3.6	0.7	5.3	下呂石	ミ2-29	片
395	32	10	石匙	横		3.6	3.8	1.0	11.1	下呂石	ミ5-10	両
396	32	10	石匙	横		3.1	3.3	0.6	5.2	下呂石	ミ2-56	両
397	32	10	石匙	横		2.7	3.2	0.6	3.6	下呂石	ミ5-8, 8-22	両
398	32	10	石匙	横		3.5	4.7	0.7	11.3	下呂石	ミ3-3	両
399	32	10	石匙	横		3.1	4.4	0.5	4.6	チャート	ミ4-6	両
400	32	10	石匙	横		3.2	3.8	0.6	5.5	サヌカイト	ミ5-5, 5-9	両
401	32	10	石匙	横		1.9	1.7	0.3	1.1	下呂石	ミ5	片
402	32	10	石匙	横		3.0	4.3	0.6	6.9	下呂石	ミ3-4	両
403	32	10	石匙	横		2.6	3.7	0.5	5.0	チャート	10-6	両
404	32	10	石匙	横		3.0	5.2	0.7	7.1	下呂石		片?
405	32	10	石匙	横		2.5	5.8	0.6	8.0	下呂石	ミ2-35	片
406	32	10	石匙	横		3.6	4.8	0.8	14.4	下呂石	ミ5-6 7-1	両・刃裏
407	32	10	石匙	横		3.3	3.6	0.7	6.7	下呂石	ミ2-57	両
408	32	10	石匙	横		3.3	4.7	0.7	10.3	下呂石	ミ2-43	片?
409	32	10	石匙	横	一部欠	(4.1)	3.7	0.7	7.4	下呂石	ミ2-20	片
410	32	10	石匙	横		4.7	5.7	1.2	22.5	下呂石	ミ2-28	片
411	33	10	石匙	横	一部欠	3.8	5.9	0.8	18.1	下呂石	ミ5-4	片・側の刃
412	33	10	石匙	横		3.3	4.2	0.8	9.2	下呂石	ミ4	片・側の刃
413	33	10	石匙	横		3.7	6.2	0.8	16.5	サヌカイト	ミ4	片
414	33	10	石匙	横		4.3	5.6	1.3	20.7	チャート	ミ4-28, 3-41	片
415	33	10	石匙	横		2.4	5.5	0.5	5.8	下呂石	ミ5-2	片
416	33	10	石匙	横		4.0	5.5	0.9	16.3	サヌカイト	ミ4-3	片
417	33	10	石匙	横	一部欠	3.2	6.1	1.0	15.8	チャート	ミ2-14	片
418	33	10	石匙	横	一部欠	2.8	(4.1)	0.5	5.3	下呂石	ミ-4	片・刃裏
419	33	10	石匙	横		3.1	5.5	1.0	10.1	下呂石	ミ2-11	片
420	33	10	石匙	横		3.8	5.5	0.9	16.8	下呂石	ミ4-6, 3-2	片
421	33	10	石匙	横		3.9	5.3	0.8	12.5	下呂石	ミ1-2	片
422	33	10	石匙	横		3.3	4.0	0.8	9.6	チャート	ミ5-1	片
423	33	10	石匙	横		2.9	5.2	0.7	8.2	下呂石	ミ4-5	両
424	33	10	石匙	横		3.2	5.0	0.8	12.3	チャート	ミ2-40	両
425	33	10	石匙	横		3.8	2.8	0.7	6.8	下呂石	ミ4-6	両
426	33	10	石匙	横		2.7	3.7	0.4	4.6	下呂石	ミ-5	片・側の刃
427	33	10	石匙	横	一部欠	(2.1)	2.3	0.6	3.0	下呂石	ミ2-16	片・側の刃
428	33	10	石匙	横		2.2	1.9	0.4	1.5	下呂石	ミ5	片
429	34	10	石匙	横	一部欠	3.2	(3.9)	0.4	6.1	下呂石	ミ5-5, 3-29	両
430	34	10	石匙	横		3.4	5.5	0.8	12.1	サヌカイト	ミ2	片
431	34	10	石匙	横		3.4	4.3	1.2	12.0	下呂石	ミ5-11, 9-108	片
432	34	10	石匙	横		4.6	6.0	1.4	30.1	下呂石	ミ5	片
433	34	10	石匙	横	一部欠	(4.3)	7.0	1.1	25.0	サヌカイト	ミ5	片

第16表 遺物観察表 石器（4）

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)				石材	記入番号	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
434	34	10	石匙	横		2.7	4.2	0.8	9.7	チャート	ミ4	片
435	34	10	石匙	横		4.3	5.5	0.7	17.7	頁岩	ミ4	片
436	34	10	石匙	横		3.5	5.3	0.8	11.9	頁岩	ミ4-11	片・側の刃
437	34	10	石匙	横		4.3	5.8	0.9	17.3	下呂石	ミ4-24, 2-2	片
438	34	10	石匙	横		3.3	5.4	0.8	9.2	下呂石	ミ5-19, 10-31	片
439	34	10	石匙	横		3.6	5.3	0.8	18.1	下呂石	ミ3-2	片
440	34	10	石匙	横		2.6	4.8	0.5	6.1	チャート	ミ2-5	片・側の刃
441	34	10	石匙	横		2.2	4.7	0.6	5.8	下呂石	ミ2-37	片
442	34	10	石匙	横		1.8	2.1	0.3	0.9	下呂石	ミ-5	両
443	34	10	石匙	横		1.8	1.8	0.3	0.7	チャート	ミ2-53	両
444	34	10	石匙	横		2.1	1.6	0.3	1.0	黒耀石	ミ4	両・やや磨滅
445	34	10	石匙	横		1.2	1.7	0.2	0.5	下呂石	ミ2-27	片
446	34	10	石匙	横	一部欠	2.0	2.5	0.4	1.7	下呂石	ミ2-19	両
447	34	10	石匙	横		1.9	2.2	0.3	1.2	下呂石	ミ5-10	両
448	34	10	石匙未成品	綴		5.5	4.0	1.4	29.3	下呂石	ミ1-6	片・上下逆
449	35	10	石匙未成品	横	1/3欠	3.7	(6.0)	1.0	(18.2)	下呂石		
450	35	10	石匙未成品	横		3.5	5.0	0.9	14.0	下呂石	ミ5-17	片
451	35	10	石匙未成品	横		5.3	7.0	1.4	31.8	下呂石	ミ5-9	両
452	35	10	石匙未成品	横		4.9	6.6	1.5	40.5	下呂石	ミ5	両
453	35	10	石匙未成品	横		5.3	5.8	1.3	37.6	下呂石	ミ5-41	片・刃裏
454	35	10	石匙未成品	横		2.9	4.4	0.6	7.4	下呂石	ミ4-5, D-1-19	片・側の刃?
455	35	10	石匙未成品	横		3.2	4.8	1.0	14.5	下呂石	ミ4	片・側の刃
456	35	10	石匙未成品	横		4.4	4.7	0.7	12.9	下呂石	ミ4-24	片
457	35	10	石匙未成品	横		4.2	5.8	1.6	25.7	下呂石	ミ4-13?	片
458	35	10	石匙未成品	横		4.7	5.4	1.2	29.5	下呂石	ミ3	片・刃裏
459	35	10	石匙未成品	横		4.8	7.1	1.3	27.9	下呂石	ミ4-3	上下逆
460	36	11	搔器	綴		8.3	3.7	1.0	29.0	下呂石	ミ5-9, 10-31	基調
461	36	11	搔器	綴		5.0	3.0	0.9	12.3	下呂石	ミ1-2, SB1床	基調
462	36	11	搔器	綴		5.2	3.6	0.8	13.2	下呂石	ミ1-1, SB1床	基調
463	36	11	搔器	綴		3.5	2.4	0.9	9.0	チャート		基調
464	36	11	搔器	綴		4.7	3.7	1.4	21.5	下呂石		基調
465	36	11	搔器	綴		4.1	2.1	0.5	4.6	下呂石		
466	36	11	搔器	綴		4.2	2.5	0.5	6.1	下呂石	ミ2-18	基調
467	36	11	搔器	綴		6.8	5.6	1.4	57.8	下呂石	ミ-4	基調
468	36	11	搔器	綴		3.5	5.1	1.1	23.3	下呂石	ミ2-11	刃が裏
469	36	11	搔器	綴		3.5	3.4	0.8	11.4	下呂石	ミ1	基調
470	36	11	搔器	綴		3.6	4.1	1.1	15.7	チャート	ミ1-25	
471	36	11	搔器	抉入		9.7	5.5	1.9	99.7	下呂石	ミ4	片
472A	36	11	搔器	抉入		3.7	3.0	1.2	14.2	下呂石		両
472B	37	11	削器	横		10.5	4.0	1.1	39.3	下呂石	ミ2-4	片
473	37	11	削器	横		8.2	3.7	0.9	33.2	下呂石	ミ2	両・基調

第17表 遺物觀察表 石器 (5)

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)				石材	記入番号	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
474	37	11	削器	横		6.2	4.3	1.1	34.3	下呂石	ミ5-19, 10-26	両・基調
475	37	11	削器	横		6.7	4.0	1.5	37.8	チャート	ミ2	片
476	37	11	削器	横		5.3	4.2	1.1	22.9	下呂石	ミ5-86	片
477	37	11	削器	横		5.1	4.0	1.1	28.3	下呂石	ミ2-4, 62	片・基調
478	37	11	削器	横		5.3	3.4	0.8	14.2	下呂石	ミ5-75	片
479	37	11	削器	円周		3.8	3.4	1.1	13.5	下呂石	ミ2-4	両
480	37	11	削器	円周		5.0	4.5	1.1	23.2	下呂石	ミ-2	両
481	38	11	尖頭器		½	?	3.2	1.0		下呂石	ミ5-10, 9-84	
482	38	11	尖頭器		½					サヌカイト		
483	38	11	尖頭器未成品		⅔					下呂石	ミ5-16	
484	38	11	有舌尖頭器		一部欠	?	1.9	0.7		チャート		
485	38	9	小石刀			20.8	4.7	0.9	105.9	サヌカイト		
486	38	9	分銅形石器			11.1	7.0	2.7	179.7	下呂石		
487	38	11	玦状耳飾		½					蛇紋岩		
488	38	11	玦状耳飾		⅓					滑石	ミ5-20, 10-53	
489	38	11	玦状耳飾		½					軟玉	ミ5-11, 9-92	
490	38	11	玦状耳飾		一部欠					滑石	ミ2	
491	38	11	玦状耳飾		¼					滑石		
492	38	11	玦状耳飾		½					蛇紋岩		風化
493	38	11	玦状耳飾		⅔					粘板岩	ミ5-11, 16-7	
494	38	11	勾玉			1.0	0.6	0.25	0.3	蛇紋岩	ミ1~?	
495	39	12	礫石錐			4.9	2.3	1.3	20.0	粘板岩	ミ-4-6	
496	39	12	礫石錐			3.9	3.0	1.9	32.0	砂岩	ミ-1-13	
497	39	12	礫石錐			4.4	3.3	2.0	40.0	砂岩	ミ4	
498	39	12	礫石錐			4.7	3.6	3.0	75.0	砂岩	ミ5-11, 12-20	叩石的
499	39	12	礫石錐			4.4	3.8	1.9	41.0	砂岩	ミ4-28, 2-53	
500	39	12	礫石錐			5.2	3.7	1.8	54.0	砂岩	ミ4	
501	39	12	礫石錐			5.0	4.2	2.1	60.0	砂岩	ミ1-3	
502	39	12	礫石錐			5.5	4.6	1.9	62.0	流紋岩	ミ1-12	
503	39	12	礫石錐			4.6	4.0	2.0	54.0	砂岩	ミ1-8	
504	39	12	礫石錐			5.0	4.1	1.5	40.0	流紋岩	ミ4-11	
505	39	12	礫石錐			5.2	4.4	2.7	89.0	流紋岩	ミ4	
506	39	12	礫石錐			5.7	4.2	2.2	68.0	流紋岩	ミ4-2	
507	39	12	礫石錐			5.3	4.3	2.6	80.0	流紋岩	ミ4	
508	39	12	礫石錐			5.3	4.1	2.1	60.0	流紋岩	ミ1	
509	39	12	礫石錐			5.5	4.5	2.5	76.0	流紋岩	ミ2-44	
510	39	12	礫石錐			4.6	4.3	2.8	84.0	流紋岩	ミ4-6 3-7	
511	36	12	礫石錐			6.1	4.6	1.7	66.0	流紋岩	ミ4-2	煤
512	39	12	礫石錐			6.1	4.0	1.6	55.0	流紋岩	ミ4-3	煤
513	39	12	礫石錐			6.1	4.5	2.5	96.0	砂岩	ミ1	
514	39	12	礫石錐			5.8	4.8	2.5	100.0	流紋岩	ミ4-5, D-1-8	煤・糸掛け

第18表 遺物観察表 石器 (6)

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)				石材	記入番号	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
515	39	12	礫石錐			6.7	3.9	2.3	85.0	流紋岩	ミ4-5, D-1-9	煤
516	39	12	礫石錐			5.1	5.1	2.2	90.0	砂岩	ミ4-3	切目的
517	39	12	礫石錐			5.7	4.6	1.4	55.0	流紋岩	ミ4-24, 3-8	
518	39	12	礫石錐			5.5	4.4	1.8	69.0	流紋岩	ミ2	
519	40	12	礫石錐			9.2	5.0	1.0	76.0	ホルンブレス	ミ5-8	糸掛け
520	40	12	礫石錐			6.0	5.2	2.7	125.0	砂岩	ミ-D	切目的
521	40	12	礫石錐			7.0	6.5	2.1	142.0	砂岩	ミ5-10	
522	40	12	礫石錐			5.7	4.8	2.0	70.0	流紋岩	ミ4-2	煤
523	40	12	礫石錐			5.4	4.8	2.3	93.0	砂岩	ミ-D	切目的
524	40	12	礫石錐			5.6	4.3	1.8	55.0	砂岩	ミ4-6	
525	40	12	礫石錐			6.4	4.7	2.0	92.0	流紋岩	ミ4-28, 2-55	
526	40	12	礫石錐			6.1	4.1	1.7	65.0	砂岩	ミ5	
527	40	12	礫石錐			6.5	5.4	1.5	86.0	流紋岩	ミ1	
528	40	12	礫石錐			6.7	5.1	2.3	108.0	流紋岩	ミ1-9	
529	40	12	礫石錐			6.6	4.2	2.5	115.0	安山岩	ミ2-2	
530	40	12	礫石錐			5.2	5.1	2.0	79.0	流紋岩	ミ4	
531	40	12	礫石錐			7.8	4.4	1.8	81.0	砂岩	ミ4	
532	40	12	礫石錐			6.2	4.4	1.8	67.0	砂岩	ミ4-4	
533	40	12	礫石錐			8.3	4.2	2.2	118.0	砂岩	ミ2-20	
534	40	12	礫石錐			6.1	5.7	2.3	117.0	流紋岩	ミ4	
535	40	12	礫石錐			6.0	5.1	2.0	89.0	流紋岩	ミ2-6	
536	41	12	礫石錐			8.4	6.6	2.7	216.0	流紋岩	ミ1	
537	41	12	礫石錐			5.7	6.8	2.5	140.0	砂岩	ミ4-6	
538	41	12	礫石錐			6.7	5.9	2.7	140.0	流紋岩	ミ4-27, 2-25	
539	41	12	礫石錐			6.9	5.5	2.5	130.0	流紋岩	ミ1	
540	41	12	礫石錐			7.3	5.4	2.6	145.0	砂岩	ミ1-1	
541	41	12	礫石錐			7.3	6.4	2.5	140.0	砂岩	ミ4-28, 2-51	
542	41	12	礫石錐			8.0	7.2	2.5	186.0	流紋岩	ミ1	
543	41	12	礫石錐			8.3	6.0	2.6	183.0	流紋岩	ミ4-6	
544	41	12	礫石錐			5.7	5.3	2.6	115.0	流紋岩	ミ4	
545	41	12	礫石錐			8.0	5.3	2.3	145.0	砂岩	ミ2-62	打痕あり
546	41	12	礫石錐			6.0	5.1	2.4	105.0	流紋岩	ミ5-7	
547	41	12	石錐			10.4	8.9	4.4	605.0	流紋岩	ミ5-21, 10-66	麻石3.1を細用
548	41	12	切目石錐		%3					粘板岩	ミ5-8, 8-23	鉛筆に墨跡あり
549	42	12	叩石			6.1	2.9	1.7	50.0	砂岩		グリップ幅8.7cm
550	42	12	叩石			3.6	3.6	1.7	40.0	砂岩		グリップ幅10.1cm
551	42	12	叩石			7.1	4.6	4.1	170.0	流紋岩	ミ4-28, 2-53	グリップ幅14.2cm
552	42	12	叩石			5.8	4.4	3.3	110.0	流紋岩		グリップ幅12.9cm
553	42	12	叩石		一部欠	11.5	4.9	4.0	300.0	砂岩	ミ-4	グリップ幅14.3cm
554	42	12	叩石			9.7	7.1	5.5	570.0	流紋岩	ミ2-4, 38	グリップ幅20.8cm
555	43	12	叩石			6.5	4.4	3.3	145.0	流紋岩	ミ4-28, 2-53	グリップ幅13.3cm

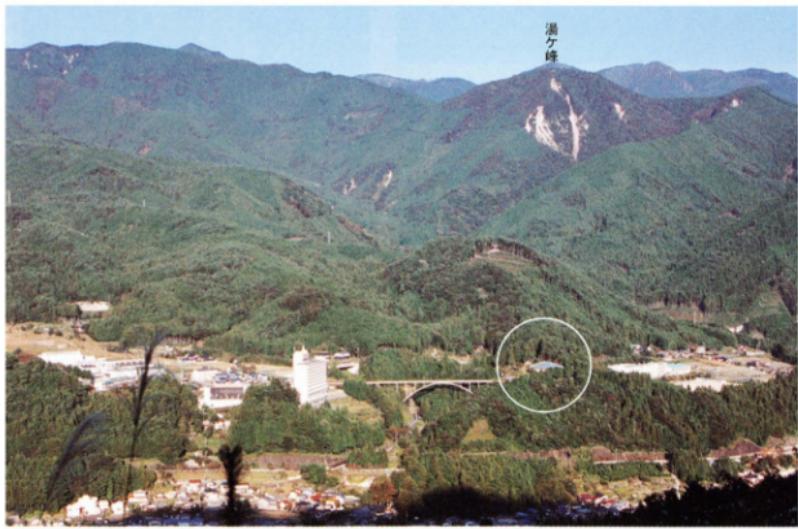
第19表 遺物観察表 石器 (7)

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺物名	器形	残存率	法量(cm, g)			石材	記入番号	備考	
						長さ	幅	厚さ				
556	43	12	叩石			11.8	5.3	5.1	420.0	流紋岩	ミ5	グリップ幅17.1cm
557	43	12	叩石			9.2	6.3	4.3	340.0	砂岩	ミ4	グリップ幅17.1cm
558	43	12	叩石			9.9	4.2	3.3	210.0	砂岩	ミ6-1, 29	グリップ幅12.5cm
559	43	13	磨製石斧	定角		4.6	1.4	0.6	6.0	蛇紋岩		
560	43	13	磨製石斧		½	4.3	1.3			軟玉	ミ2-2	
561	43	13	磨製石斧	定角		6.8	4.4	1.2	67.0	蛇紋岩	ミ4-7-3-32	
562	44	13	磨製石斧	定角	一部欠	8.7	4.8	2.0	123.0	蛇紋岩	ミ5-8	
563	44	13	磨製石斧			½	4.5	2.0		蛇紋岩	ミ5-9	
564	44	13	磨製石斧	定角		7.8	4.5	2.5	145.0	蛇紋岩	ミ5-10	
565	44	13	磨製石斧	定角		10.7	6.2	2.6	281.0	蛇紋岩		
566	44	13	磨製石斧	定角	一部欠	9.8	4.5	2.4	176.0	蛇紋岩		
567	44	13	磨製石斧	定角		10.0	4.5	1.8	139.0	蛇紋岩	ミ5-18, 8-1	今回接合
568	44	13	磨製石斧	定角		13.1	5.4	3.0	337.0	砂岩?		
569	44	13	磨製石斧	定角		9.6	4.6	2.1	141.0	蛇紋岩	ミ4-27, 2-32	
570	44	13	磨製石斧	定角		11.9	5.4	2.6	185.0	蛇紋岩?	ミ1-1	透化・〇〇・鉛色
571	45	13	磨製石斧	定角	一部欠	14.1	7.0	3.5	462.0	流紋岩	ミ6, オ183	
572	45	13	打製石斧	短冊		8.9	3.8	1.3	60.0	流紋岩	ミ6-オ-38	
573	45	13	打製石斧	短冊		14.2	5.2	2.6	240.0	砂岩	ミ6 オ-187	
574	45	13	打製石斧	短冊		10.8	4.7	1.8	125.0	流紋岩	SB1上 3 ミ1	
575	45	13	打製石斧	短冊		9.8	4.8	1.7	110.0	砂岩		
576	45	13	打製石斧	揆		15.5	9.2	3.2	520.0	流紋岩	ミ6 オ87	
577	45	13	打製石斧	短冊		12.0	4.9	2.1	174.0	流紋岩	ミ5-2	
578	45	13	打製石斧	短冊		11.2	4.7	1.8	110.0	頁岩	ミ6 オ136	
579	46	13	打製石斧	分綱	一部欠	12.7	6.0	2.7	250.0	安山岩		
580	46	13	打製石斧	揆		15.0	7.2	2.2	270.0	流紋岩	ミ6 オ125	
581	46	13	打製石斧	揆		13.8	6.9	2.1	240.0	砂岩	ミ6 オ255	
582	46	13	打製石斧	短冊	一部欠	24.1	8.1	3.6	962.0	流紋岩	ミ6 オ193	
583	46	13	打製石斧	短冊		15.7	5.7	2.7	338.0	砂岩	ミ6 オ241	
584	46	13	打製石斧	短冊		12.5	4.6	2.0	145.0	流紋岩	ミ-0	
585	46	13	打製石斧	短冊		9.7	5.4	1.9	120.0	流紋岩	ミ6 オ130	
586	47	13	磨石 A I			6.1	4.9	3.1	140.0	安山岩		グリップ幅13.4cm
587	47	13	磨石 A I			11.3	5.9	4.3	430.0	流紋岩		グリップ幅16.9cm
588	47	13	磨石 A II			5.0	3.6	1.9	51.0	砂岩	ミ5-4	グリップ幅 後 16.8cm
589	47	13	磨石 A II			7.7	5.8	3.2	208.0	流紋岩		グリップ幅15.1cm
590	47	13	磨石 A II			5.7	4.7	4.2	162.0	流紋岩		グリップ幅 後 14.3cm
591	47	13	磨石 A II			7.8	4.4	3.1	164.0	砂岩	ミ5-5, 4-7	グリップ幅 後 12.5cm
592	47	13	磨石 A II			5.6	5.1	2.7	104.0	砂岩	ミ2-79	グリップ幅 前円 13.6cm
593	47	13	磨石 A II			9.2	4.5	3.1	190.0	砂岩		グリップ幅 後 13.3cm
594	48	14	磨石 A II			9.3	5.7	2.9	230.0	砂岩	ミ4	グリップ幅15.2cm
595	48	14	磨石 A II			6.3	4.0	2.6	95.0	砂岩	ミ2-9	グリップ幅11.3cm
596	48	14	磨石 B I			15.5	6.4	5.7	840.0	流紋岩		





1. 昭和40年代初期



2. 平成15年10月現在

図版1 遺跡の遠望（西方より）



細江芳矩  
松原弘展  
大江上  
田口昭二  
川上登  
松田典夫  
大江命

1. 第6次調査のメンバー（昭和45年）



2. 3号住居址



3. 246の出土状況

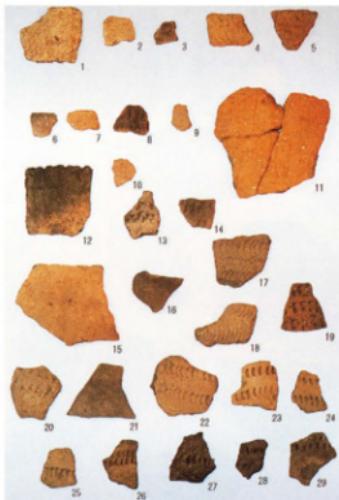


4. 発掘状況



5. 磚石錘群の出土状況

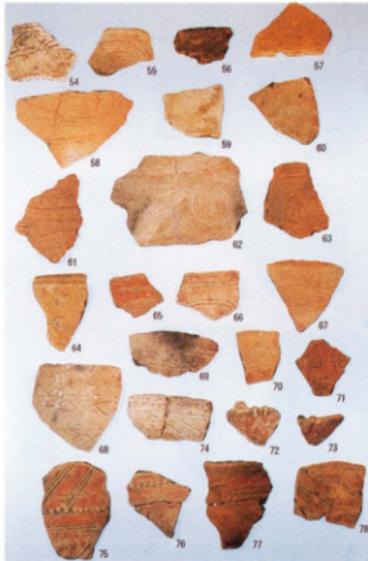
## 図版2 調査の状況



(1)



(2)



(3)

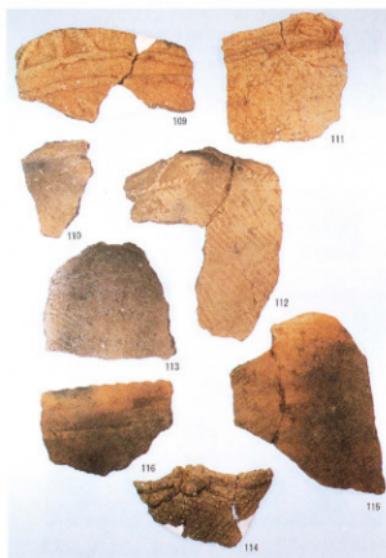


(4)

図版3 土器 (1~4)



(5)



(6)



(7)

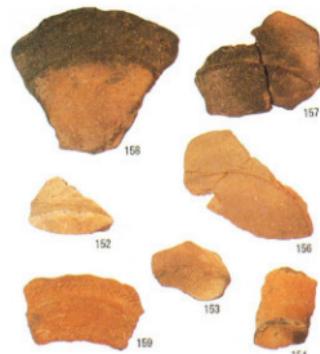


(8)

図版4 土器(5~8)



(9)



(10)一部



(11)



(12)

図版5 土器 (9~12)



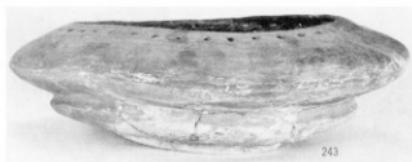
240



241



242



243



244



245



247



246

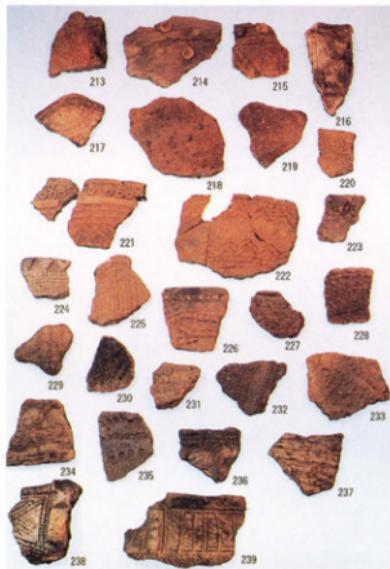
圖版 6 土器 (16、17)



(13)



(14)

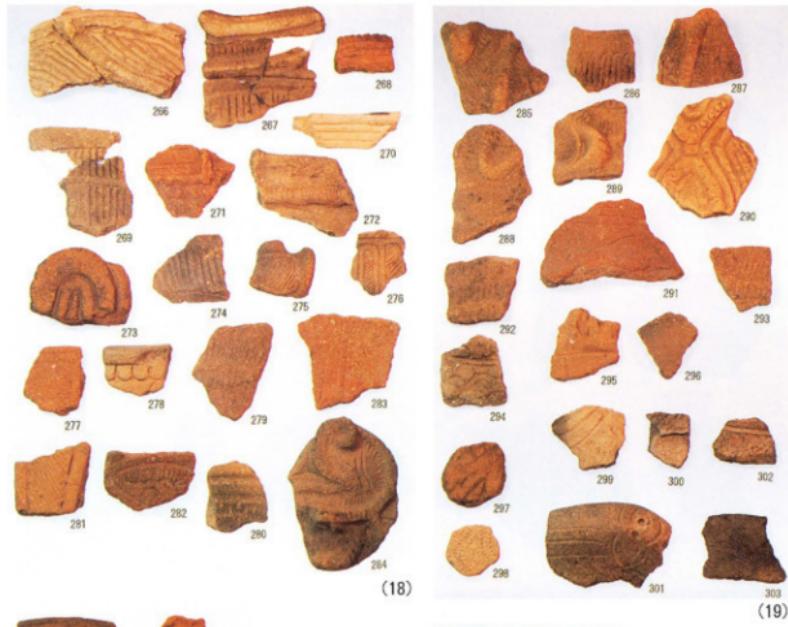


(15)



(17)

図版 7 土器 (13~15、17)



(18)

(19)



図版 8 土器 (18~20)



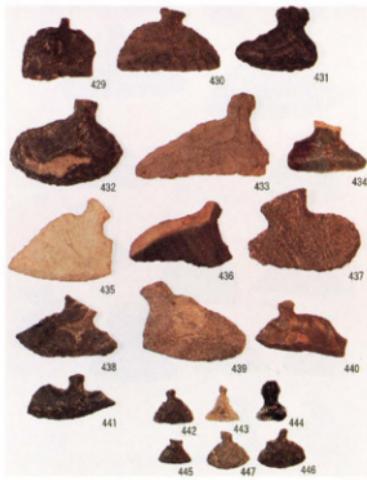
図版9 石器 (1~4、11)



(5)



(6)

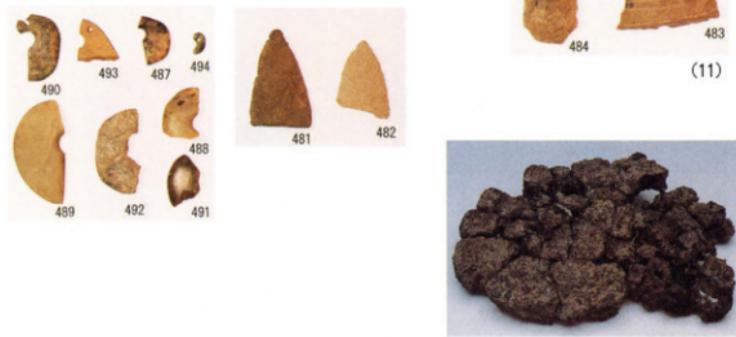
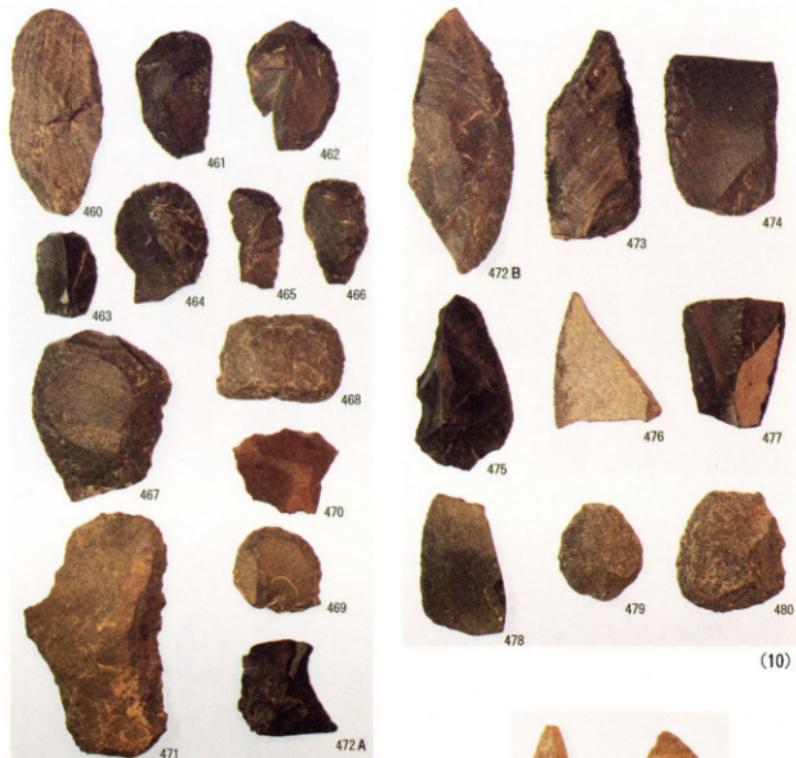


(7)

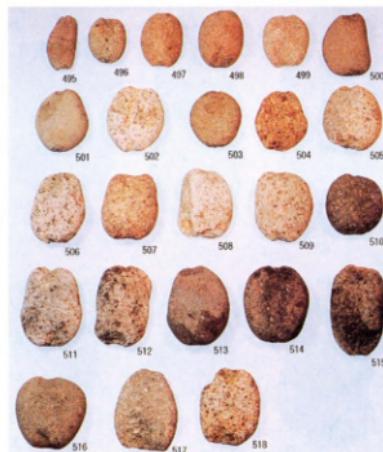


(8)

図版10 石器 (5~8)



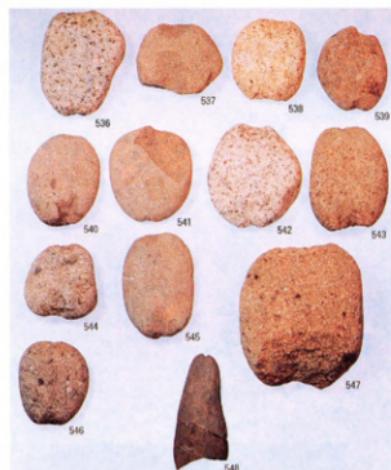
図版11 石器・パン状炭化物（9～11）



(12)



(13)



(14)

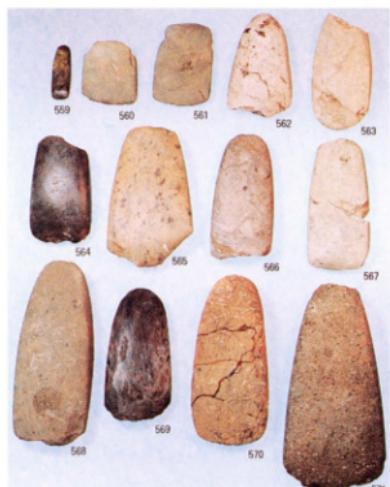


(15)

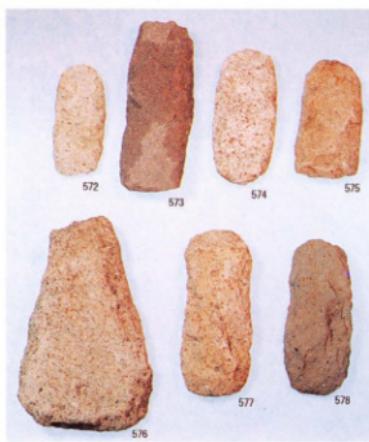


(16)

図版12 石器 (12~16一部)



(16~18)



(18)

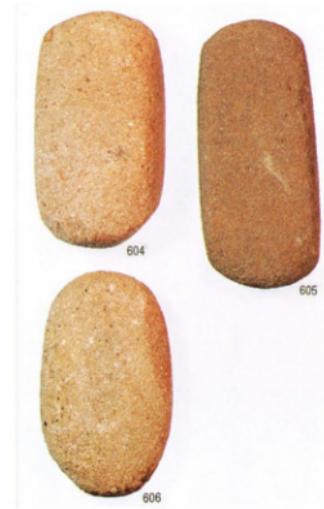
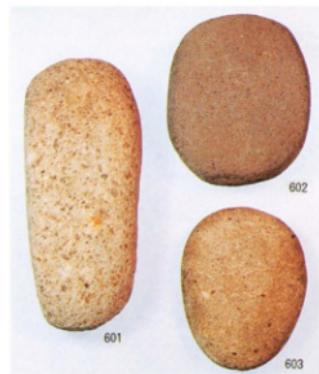
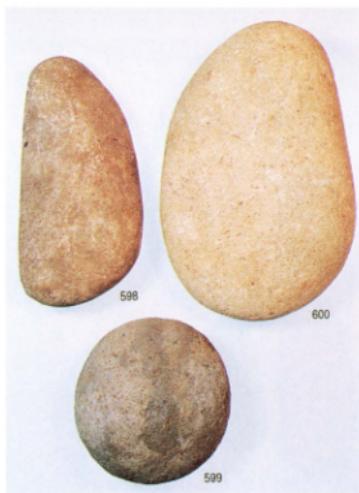
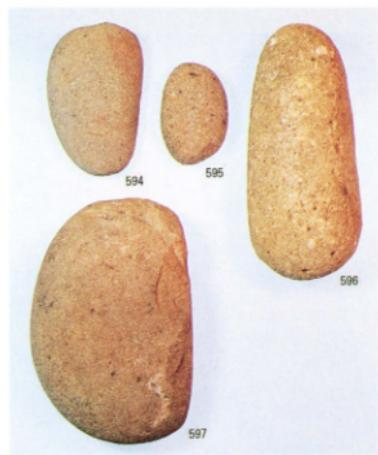


(19)



(20)

図版13 石器 (16~20)



図版14 石器 (21~25)



609



610



612



611



613



614



615



616



617



618



619



620

図版15 石器 (26~28)

峰一合遺跡（発掘調査報告書）

平成15年12月1日発行

発 行 岐阜県益田郡下呂町森

〒509-2202 TEL(0576)25-2252

下呂町教育委員会

印 刷 岐阜県加茂郡富加町高畠333-1

中 部 印 刷 傘

